R E H K

第 2 号

目　次

《講　演》
ドン・ファン・マヌエル私論 —『ルカノール伯爵』を中心に—
……木 原 太 源 (1)
La España de nuestra época ……Fernando SAVATER (13)
《論　文》
La Institución Libre de Enseñanza-escuela progresista
de España en el siglo XIX ……Yukari ITO (25)
La obra mestiza del Inca Garcilaso de la Vega ……Lilia OTA (35)
プエルトリコ女性解放における米国の影響 ……志 柿 禎 子 (47)
Agustín Iturbide: el surgimiento de la clase militar
durante la Guerra de la Independencia……Reiko TATEIWA (55)
《評　論》
「赤い薔薇ソースの伝説」
—*Como agua para chocolate* をめぐって—……西 村 英一郎 (67)
《書　評》
Antonio Garrido Domínguez: *Los Orígenes del Español de América*, Mapfre, Madrid, 1992, pp.290. ……岡 本 信 照 (71)
Isabel Allende: *Eva Luna*, Editorial Sudamericana S.A., Buenos Aires, 1987, pp.278. ……梅 田 美代子 (77)
《翻　訳》
フェルナンド・デ・フエンテス他
〈ピト・ペレス、波乱の人生〉(1) ……片 倉 充 造 訳 (81)

1994

京都外国語大学イスパニア語学科修士会

ドン・フアン・マヌエル私論

——『ルカノール伯爵』を中心に——

木 原 太 源

これからしばらくの間お話し致しますことは、みなさんよくご存じの、14世紀のスペインを代表する作品のひとつである『ルカノール伯爵、または、ルカノール伯爵とパトローニオの教訓談の書』の作者ドン・フアン・マヌエルについてであります。そのために、幾つかの資料を参考にしておりますが、出版社カスタリアのclásicos castalia叢書中のJosé Manuel Blecua編集による『El Conde Lucanor o libro de los enxiemplos del conde Lucanor et de Patronio』と、Andrés Giménez Solerが1932年にサラゴサで出版した『Don Juan Manuel, biografía y estudio crítico』を主にしておりますことを、まずはじめにお断りしておきます。

この『ルカノール伯爵』という作品は全体が五つの部（parte）から構成されています。しかしながら、何と言っても一番興味深いのは、五十一の譬話、つまり五十一の教訓談からなる『Libro de los enxiemplos』と名付けられている第一部の書であることは言うまでもありません。スペイン中世の数ある説話文学作品の中にあって傑出した作品であると言う理由だけからではなく、時代との緊密な関係の中でその生涯を送った作者ドン・フアン・マヌエルという人物の一端を、作品を通して観ることができるからであります。そこで、まず初めにドン・フアン・マヌエルの略歴を少し紹介しておきたいとおもいます。

ドン・フアン・マヌエルの父ドン・マヌエル親王（Infante Don Manuel ?～1283）は、聖王フェルナンド3世（Fernando III el Santo 1201?～1252）と母ドニャ・ベアトリース・デ・スワービア（Doña Beatriz de Suavia ?～1235）の七男として生をうけました。長兄は賢王アルフォンソ10世（Alfonso X el Sabio 1221～1284）であります。ドン・フアン・マヌエルの母ドニャ・ベアトリース・デ・サボーヤ（Doña Beatriz de Saboya ?～1290）は父親の後妻でした。先妻ドニャ・コンスタンサ・デ・アラゴン（Doña Constanza de Alagón ?～?）との間に彼の父は一男一女のアルフォンソとヴィオァンテという二人の子供をも

うけておりました。ところが、異母兄のアルフォンソが夭折したため、ドン・フアン・マヌエルがマヌエル家の跡継ぎとなります。異母姉のヴィオランテは長じて後、ポルトガルの王子ドン・アルフォンソと結婚し、両親より長寿に恵まれますが、1306年死去します。巷間では夫に暗殺されたとの噂が流れたそうであります。

ところで、ドン・フアン・マヌエルは1282年5月6日、トレード県のエスカローナで生まれました。不幸なことに、生後2年目の1284年（Alianzaの1981年版『スペイン史辞典』では1283年と記しています）には父親と、さらに8年目の1290年には母親と死別することになります。幼くして彼は、祖父フェルナンド3世死去の翌年、父が長兄のアルフォンソ10世から与えられていた領地の主となります。領地は主にエルチェをはじめ半島の南東部に点在していました。また、国王と同じ権限をその領地内で行使できるムルシア王国の大総督の地位も受け継ぎました。これらの領地は、カスティーリャ、アラゴン、グラナダといった大国の国境と接する所に位置していましたので、常に大国間の政争に翻弄される小国の運命を甘受することになります。この領地の地理的な状況が彼の運命を定め、さらに彼の精神を形成するひとつの要因となったのでは、と推測されるほど厳しいものでありました。それゆえ、ドン・フアン・マヌエルの生涯は、自らの権益をいかに死守し、さらに大きくするかに腐心した一生でありました。

さて、ここで、カスティーリャ王家の跡目をめぐる、つまり王位継承にまつわる争いについて少し触れておきます。ドン・フアン・マヌエルの父親は彼が満2歳になる前に他界したということはすでに述べました。その後8歳までは母親の手で育てられたのですが、彼の後見人となって父親の役目を果してくれたのは、彼とはいとこ同士の関係になるサンチョ4世（Sancho IV？～1295）でした。彼はアルフォンソ10世の次男でありますから、王位継承権を得る順位から遠い存在であることは言うまでもありません。ところが、アルフォンソ10世の後継者、つまりサンチョ4世の兄であるフェルナンド・デ・ラ・セルダ（Fernando de la Celda 1250?～1275）が、アンダルシア辺境地へ遠征中に、25歳の若さで亡くなります。当然、正当な王位継承者は遺児のアルフォンソになります。しかしサンチョは、兄の幼い遺児をさしおいて、王位継承者になることを宣言します。父親のアルフォンソ10世は次男の宣言にためらいつつも初めは黙認しますが、やがて異を唱えると、その後は息子サンチョを崩御するまで非難し続けることになります。亡兄の遺児の存在と

彼らの王位への熱望、加えて遺児を担ぐ者たちの思惑とが、以後のカスティーリャ王家をますます混乱させることになります。1295年にサンチョ4世が他界すると、直ちに混乱が生じ始めます。残された未亡人マリーア・デ・モリーナ（María de Molina ?～1321）と幼い後継者フェルナンドの前途には、王位を強要するサンチョ4世の弟ドン・フアン親王やセルダの遺児たちとの長期にわたる苦闘が待ち受けることになります。この混乱に乗じてアラゴン王が動き出します。アラゴン王はサンチョ4世が王位に就いた時、身の危険を感じて避難してきたフェルナンド・デ・ラ・セルダの未亡人と遺児たちの保護者になっておりました。未亡人と遺児はその見返りとしてアラゴン王に、ドン・フアン・マヌエルが父親の遺産として相続していたムルシア王国の大総督の地位を譲渡していました。このような理不尽なことが行われたのは、おそらく、ドン・フアン・マヌエルの父親が常に甥のサンチョ4世を支援していたからでありましょう。アラゴン王は、ムルシアに対する権利を確保しようと1296年に兵を起こします。当時ドン・フアン・マヌエルはいまだ若干14歳でした。最初の衝突はアリカンテでしたが、アラゴン軍はさらにエルチェにまで進撃してきました。敵の攻撃を抑止できないことが分かった時、ドン・フアン・マヌエルはアラゴン王の権限が自領のエルチェにまで及ぶのを認めざるをえませんでした。そこで、彼は奪われたエルチェの代替地を、幼い国王の母親であるマリーア・デ・モリーナに執拗に要求します。この執拗な要求に王母はアラルコンを与えます。生前のサンチョ4世は、幼いドン・フアン・マヌエルの後見人として、何くれとなく面倒をみてくれた人でした。しかしながら、彼は、サンチョ4世死後発生した王位継承問題では、幼い国王フェルナンド4世の側に立とうとはしなくなります。それは、アラルコンをマヌエル家の長子相続財産にしようとする彼の執拗な要求を王母が容認しなかったことから、反カスティーリャ王勢力側に立つことになるからです。彼の思惑はエルチェを取り戻し、さらに、アラルコン及びアラゴン王国の脅威にさらされている半島の南東部に在る領地を安全に保有することにありました。

ところで、1299年、17歳のドン・フアン・マヌエルはサンチョ4世が生前に定めておいてくれたマヨルカの王女イサベル（Infanta Isabel de Mallorca ?～1301）と結婚します。ところが、2年後の1301年に彼女は病没します。反フェルナンド4世派のグループはアラゴン王の支援が得られれば、セルダの遺児アルフォンソを担ぎ出すことで合意します。そこで、ドン・フアン・マヌ

エルがアラゴン王ハイメ２世（Jaime II de Aragón 1264～1327）と単独で会見し、カスティーリャの情勢を語ります。その際、王女コンスタンサとの結婚を許可してほしいと願いでます。アラゴン王とのつながりを確保しようとしたからにほかなりません。この婚約が正式に文書で交わされたのは1309年で、ドン・フアン・マヌエルは24歳、王女コンスタンサはまだ６歳にしか過ぎませんでした。両者の結婚は６年後の1312年に行われました。その間に、カスティーリャとアラゴンのムルシアを巡っての争いに終止符が打たれ、ムルシアの大部分はアラゴンの領土に併合されてしまいました。その結果、エルチェの周辺地域がアラゴン王国に併合されたために、両王国の国境が彼の領地を包囲するような状態になりました。そこで、今度はアラゴン王に執拗に圧力をかけ始めることになります。手を焼いたアラゴン王は、なだめようとアラルコンと引き替えにカルタヘーナを与えます。1309年、カスティーリャ王フェルナンド４世とアラゴン王ハイメ２世がキリスト教徒側の手薄な辺境地域に対するイスラム教徒の度重なる襲撃に業を煮やし、グラナダ王国を攻めることで協定を結びます。カスティーリャ王は貴族たちに参戦を求めます。ドン・フアン・マヌエルは、参加報酬が得られないことから気乗りしないまま参戦しますが、翌年の1310年、戦場を離脱します。彼と行動を共にする者がいたために、この作戦は成功しませんでした。この背信行為にカスティーリャ王は激怒します。そのために、彼はしばらくの間レオン王国内を逃げ回ることになります。乱世を巧みに生き抜く手腕は老獪な政治家の風情ではありますが、年齢はまだ27歳でした。２年後の1312年４月、ドン・フアン・マヌエルは12歳のアラゴンの王女コンスタンサと結婚します。二人の女子を授かりますが、マヌエル家の跡継ぎには恵まれませんでした。コンスタンサは長らく胸を患っていましたが、1327年に病没します。その２年後、47歳のドン・フアン・マヌエルは賢王アルフォンソ10世の孫フェルナンドとファーナ・ヌーニェス・デ・ラーラの娘ブランカと結婚します。この結婚は彼の懐具合いを大いに潤すことになります。先妻コンスタンサの父親、すなわち彼にとっては義父であるアラゴン王ハイメ２世は娘の死の二か月後に崩御していましたので、新たなる強力な後ろ盾を必要としていたドン・フアン・マヌエルには大助かりでした。この時、カスティーリャはフェルナンド４世の子、アルフォンソ11世（Alfonso XI 1311～1350）の時代でした。アルフォンソが10歳のとき、摂政役の王母マリーア・デ・モリーナが他界したため、幼少の王が成人式を迎える五年後まで、ドン・フアン・マヌエルを含む三名が後見

人となって政治を預かることになります。その間も、将来の政治的な立場の強化を図ろうと、彼は少年王アルフォンソとアラゴン王の娘との結婚話をもちかけたりします。しかしながら、1326年夏、成人したアルフォンソ11世が正式にカスティーリャの王位に就くと、三人は摂政の地位を返上することになります。ドン・フアン・マヌエルはその後も自分の存在を青年王に訴えるべく様々な手段を講じますが、乗じる隙を見い出せないほど、青年王の行動は俊敏でした。以後は政治の表舞台から身を引かざるをえなくなってゆきます。

ところで、カスティーリャが大きな混乱状態に入ったのは、サンチョ4世が崩御した1295年から、その子フェルナンド4世の時代とアルフォンソ11世が成人するまでの三十有余年に及んでいます。この期間はドン・フアン・マヌエルの13歳から45歳までの人生に相当します。この人生の最盛期について、彼、ドン・フアン・マヌエルは『教訓談の書』の第三話「イングランドのリチャード王が回教徒と戦うために海に跳び込んだ事について」の冒頭で、ルカノール伯爵の口を借りて助言者パトローニオにしみじみとこのように語っています。「余のこれまでの人生は、生まれてからこの方まで常に戦いの明け暮れであり、その中で余は成人し、今日まで生きながらえて来た。あるときはキリスト教徒と、またあるときは回教徒との戦いであった。さもなくば絶えずその時々の余が臣従する王や、周囲の諸侯たちとの争いであった。余が原因で争いが持ち上がることのなきよう常に心してはいたが、キリスト教徒と戦を始めると、罪の無い大勢の人々に多大なる被害を及ぼすのを避けることはできなかった」と。

さて、いよいよドン・フアン・マヌエルという人物について触れねばなりませんが、このように観てきますと、先述しました彼の領地の地理的な状況が、彼の運命を定めた重要な要因のひとつであることがお分かりいただけたかと思います。そしてまた、徹底して自己の権益を守ろうとする執着心の凄まじさもお分かりいただけたのではと考えます。ですから、自己の権益に属するものの確保には手段を選ばない男でした。王位継承を巡る争いの渦中に巻き込まれながら成人し、そして自ら進んでその渦中の中心人物となってより強大な権力を手にするために、抗争に明け暮れる日々を送っていた野心家の彼にとっては当然のことでありました。彼は個人の威厳を表す“名誉”あるいは“面目”といったものに並外れた固定観念をもっていた中世の典型的な封建領主でありましたから、どのようなささいなことにも、名誉を汚され

ることには耐えられませんでした。ですから、どうしても彼のことを言及する際の重要なキー・ワードは、“名誉”ということになります。当時名誉は、『七部法典（Las siete Partidas)』の第二部十三章一七の項で、このように定義づけられていました。「名誉とは賞賛を博した権威と同義である。人はそれを領地の大きさにより、あるいは偉業を成すことにより、または善心により得るものである」と。このような名誉は、騎士道物語に登場するアーサー王のような高潔な騎士にこそふさわしいのでしょうが、ドン・フアン・マヌエルは、アーサー王ではありませんでしたから、名誉を得るのに手段を選びませんでした。ましてや、名誉を損なう者への非情さは次のようなエピソードからも窺えます。それは、ドン・フアン・マヌエルの最大の領地でありますムルシアの住民が、彼の厳しい統治に耐えられず、反感を抱き、自分たちを治めるにふさわしい君主ではないと考え、アラゴン王に保護を求めるという事がありました。激怒した彼は、当然のことながら、首謀者の住民を厳罰に処しました。賞賛を博した権威という“名誉”が領地の大きさに比例するのであれば、そしてそれを獲得するためには、善と悪とを巧みに使い分けることのできるルネサンス期の傑人のような、強烈なプライド（傲慢）と冷酷の持主でなければなりませんでした。彼はまさにそのような人物でありました。『身分の書（El libro de los Eatados)』の中で、彼は「悪の権化である戦争や、最も由々しい問題である死よりも、人が耐え忍べないものは名誉である。畏敬される高貴なる者は不面目よりも死を選ぶ者である」と断言しています。まさに、名誉を重んじる高潔な騎士といったところであります。さらに彼は死後の“名声（posteridad)”を得ることに腐心しました。しかしながら、生来矛盾だらけの男でありましたから、そのようなことは望むべくもありませんでした。これまでは、『ルカノール伯爵』の中で絶えず言及している現世における“名誉と身分（地位）と富（財産)”をしっかりと保持し、さらに向上させることこそが“名声”を得ることであり、大変“名誉”なことである、と考えて行動していただけですから、そのような生前の行動が死後にも名を留めるには十分ではない、と考え、そこでドン・フアン・マヌエルは、マヌエル家と彼自身の名誉のために、これらを向上させようといかに努力してきたかを誇るとともに、マダリアーガが『ドン・キホーテの心理学（牛島信明訳)』の中で「中世にあっては、全ての著作が、倫理的あるいは教訓的見地からの自己正当化を必要としていた」と言述しているように、これまでの波乱に富んだ人生から得た経験と読書から得た該博な知識を書物の中に記すことによ

って、つまり言動のすべてを著述することで、自己を正当化し、そして後世に名を残そうと考えたのではと想われます。『騎士と従者の書（El libro del caballero y del escudero)』の書き出しの箇所で、彼は「賢者がこの世で最良のものは知識であると言っているのは、人のなすべきことは知識を豊にすることであり、それを怠るのは不善をなすことである、と考えているからである。また賢者は、知識とすぐれた著述は大切にされ、後世に伝えられるので、知識を可能な限り自分のものにするには、会得したことを書き記すことであると、考えているからである」と記述しているとこからも推測されます。また、彼はこの著述の点でも、自尊心の強さを遺憾なく発揮します。己の名誉が損なわれることのないよう『ルカノール伯爵』の冒頭で次のようにあらかじめ断わっておきます。「ドン・ファンは書物が筆写される際には多数の誤謬が生じることを知っている。事実目にしたこともある。なぜなら文字は互いに類似していることから、筆写する際に他の文字と混同すれば、言葉はまったく変わり、意味が取り違えられることになるからである。すると、後日その誤謬を見いだす人は、それを著者のせいにするのである。ドン・フアンはこれを危惧するがゆえに、彼の作品の読者に、たとえ誤った言葉を見いだしても、ドン・フアン自らが多数の箇所に訂正を施している手稿に目を通されるまでは、著者のせいにしないでいただきたいことをお願いする」と。ことほどさように、ひとつの文字にいたるまで、他人からの誤字の指摘をされるような不面目な著述はしていない、と言わんばかりの自負心の強さが窺え、ドン・フアン・マヌエルの面目躍如といったところですが、名誉あるいは名声を損なわれることへの過敏なほどの反応は、自尊心の表れのほかならないことは言うまでもありません。結語として、「言動に気を付けて常に善を行えば、／汝の名声はいかなる時も汚れぬであろう」と記している第四十六話の物語からも、それが窺えます。この教訓談は次のような内容です。

ある偉大な賢者が外出中に便意を催したために、とある横丁に入り込みました。賢者は持病を抱えていました。その持病とは痔でありました。かなりひどく患っておりましたので、医者からは、便意を催したら、我慢せず、すぐ排泄すること。それが悪化させない最良の方法である、と言われていたからであります。ところが、うかつにも偶然入り込んだ所はいかがわしい女たちが春をひさぐ住処のある横丁でした。賢者は、患部をいたわるために、ゆっくりと時間をかけて催しましたので、さわやかな気分になって表通りに出て来ました。彼を知る街の住人が、その様子を目撃し、弟子たちに伝えまし

た。あの聖人君子のような賢者が、晴れ晴れとした顔で、そのような横丁から出て来たものですから、住人は、日頃の謹厳な暮らしぶりからは想像もつかぬことをするためにあの横丁へ入った、と誤解しました。賢者は誤解されていることなど少しも気が付きませんでしたから、帰宅した際、弟子たちがやってきて、沈痛な面持ちで口々に「残念だ、まずいことだ！　師ご自身とわれらの面目は丸潰れだ。これまで、誰よりも立派に守ってきた名声をなくしてしまったのだから」と言い出しましたので、びっくり仰天し、その理由を尋ねましたところ、まったく身に覚えのないことによるものなので、とても不愉快でした。そこで賢者は、誤解により、何の落ち度もないのに名誉を傷つけられたことへの反論を書き記します。つまり名を一層轟かせ、保つにはどのように振る舞わねばならないか、をであります。そして、それをパトローニオの口を借りてこのように言わせます。「絶えず善事を行っていても、疑惑を招く行動が、悪事を行ったかのごとく、世間の誤解や曲解を招き、名声を損なうことになります」、すなわち「世間が物事の現象面から事実であるかのように考え、口にする行為は、人の名声に有利あるいは不利に大きく作用するものであります」から、「神の意に適う善事を常時励行するとともに、名声を損なうような言動を行わないように神のご加護を願うことであります」と。

また、ドン・フアン・マヌエルはこの教訓談とは異なった視点から、偉大な君主が名声を保持する最良の方法として、“廉恥心”を常に持つことであると訴えます。第五十話がそれにあたります。臣下の妻をわが物にしようと、主君のサラディーンが彼女の夫を遠隔地へ派遣し、留守の間に彼女に言い寄るのですが、慎み深く聡明な妻は、主君の態度を戒めるべく、次のような問い掛けをします。すべての善心の源であり、人が持つことのできる最良の善心とは何か、つまり人が身に備えうる最も優れた徳性は何か、と。そして彼女は、その答えがお分かりになれば、サラディーンの求めに応じる、と告げたのです。そこで、サラディーンが旅芸人に身をやつして諸国を遍歴しながら答えを探し求める、というのが物語の筋であります。さて、その答えとは“恥を知る心”、すなわち“廉恥心”なのであります。ドン・フアン・マヌエルはパトローニオに「廉恥心は人を勇敢にして寛大、誠実にして礼節ある者にし、立派な振る舞いをさせる」と語らせます。

彼が、これらの言葉に似つかわしくない、矛盾だらけの男でありましただけに、書き記したものとの極端な隔たりや違いに戸惑わざるをえませんが、

彼が波乱に富んだ生涯から会得し、常に銘記していたことは、第十六話の結語に記している「人の代は短く、享楽して過ごさば、／名を腐し、名を汚すのみ」であったことは間違いありません。そして、何よりも彼が会得したことは、「おお神よ、全能なる造物主よ！　あなたがご自分の姿に似せて愚かなる人間をお創りになったのはなんと驚くべきことか！　口を開けば間違え、口をつぐめば臆病さが顔を出し、富むと高慢になり、貧すると蔑まれ、何かをしようとしてもうまくゆかず、無為に過ごすと持物を減らし、弱者には横柄で、権力者にはへりくだり、力づくには易々と折れ、嘆願には意地悪くし、進んでお役に立とうとするが、応じるのが遅かったりしくじったりする。何でもしつこく求めるのに、与えるとなると出し惜しみしてごまかそうとし、自分の誤りを恥じず、戒めてくれる人を憎んだりする。喜ばせようとすると、腹を立て口から醜悪な言葉が溢れ出る。うたぐり深くて口が軽く、理由もないのに驚き、不要なときに努力し、楽しいと思う所で気が滅入り、長所は少なく短所は多い。意に反する忠告は無視する。訓戒を聞かねばならぬ人は厄日に生まれた。同伴に預かっても感謝せず労を煩わせてしまう。言動が一致せず、どうでもよいことには間違いをしない。言うことは理解されないし、言われることは解らない。いつも仲間と諍い、快楽にうつつを抜かし明日のことなど考えない。自分には甘く他人には厳しい。愚弄しているつもりが愚弄され、やる術を心得ておれば騙そうとする。一番気に入っているものが最良でなくともそうだと考える。自分は楽をしたいのに他人には耐乏するように願う。何をさらに申し上げようか？　言行はもとよりすべてのことを間違える。そのうえ、愚かさが顔に現れる。多くの人は愚かであるのにそうは見えないが、見える人は必ず愚かだ」と、『教訓談の書』の第二部の本論の中で長々と詳述している人間というものについてではなかったか、と考えます。

さて、最後にもう一度繰り返しておきますが、ドン・フアン・マヌエルは王家の一員に属する者ではありましたが、王位に就ける地位にはありませんでした。彼の父親はカスティーリャ王フェルナンド３世の七番目の子供でありましたから、Infante（王子）という称号を冠せられましたが、王座には決して手の届く存在ではありませんでした。しかしながら彼の人生の最盛期の頃のカスティーリャは、国王の権威が弱まり、内紛の耐えぬ状態にありましたので、野心家は常に国王の存在を脅かし、その力を削ごうと努めました。このような状態は、カスティーリャ歴代の国王の孫であり、甥であり、いとこであり、またアラゴン歴代の国王の女婿であり、義兄弟であり、野心家のド

ン・フアン・マヌエルにとっては好都合でありました。ですから、彼は当時の複雑に入り組んだ政治の場に積極的に関与しました。権謀術数を弄してカスティーリャ、アラゴン、グラナダの国王たちや諸侯たちと戦い、数々の利と名誉をものにしました。しかしながらそれも、アルフォンソ11世が成人し、カスティーリャ王として名実ともにその能力を発揮しだした時までのことでした。王家に属する者であると言っても一封建領主に過ぎないドン・フアン・マヌエルが、精力的に活動する青年王と渡り合うには、すでに年を取り過ぎていましたし、力も及びませんでした。宮廷内での発言力が弱まった時、彼は日頃から親しんできた読書と、それにも増して熱心であった著述に没頭しました。少年の頃から、否応無しに、権謀術数の渦巻く世界に身を置くことから体得したことや、読書や学識豊かな人物を通じて得た知識を基に、マヌエル家の名誉と彼の自尊心を誇示するために著述に励みました。これが晩年の彼の最大の関心事でありました。それは、彼が唯一敬愛する、13世紀切っての文化人の一人でありました伯父アルフォンソ10世に倣おうとしたからでありましょう。伯父は、ドン・フアン・マヌエルが物心の付いた頃にはすでに他界していましたから、偉大な国王であった、と聞かされていましても、彼には実感出来なかったでありましょうが、伯父の残した数々の文化的遺産を目にすることで、文武両道に秀でた偉大な君主であったことを認識し、尊崇の念を抱いたにちがいありません。自尊心の強い彼が他人の著述について言及しているのは、この伯父の物だけであることからも窺えるからであります。彼は、この伯父と同じように、自身も文武の両方に秀でた封建領主であることを後世に知らしめるために、つまり名を残さんがために数々の作品を著しました。それらの作品は『教訓談の書』の序文の中で列挙している、『要約年代記』、『賢者の書』、『騎士道の書』、『王子の書』、『騎士と従者の書』、『伯爵の書』、『狩猟の書』、『武器の書』、『詞の書』であります。これらの手稿を、万全を期すために、自らペニャフィエールに建立した修道院に保管しておきます。前に述べましたように、彼の作品の写本の読者に、その中で目にする誤字や誤った表現が著者本人のせいではないことを確認させるためであると同時に、「人々がこの世において己の名誉・財産・身分の向上に役立て、魂を救済し得る道へさらに近づくよう功徳を施すことを願ってであり」ました。しかしながら、これらの手稿は修道院の火災とともに消失します。現在われわれが目にする作品は、皮肉なことに、ほぼ完全なあるいは不完全な形で残されている写本であります。

さて結論として私は、彼を、世襲権のない貴族の子息の典型とでもいいましょうか、誇大妄想狂で野心家で栄光に飢えた男であった、と断言したいところですが、ここは、Andrés Giménez Solerの「ドン・フアン・マヌエルのような人物が政治から目を背けて過ごすことなどはできないことでありました。彼の出自、富、そして彼の能力が王国内に影響力を及ぼす人物となるように仕向けていたからであります。親王の子、国王の孫、数々の町や村、そして世襲財産が彼に権威と力を与えていました。彼がカスティーリャの混乱から身を引こうとしてもむだでありました」という言葉に代えて、終わることにいたします。

LA ESPAÑA DE NUESTRA EPOCA

Fernando SAVATER

Buenas tardes a todos. Yo en primer lugar lo que quiero hacer es expresar mi agradecimiento, tanto a la Japan Foundation como a este Instituto por haberme acogido, por su hospitalidad y por darme la posibilidad de estar con ustedes. Yo no tengo ninguna pretensión, digamos, académica esta tarde. Trato simplemente de conversar con ustedes y sobre todo de dar la posibilidad de que ustedes susciten sus preguntas o sus intervenciones y que charlemos un rato sobre cuestiones, digamos, referentes a España o a lo que yo puedo saber de la cultura española.

Mi campo profesional no es el análisis político ni histórico, de modo que mis observaciones sobre la situación actual de España, pues son las de un simple particular sin ninguna competencia especial en estas cuestiones. Yo en el campo en que, digamos, soy menos incompetente es en el terreno de la filosofía, en el terreno de la reflexión ética, reflexión política y ahí es donde he hecho mis trabajos, pero también participo en la prensa, escribo habitualmente en periódicos (El País), dirijo una revista de información reflexiva, de modo que, bueno, tengo una relación, una vinculación con los asuntos de la cotidianidad, de la vida normal, estructural, política, etc. del país. Quizá por eso, pues simplemente puedo contarles algunas impresiones personales que no pretenden, insisto, tener ninguna autoridad más que brindar una perspectiva subjetiva y abrir pasos, si ustedes lo tienen a bien, a que discutamos de estas cuestiones y ustedes me susciten sus preguntas, sus reflexiones sobre estos mismos temas.

El tema generosamente titulado "LA ESPAÑA ACTUAL" yo lo puedo centrar exclusivamente en las consideraciones acerca de lo que ha ocurrido en España a partir de la muerte del general Franco. Como saben ustedes introdujo una variación esencial dentro de la historia española, por una parte abrió nuevas perspectivas, afanes de libertades, de transformaciones políticas, de un giro que abarcaba desde la estructura más institucional del país hasta las categorías de vida cotidiana, de relaciones personales, de costumbres sexuales, de espectáculos cinematográficos o teatrales o de

publicación de libros, etc., es decir, iba desde lo más público hasta lo más privado en sus transformaciones. Estas perspectivas que abría el final de la dictadura y la entrada en un régimen democrático, el más prolongado que ha conocido nunca España en toda su historia, en fin, nuestro país no ha sido pródigo, digamos en períodos muy extensos de sistemas institucionales democráticos, desgraciadamente siempre han solido ser truncados por alguna intervención de signo opuesto, en nuestra época estos años de democracia han sido el período más largo que ha conocido nunca España y un gobierno de un régimen político constitucional democrático.

Junto a todas estas perspectivas esperanzadoras y quizá incluso excesivamente esperanzadoras que se dieron, España pues ha descubierto también una serie de dificultades y frustraciones que antes no había conocido. Las dictaduras, las autocracias políticas, son como una especie de campana de vidrio, de burbuja de cristal, que mantiene aislados a los pueblos. Los pueblos se mantienen en un equilibrio artificial, se mantienen aislados de los demás en una especie de tranquilidad o de relativa tranquilidad más o menos irreal; que por una parte, evidentemente desespera a muchas de sus fuerzas culturales, políticas, etc. que se desesperan en esa especie de congelación permanente que son las dictaduras; pero por otra parte resguarda a la población de una serie de peligros, de una serie de movimientos bruscos, que en otros países más abiertos, pues se dan constantemente.

En España, entonces, han ocurrido ambas cosas, es decir por una parte hemos descubierto los placeres, los entusiasmos positivos de las libertades públicas de un cambio constitucional, de unas transformaciones en el terreno cultural muy grandes, de una apertura y de un paso de la actuación semiclandestina de determinados grupos políticos o de determinados sectores intelectuales a un comportamiento mucho más abierto, mucho más libre, pero por otra parte hemos conocido también los problemas, los peligros, las frustraciones que acompañan a otros países europeos y que hasta entonces, pues no habíamos llegado a conocer por la situación en que vivíamos dentro de la dictadura de Franco.

Fundamentalmente la primera frustración es que habíamos creído durante mucho tiempo, en este plural me refiero fundamentalmente a las fuerzas o a los personajes o a los individuos, que teníamos una actitud crítica contraria a la dictadura, que teníamos una explícita o confusa vocación democrática. Digo que nosotros habíamos tenido, habíamos vivido bajo la impresión de que todos los problemas, todas las cortapisas que

tenía España en su desarrollo se debían fundamentalmente a Franco y al régimen autocrático que él encabezaba. Claro, a partir de la muerte de Franco todos hemos tenido que asumir nuestras propias responsabilidades y por lo tanto también en muchas ocasiones hemos tenido que darnos cuenta de que muchos problemas continúan más allá de la desaparición de la dictadura. Es decir, que el final de la dictadura no es una especie de clausura mágica de todos los problemas y una entrada en un sistema, en fin, incontrovertiblemente bueno y en el que todo ocurre para bien; sino que a pesar de haber desaparecido el sistema político que considerábamos culpable de una serie de defectos, siguen existiendo muchos problemas. Incluso descubrimos que existen problemas nuevos, por ejemplo problemas de orden, digamos, económico-institucional referente a nuestra integración en Europa. Europa ha sido para los españoles durante mucho tiempo una especie de mito, era un lugar donde estaban vigentes, aquellas libertades que nosotros no teníamos, se proyectaban las películas que en España estaban prohibidas, se publicaban los libros que nosotros no podíamos leer, en fin, de alguna manera Europa era una especie de modal, de deseo, de ilusión en el que se cumplían todos aquellos anhelos que nosotros no podíamos realizar dentro de España. Y, por lo tanto, el querer ser europeos, el querer integrarnos en Europa era algo absolutamente, digamos, acuciante y muy vivo en la mayoría de los demócratas españoles. Pero claro está, después hemos descubierto que Europa no es una tierra ideal, no es un sueño como habíamos tenido, sino un conjunto de países bastante diversos, no muy acordes en muchos puntos, con diversos egoísmos nacionales, con diversas apetencias individuales de unas frente a otras y que no estaba fácil integrarse dentro de ese contexto europeo, que no es tan fácil formar parte, digamos, de Europa, que no es simplemente algo que va a ser muy sencillo, sino que tiene muchas dificultades, tiene dificultades sobre todo de orden económico, tiene dificultades también de adaptación política y que Europa misma es un, es un lugar quizá menos entusiasmamente democrático y positivo de lo que habíamos creído cuando lo veíamos desde fuera. Es decir, Europa tiene muchas contradicciones internas, en Europa hay muchos problemas surgidos por los enfrentamientos entre los diversos países, hay muchas formas distintas y casi excluyentes de ser europeos. Europa tiene ahora problemas muy graves por la desaparición de los regímenes comunistas del este de Europa, eso ha creado una transformación en todo Europa con problemas de inmigración, con problemas de adaptación económica en Alemania, por ejemplo entre

las dos Alemanias que se han unido. Y todo esto ha repercutido, es decir, España que había, que estaba muy decididamente apostando por la unidad europea, que había apostado todo su futuro en buena medida, sobre todo a partir del gobierno socialista, había apostado todo su futuro en la baza de formar parte de Europa, hoy descubre que esa unión europea es algo más lenta, más difícil, más llena de contraindicaciones de lo que habíamos creído y eso crea una cierta frustración, es decir, los españoles descubrimos que ser europeos no es tan fácil y quizás no es tan cómodo ni fan agradable como habíamos supuesto en un primer momento. Para entrar en Europa hace falta ajustar nuestro sistema económico a los sistemas económicos de otros países que estaban más desarrollados y que tenían formas de administración diferentes a la nuestra.

Franco para asegurar la estabilidad interior de España había contado con un sistema económico basado en sueldos, en salarios muy bajos y en una seguridad muy grande de empleo, es decir, los trabajadores tenían asegurado un sueldo, un sueldo bajo pero muy uniformemente repartido y estable, de alguna forma bastante, bastante poco dado a sufrir altibajos, paro, etc.. Esto por supuesto acompañado de una fuerte emigración, es decir España tenía muchos cientos de miles de emigrantes, distribuidos por Europa que mantenían también los puestos de trabajo relativamente equilibrados dentro de España.

A la muerte de Franco, por una parte, muchos de esos emigrantes que estaban en el exterior, volvieron al país y por otra parte los sueldos naturalmente empezaron a subir, porque había unas demandas internas, que las organizaban los sindicados y los grupos de presión laboral, organizaban unas reivindicaciones pidiendo un ascenso en las retribuciones, es decir un mayor, unos mayores sueldos. Claro, por otra parte, era muy difícil mantener, se ha mostrado muy difícil mantener estos sueldos, este alza de las retribuciones económicas conservando la misma estabilidad laboral de la época de Franco. Al subir los sueldos entrábamos en un, digamos, en un terreno del capitalismo acelerado y el capitalismo acelerado, pues, como sabemos, va acompañado, ha ido acompañado en Europa, pues, por una movilidad de empleo mayor, los españoles no estamos acostumbrados a trabajar muy lejos de nuestros domicilios, todos queremos trabajar cerca de casa, no solamente queremos tener empleo, sino queremos tener empleo lo más próximo posible a nuestro domicilio, una seguridad permanente en el empleo, es decir no esa variabilidad de ir cambiando o buscando nuevos trabajos,

etc.,etc..En fin el ascenso de los sueldos, el cambio, digamos, de la estructura económica obligaba a replantear de nuevo una serie de valores económicos, que en el terreno, durante los años de la dictadura habían estado más o menos seguros. Esto ha producido un aumento del paro, un aumento del paro muy considerable y una inseguridad laboral y una sensación de frustración en muchos, en muchos trabajadores. Claro, entonces la entrada en Europa que se había visto en un primer momento como algo sumamente positivo, hemos descubierto que tiene un precio alto, tiene un precio alto en inseguridad de empleo, tiene un precio alto en paro, en dificultades, digamos laborales, y todo esto ha hecho o ha creado una serie de frustraciones, como digo, en el terreno político y económico. En el terreno cultural también hay una sensación ambivalente, es un poco agridulce, como la salsa de los chinos, hay por una parte desde luego un desarrollo mayor en el terreno de las libertades culturales, es decir, se puede publicar, escribir, filmar cosas que en otras épocas no se pudieron hacer. Por otra parte se ha visto que la ausencia de coacciones, de censura, de restricciones en el terreno intelectual, no garantiza automáticamente el talento, el genio de las personas que se dedican a la cultura, lo sabemos, la cuestión es un poco más complicada, incluso un sistema represivo, quizás puede efectivamente hacer la vida imposible, incluso frustrar a un gran creador cultural, pero un sistema de libertades no garantiza automáticamente que aparezcan grandes creadores culturales o que haya obras de una categoría superior a las que se habían hecho en otra época. Además en el mundo de la cultura hemos entrado en el terreno de una gran extensión, de una popularización de los productos culturales, vía libro de bolsillo, entrada abierta al mercado audiovisual, que antes había estado muy restringido y esto ha producido una impresión de vulgaridad, digamos, en la cultura, es decir hay una serie, una visión, antes la cultura, la cultura en la época del franquismo era una cultura más militante, era una cultura un poco de combate, era una cultura digamos de realización personal mayor, por ejemplo, pues yo asistía a los estrenos de los primeros cines en arte y ensayo, llamados cines de arte y ensayo en España, porque unos cines en que se proyectaban determinadas películas que no, no eran aceptadas por la censura, en otros, en otros medios, de los cines de más difusión, pero se toleraban con unas restricciones en cines un poco, digamos, unos cines que eran como unos gestos cinematográficos, a los cuales íbamos una serie de personas a ver películas que a lo mejor tampoco nos gustaban excesivamente, pero considerábamos que había una cierta visión política y de

regeneración social asistiendo a determinados espectáculos, apoyando a determinados escritores, etc., o sea había una actitud, digamos, en que la política era algo que nos concernía, que nos realizaba plenamente, que era un instrumento de lucha, claro, todo esto cuando desaparece, esa tensión que produce la dictadura, pues la cultura, pues se convierte en elemento estético, lúdico, pero pierde mucho de esa vocación militante esforzada que había tenido en otras épocas. Claro entonces empieza a aparecer la cultura de masas en su sentido quizás menos noble, los concursos de la televisión, los programas, digamos, de cierta vulgaridad, la literatura más, más de consumo menos exigente. Y todo esto produce una cierta frustración, hay personas de mi edad, no digamos mayores que consideran que hay, una degradación en el mundo cultural, que se han perdido unos ideales, que antes fueron o sirvieron de bandera y que hoy, pues, el consumo, la diversión fácil, el entretenimiento son los que dominan completamente el panorama cultural. No sé hasta qué punto esto es inevitable, es decir, no sé hasta qué punto la libertad siempre viene acompañada de ventajas y de inconvenientes, yo creo que los pueblos, los grupos humanos que han estado privados durante mucho tiempo de libertad tienen la impresión de que la libertad es siempre algo de funcionamiento positivo, es decir, que cuando se es libre, se es libre a favor de uno mismo. Yo pienso que hay que admitir que la libertad es algo que precisamente su gracia, su valor estriba en que puede ser utilizada mal o bien, en que por lo tanto puede volverse contra uno mismo, es decir no creo que nadie sea libre si no puede hacerse daño a sí mismo, si es obligatorio que todo lo que haga sea positivo o a favor de uno mismo, entonces no se es libre, se es un autómata más o menos programado, de manera paternalmente beneficiosa, pero en realidad no se es libre, si uno es libre, es libre porque puede hacer cosas que vayan en contra de uno mismo. Esto teóricamente podemos asumirlo, a veces en la práctica es difícil de vivir, es difícil por ejemplo aceptar que las ciudades españolas, que hace 15 o 20 años eran ciudades más provincianas, de vida más sosegada, evidentemente mucho más seguras de lo que son hoy, es decir hoy las ciudades españolas, sobre todo las grandes ciudades, como Madrid o Barcelona o algunas otras son ciudades en las cuales, pues ya ocurren ese tipo de sucesos, de crímenes, de robo, etc., que leemos que ocurren pues en Nueva York, Londres o en otras grandes ciudades. Claro esto produce una cierta inquietud, a todos nos gustaría vivir en ciudades que fueran tan culturalmente diversas, ricas y estimulantes, como la Nueva York de hoy y tan seguras como la Salamanca, la

Salamanca de los años sesenta. Esto es difícil, parece que realmente si queremos una vida moderna, plural, con todos sus estímulos y con todas sus posibilidades de realización individual y de grupo, pues hay que pagarlo en una cierta inseguridad, en una cierta posibilidad de cometer errores, en una cierta posibilidad también de que la gente elija lo peor, lo menos válido, lo más vulgar, etc., etc.

Yo creo que la situación entonces hoy en España es, por un lado de una cierta, evidente alegría por haber salido de situaciones de opresión, por situaciones de limitación de las libertades y, por otra parte, un cierto miedo y un cierto desconcierto y una cierta frustración ante los problemas que ejercer esas libertades, pues componen; sobre todo las personas de una determinada edad que hemos conocido ambas cosas, es decir, que hemos vivido en la época de la dictadura y después podemos comparar, e incluso los males que hoy vemos de la democracia nos parecen compensados por las ventajas que de ella obtenemos, digamos, de una vida más libre y más digna. En cambio, pues claro personas más jóvenes, que no han conocido ambas cosas, es difícil contarles las frustraciones, las limitaciones que se experimentaban en la época de la dictadura, pero en cambio conocen bien las que se sufren en la época de la democracia y por lo tanto lógicamente se sienten bastante menos entusiasmados, digamos, que otras personas, que hemos conocido el antes y el después ¿no? de la situación. Hay otro aspecto, y es el de la pluralidad esencial intrínseca que tiene España ¿no?, yo creo que hablamos de España y deberíamos hablar de las Españas, en buena medida, porque España es un concepto, un concepto plural, es decir hay dentro del Estado único español, pues hay muchas formas, no solamente formas de concebir el Estado, también formas de cultura, formas lingüísticas, formas de vida, notablemente diferentes. En todas partes las hay, por supuesto, a pesar de que se pretenda hacer pasar por homogéneos, los Estados nunca son homogéneos, los Estados siempre son una asamblea de diversidades y de cosas distintas que tienen que convivir bajo un mismo techo, techo político, pero España es particularmente diferente, es decir, hay sobre todo dos o tres comunidades: la comunidad vasca, catalana, en buena medida la gallega, que son comunidades muy diferenciadas dentro del conjunto del Estado español, diferenciadas en cuanto a su lengua y a su tradición cultural, diferenciadas también en cuanto a lo que históricamente, a la dialéctica histórica que han llevado junto con el resto del país y claro en el momento de la democracia, pues una serie de, Franco había creado una imagen imperial, unanimista de España, una España únanime, única, etc.,

que era artificiosa en su uniformidad y en el momento en que desapareció esa presión, pues han aparecido excesos, si se quiere opuestos, es decir el deseo de singularidad, de diferencia, de identidad a toda costa y, por lo tanto, pues se pierde un poco de vista la idea de conjunto por asimilar y por defender las diversidades lo más extremas posibles. Los nacionalismos por decirlo con una sola palabra dentro del Estado español, pues crean una serie de problemas en cuanto al funcionamiento conjunto del Estado, tanto más cuanto que vemos que en Europa hoy los nacionalismos son una amenaza seria que ha llevado a algunos países a unas situaciones de tragedia colectiva, como por ejemplo en la antigua Yugoslavia o incluso en bastantes lugares de lo que fue la Unión Soviética, verdaderamente allí se viven situaciones de tragedia, de conflicto, de crimen cuya salida, cuya solución no es nada fácil. Y en España sin haber llegado afortunadamente a situaciones tan dramáticas, pero también ha habido situaciones de conflicto, de dificultad e incluso hay una amenaza permanente, que es el terrorismo de ETA, de un grupo radical vasco, de lucha independista que crea un foco, digamos, permanente con múltiples asesinatos, con múltiples actos de violencia, cada vez más indiscriminados y que naturalmente, pues eso crea un conjunto de problemas para el resto del país y un conjunto de tensiones, digamos, entre los diversos grupos humanos. En cambio hay un problema que ha sido tradicional en España durante muchos, por lo menos durante los últimos 250 años, que es el problema de la amenaza del golpe militar. Era un ritual los golpes militares en España, era un ritual, era una especie de tradición cultural española como el flamenco, como la afición al aceite de oliva, pues eran los golpes militares y afortunadamente eso parece que, ya entre los últimos años esa amenaza no existe, es decir a partir del último intento, cual fue aquel intento de Tejero a comienzos de los años ochenta realmente no hay, no hay razón para suponer que el ejército tiene otro papel que el papel habitual en los países democráticos y constitucionales, es decir, un papel, pues a veces digamos de reivindicaciones de sus propios intereses, de protesta por su marginación o por la disminución de los presupuestos militares, pero, pero en fin no hay, no hay una imagen de amenaza antidemocrática en el ejército, lo cual es sumamente tranquilizador, por lo menos para quienes, repasamos de vez en cuando la historia de nuestro país. Yo creo que tanto estos males como estos bienes, que les estoy diciendo a ustedes, forman parte de un país que está sufriendo una expansión más radical que otros países europeos. Otros países europeos han tenido más tiempo para ir desarrollándose, para ir integrándose,

para ir conformándose a la modernidad. España, que ha permanecido congelada durante más de cuarenta años bajo la dictadura, tiene ahora que recuperar el tiempo perdido y eso causa crisis de crecimiento, como una adolecente que tiene que crecer demasiado apresuradamente, pues eso, todo eso produce una serie de problemas, de crisis, de crecimiento y en España hay este tipo de crisis. Yo creo que esto en cierta forma garantiza que tenemos más futuro, digamos en el sentido de más posibilidades que otros países que ya tienen la sensación de haber intentado las cosas, en España hay muchas cosas todavía que están por intentar, no sé si esto es bueno o malo. Yo tenía un amigo que cínicamente decía que España era el país de mayor futuro de Europa, porque mientras que los demás países estaban en el siglo 20, España todavía tenía por delante el siglo 18, el siglo 19, entonces nosotros teníamos más siglos de futuro que los demás por delante. Bueno, esto desde luego es una visión única, yo espero que no, que España no tenga más futuro en el sentido de que le queden más siglos que recorrer que a los demás, sino que estemos en el siglo 20, pero dentro del siglo 20 es cierto que fórmulas que otros países han intentado ya con un éxito o fracaso, pues todavía quedan por delante en España. Algo positivo, es que por ejemplo las actitudes de extrema derecha, las actitudes de xenofobia, de racismo, de actitudes ultraautoritarias, que tienen una amplia base política en Francia, en Alemania, etc., curiosamente en España no tienen una gran base, es decir, España es uno de los países de tradición autoritaria, que tiene menos fuerza, donde tiene menos fuerza la ultraderecha, la xenofobia, etc., que vemos que en otros lugares como en Italia o en Alemania, incluso en Francia, tienen un papel político importante, no es así en España, quizás lo único bueno que tienen las dictaduras es que en cierta medida vacunan a los pueblos para que prevengan, para que creen anticuerpos contra determinadas actitudes. También es verdad que España empieza ahora a entrar en el mundo de la inmigración, empezamos a conocer el problema de la pluralidad étnica, etc., que antes existía, pero en mucha mayor medida porque España era un país de emigrantes, pero no de inmigrantes, ahora estamos conociendo el problema de la inmigración y claro que eso obliga, nos obliga a descubrirnos un poco a nosotros mismos, bueno todos somos perfectamente solventes y sensatos con los problemas que no padecemos que otros, es decir hoy, veo clarísimo cómo deben resolverse los problemas de Sudáfrica y soy contrario al apartheid, entre otras razones porque tampoco tengo ni he vivido en esas circunstancias y por lo tanto no tengo una experiencia personal, digamos de esos asuntos, entonces sobre la mesa y

sobre mi buena conciencia los resuelve con toda facilidad. El problema empieza cuando uno tiene que convivir con los problemas, convivir con la pluralidad, convivir con las dificultades y ahí ya uno descubre aspectos menos gloriosos dentro de uno mismo, uno descubre que uno no es tan, digamos, tan de fiar en los buenos momentos creemos que somos.

Claro, en España entonces estamos descubriendo, al tener que convivir con una inmigración fuerte, estamos descubriendo que personas que se consideraban a sí mismas exentas de cualquier aspecto xenófobo, racista, etc. tienen una mayor, una mayor cantidad, digamos, de sombra y de tiniebla dentro de sí mismos de lo que hubieran creído pensar. Hay una frase que puede resumir un poco estos problemas de desconcierto, se la atribuyen a algún alcalde de los comienzos de la época democrática, un alcalde que había sido alcalde durante la época de Franco, que después en la época, de los primeros años de la democracia se sentía totalmente desconcertado por la rapidez, por la transformación que sufría el país y un día hablando con su gobernador civil, le dijo: mire las cosas están cambiando tanto que yo ya no sé si soy de los nuestros. Bueno esta dificultad por saber si es de los suyos, es lo que caracteriza, yo creo, los períodos de libertad, es decir, la época de los sistemas de libertades, no son sistemas que funcionen obligatoriamente mejor, no son sistemas que traigan automáticamente bienestares o ventajas materiales, sino que son sistemas que apuestan por un tipo determinado de desarrollo humano. Hoy en España, pues estamos experimentando las dificultades y las contradicciones de un desarrollo en un marco de libertades públicas. No sé si eso nos hará más felices o no nos hará más felices; se atribuye a don Manuel Azaña, el presidente de la segunda y última república española, que en una ocasión le preguntaron a don Manuel Azaña: "pero vamos a ver, ¿usted cree que la libertad hace más felices a los hombres?" y Azaña dijo: "no, yo no sé si los hace más felices, yo lo que sé es que los hace más hombres". Bueno en el fondo esto es un poco la actitud con la que tenemos que consolarnos, es decir, no es seguro que seamos más felices, no es seguro que la España actual tenga menos problemas de los que ha tenido, yo creo que tiene problemas más acordes con su tiempo y más acordes también con la dignidad, digamos, de un país moderno, de un país que quiere respetar todas sus capacidades y no simplemente mutilarlas en pro de un funcionamiento determinado en una dirección o en otra. Y, pues, yo de momento no sabría mucho más que decirles, pero si esto que les he contado, pues les sugiere a ustedes algo, les da pie

para algún tipo de reflexión, pues yo estaría muy contento de poder reflexionar con ustedes o escuchar en cualquier caso lo que ustedes tengan que decirme.

La Institución Libre de Enseñanza

——escuela progresista de España en el siglo XIX——

Yukari ITO

1. Introducción

A lo largo del siglo XIX, en España, se repetían los conflictos entre las '*dos Españas*': los sectores conservadores reaccionarios y los introductores de las nuevas ideas liberales. Entre estos conflictos podemos mencionar la Guerra de la Independencia (1808–1814), el Absolutismo de Fernando VII (1814–1820, 1823–1833), las Guerras Carlistas (1833–1840, 1846–1849, 1872–1876). Con una situación social tan inestable, no sería difícil de imaginar que el control del gobierno no llegara hasta la educación pública. Entonces el nivel cultural de España era bajo, y en 1876, la tasa de analfabetismo rondaba el 75 o 80 por ciento y la tasa de niños en edad escolar que no estudiaban en escuelas llegaba al 60 por ciento[1]. A fin de que España saliera de la crisis, se estableció una escuela progresista con el objeto de crear el '*hombre nuevo*', y en la que se educaba a muchos intelectuales que ocuparían puestos de mando a principios del siglo XX. Esta escuela fue la Institución Libre de Enseñanza (en adelante I.L.E.), a la cual luego Salvador Madariaga llamaría su '*Alma mater*'.

Hoy día, en Japón, el estudio en este campo es prácticamente inexistente. En este trabajo, por lo tanto, intento aclarar la constitución general de la I.L.E. investigando el proceso de su fundación y su método pedagógico.

2. Corriente ideológica

Durante la segunda mitad del siglo XIX, el krausismo[2] que propuso el filósofo alemán Karl Christian Friderich Krause[3] se convertía en el pensamiento dominante en España. Su doctrina no tenía mucha influencia en otros países europeos, sino en España y en los países latinoamericanos donde incluso se llegaron a formar escuelas krausistas.

En ese tiempo, el krausismo se difundía en España a través de la traducción de las

obras de Heinrich Ahrens[4], uno de los discípulos y comentaristas de Krause. Además, al volver de Alemania Julián Sanz del Río[5] la influencia krausista sobre la sociedad española era cada vez más fuerte. En España, donde continuaban los enfrentamientos entre las '*dos Españas*', la ideología política de los moderados era el eclecticismo francés del filósofo Víctor Cousin. Por otro lado los progresistas buscaban su propio doctrinarismo y el krausismo respondía bien a sus intereses en el punto de la regeneracieón educativa y moral. Puede decirse que el krausismo era muy adecuado a las necesidades más acuciantes de la época. Así que el krausismo se difundía más como un doctrinarismo progresista.

Después de estudiar con una beca en la Universidad de Heidelberg, Alemania, Sanz del Río volvió a España en 1844, y se quedó casi 10 años en Illescas, un pueblo cercano de Toledo, preparando la difusión del krausismo. Desde 1854, volvió a ocupar el puesto del profesor de la Historia de Filosofía en la Universidad Central de Madrid, y empezó a ejercer mucha influencia. Los que tenían contactos con Sanz del Río en ese tiempo, Francisco Giner de los Ríos[6], Nicolás Salmerón, Gumersindo de Azcárate y etc., luego iban a ser el eje de la I.L.E..

Ahora bien, se afirma que Sanz del Río no introdujo a España el pensamiento auténtico de Krause. El añadió su propia interpretación a la de su maestro y formó el '*krausismo-español*' bien diferente del pensamiento originario de Krause.

Sin embargo, sucedieron algunos obstáculos contra el krausismo, que intensificaba más su influencia: la prohibición del libro de Sanz del Río, "*Ideal de la humanidad para la vida*", y las dos Cuestiones Universitarias que fueron el motivo directo de la fundación de la I.L.E..

3. Proceso de la fundación

En 1876, con ideología krausista se fundó la I.L.E. que pretendía la reforma social a través de la educación, cuyo mayor objetivo era '*formar hombres*'. Pero primero hay que mencionar tres acontecimientos importantes que ocurrieron antes de la fundación: la Primera Cuestión Universitaria (1867), la Revolución de Septiembre (1868), y la Segunda Cuestión Universitaria (1875).

En 1867, el ministro de Fomento[7], el marqués de Orovio, bajo el gobierno de Narváez oprimió '*la libertad de enseñanza*' , prohibió la autonomía de universidades y comenzó a censurar los textos. Protestaron los profesores de universidades

oponiéndose a esa política del gobierno, pero el gobierno los destituyó uno tras otro hasta 1868; eran, entre otros, J. Sanz del Río, Fernando de Castro, N. Salmerón, G. de Azcárate, F. Giner de los Ríos.

Pero debido a la Revolución de Septiembre en 1868, se derrocó el gobierno de Narváez, se exilió Isabel II , y la Primera Cuestión Universitaria aparentemente llegó a una conclusión.

Luego, en 1875, sucedió la Segunda Cuestión Universitaria. Como la vez anterior, el ministro de Fomento, el marqués de Orovio del gobierno de Narváez persiguió '*la libertad de enseñanza*'. Los que protestaron primero contra el gobierno eran los profesores de la Universidad de Santiago de Compostela. En Madrid, F. Giner de los Ríos, N. Salmerón y G. de Azcárate cada uno de éstos envió una carta de protesta al gobierno y fueron desterrados y encerrados en distintos lugares de España[8].

No obstante, mantenían correspondencia entre ellos y planeaban el proyecto de establecer una escuela laica y progresista. Giner de los Ríos pensaba que era imposible realizar una reforma fundamental en la educación pública en la España de aquel tiempo donde continuaban conflictos entre los liberalistas y los conservadores. Era necesario, por lo tanto, fundar una escuela privada para '*la libertad de enseñanza*'.

En mayo de 1876, se aprobaron los Estatutos de la I.L.E.[9] en la Primera Junta de Accionistas. Y el 29 de octubre de 1876, se inauguró la I.L.E. en la calle Esparteros 9[10] con el discurso del primer rector, Laureano Figuerola. En la Constitución de 1868 y la de 1869 se reconocía la libertad de fundar escuelas y el gobierno no pudo interrumpir la fundación de la I.L.E. por obedecer su propia Constitución.

Como se puede ver, el gobierno temía la difunción de las ideas de libertad fuera de las universidades y utilizaba la política de despojar '*la libertad de enseñanza*' para mantener el orden social y moral. Si no hubieran ocurrido estas Cuestiones Universitarias, la I.L.E. se habría fundado mucho más tarde o no se habría hecho. En ese sentido se puede decir que las Cuestiones Universitarias influyeron en la fundación de la I.L.E..

4. Tres etapas de la I.L.E.

Podemos dividir los 60 años de la I.L.E. en las siguientes tres etapas:

4.1. Primera etapa (1876-1881)

Es la fase más combativa, desde su fundación hasta la reforma social y

pedagógica del gobierno de Sagasta. En realidad, ya había empezado esa fase combativa desde los años 60, en la que los krausistas y los catolicistas liberales luchaban con la dirección de la doctrina de Sanz del Río contra estos acontecimientos como el Syllabus del Papa Pío IX[11], el Concilio Vaticano I[12], y la intransigencia del Estado español. Desde el principio, la I.L.E. funcionaba más que nada como una especie de '*universidad*' al margen del Estado. Pero en 1881 por la reforma pedagógica del gobierno de Sagasta, se introdujo el sistema de universidad liberal pública. Por otro lado la I.L.E. abandonó sus primitivas ambiciones de convertirse en universidad y empezó a dedicarse a la primera y la segunda enseñanza. Además, los profesores destituidos por la Segunda Cuestión Universitaria podían volver a sus universidades siendo tratados favorablemente, y también se aceptaba '*la libertad de enseñanza*'.

Hay dos motivos por los que fracasó la educación superior de la I.L.E.. El primero es que su método pedagógico era una imitación del de la Universidad Central de Madrid. En segundo lugar, la I.L.E. no podía obtener el carácter de Instituto ni el de Universidad, y los alumnos tenían que matricularse y pasar exámenes como estudiantes libres[13] en centros oficiales.

4.2. Segunda etapa (1881-1907)

Es la fase de la Reforma pedagógica, que está llena de lo más propio y característico de la I.L.E.. El representante de la Institución, Giner de los Ríos, tenía la edad madura, de 42 a 68 años, y propulsaba la reforma pedagógica para desarrollar el nivel de la ciencia española. Su método pedagógico era una prueba progresista; por ejemplo, rechazaba los exámenes y los libros de textos, no procuraba las lecciones de memoria sino el método intuitivo[14], realizaba excursiones, clases de música, arte, deporte, y apoyaba la coeducación, y las colonias escolares. Todas estas características serían detalladas más adelante.

4.3. Tercera etapa (1907-1936)

En 1907 se fundó la Junta para Ampliación de Estudios e Investigaciones Científicas (en adelante J.A.E.)[15], y con su función la I.L.E. llegó a un período expansivo y de difusión. Aparte de la constante actividad pedagógica, se establecieron muchas organizaciones[16] que tenían el mismo espíritu que la I.L.E.. En 1923 por el golpe de Estado de Primo de Rivera empezó una fase nueva de represión a los intelectuales españoles. Pero la I.L.E. podía funcionar normalmente bajo la dirección

de Manuel Cossío[17] . En 1936, estalló la Guerra Civil y la I.L.E. se vio obligada a cerrar sus puertas al término del curso 1935–36 y nunca pudo volverlas a abrir.

5. Principios del método pedagógico

'*Formar hombres*' era la suprema aspiración de la I.L.E.. Giner de los Ríos y la I.L.E. pensaban que la causa del desastre español era la falta de preparación intelectual, técnica, científica y moral. Era necesario preparar a los hombres de dirección a través de la educación para realizar la transformación de la sociedad española.

Los principios pedagógicos de Giner de los Ríos recibieron la influencia de los grandes pedagogos europeos: Comenio, Rousseau, Krause, Pestalozzi, y Fröbel. Fundamentalmente el método pedagógico utilizado por la I.L.E. era de Fröbel, quien era uno de los discípulos de Krause. El sucesor de Giner de los Ríos, Manuel Cossío nos dejó su lema: '*No enseñar las cosas, sino enseñar a hacerlas*'.

5.1. Educación e instrucción

Hay diferencia evidente entre estas dos palabras: educación significa '*desarrollar las facultades intelectuales y morales del niño*'; instrucción significa '*dar lecciones, ciencias o conocimientos*'[18] . Giner de los Ríos daba la importancia a esa diferencia. A. Jiménez García decía en su libro[19]:

> No se trata de instruir al niño con una serie de conocimientos acumulativos, sino de ayudar a su propia formación como persona libre por medio de una educación conveniente y adecuada, de inculcarle las formas y criterios para su movilidad en la sociedad en que vive, y sólo subsidiaria y posteriormente, instruirle en los saberes determinados y concretos.

5.2. Educación activa

Frente a la pasividad propia de la enseñanza tradicional, Giner de los Ríos defendía la actividad de los alumnos a través de la intuición. Los maestros dejaban su autoridad dando importancia a la convivencia e intentando estar entre los alumnos como uno más de ellos.

5.3. Educación integral

Para formar una personalidad armónica, la I.L.E. estimulaba la educación integral; desarrollaba el espíritu, el cuerpo, la razón, el sentimiento, la voluntad, el

carácter, el sentido estético y moral de la vida, etc.. Concretamente realizaba excursiones, clases de música, arte y deporte, y visitas educacionales a fábricas y museos.

5.4. Educación en libertad

Giner concebía la libertad desde la esfera del alumno y rechazaba el sistema coercitivo que provocaba la competición, como castigos y exámenes, con el fin de que los alumnos tuvieran responsabilidad de sí mismos y establecieran un espíritu liberal. Al principio esto era difícil de entenderse por la parte del alumno. Giner de los Ríos pensaba que no hacían falta los exámenes porque provocaban una energía innecesaria en el ambiente intelectual.

5.5. Educación neutra

Contra la enseñanza confesional y tradicional, Giner de los Ríos creía que el niño debía ser educado en un ambiente de tolerancia fuera de la confesionalidad de cualquier religión. La I.L.E. defendía desde el principio la enseñanza laica, como se aclaraba en el artículo 15 de los Estatutos[20]. Sin embargo, no se puede decir que los institucionistas no fueran religiosos sino que no participaban en la actividad religiosa y política dentro de la Institución.

5.6. Escuela unificada

La I.L.E. defendía la enseñanza unificada entre el período de párvulos, la primera y la segunda enseñanza, como un proceso gradual y total. Esto provenía de la pedagogía de Fröbel, quien decía que la educación debía de ser continua e ininterrumpida.

5.7. Coeducación

El problema de la coeducación era lo que chocaba más contra la enseñanza tradicional. Desde el punto de vista tradicional, la coeducación era inmoral e insaludable. En cambio la I.L.E. creía que la escuela había de ser trasunto de la vida. Giner de los Ríos cuestionaba por qué se prohibía que los dos sexos estudiaran juntos sólo en la escuela, cuando en la familia y en la sociedad vivían juntos. Además, él era un celoso partidario de la educación de la mujer y de su elevación social.

5.8. Familia y educación

La I.L.E. no defendía el sistema de internado, ya que la escuela debía de ser un complemento de la educación. No obstante, Giner de los Ríos intentaba dar el ambiente familiar para que los niños no se sintieran desprotegidos.

6. Conclusieón

En este trabajo he intentado aclarar la imagen general de la I.L.E.. Como hemos visto, a pesar de los pocos años que existió esta institución, nadie puede negar su impacto en la cultura española. A. Jiménez Frau dice sobre la I.L.E.[21]:

> Sembró, en suma, las semillas de una futura clase, culta y bien informada, que pudiese asumir el papel director que de ella podría exigir quizá un día el servicio de España.

Sin embargo, también es necesario indicar una contradicción. Se decía que la puerta de la I.L.E. estaba abierta a todo el pueblo, pero realmente la mayoría de los alumnos eran los hijos de la burguesía media y la clase intelectual tal es como profesores, periodistas o médicos. Estos alumnos formaban a su vez un grupo nuevo y selecto de élites. Por esto queda la duda de que la actividad de la I.L.E. era limitada, aislada y fingida. José María Giner Pantoja y Emilio G. Nadal reconocen que la Reforma de la I.L.E. fue adaptada sólo por el minoritario elitista[22]. De hecho, hacia 1900 más de la mitad de los españoles no sabían leer, y esta actividad pedagógica no llegaba a la vieja España ni a la educación religiosa ni al pueblo que continuaba sacrificado en esa época. A pesar de esto, se debería estimar mucho a la fundación de la I.L.E., la cual hace más de cien años realizó una reforma pedagógica muy progresista en el contexto social confuso.

NOTAS

1) Ruiz Miguel, Alfonso: 'la Junta para Ampliación de Estudios' en "Historia 16" Año V-No.49-1980, Información y Revistas, S.A., Madrid, 1980, p.85.
2) Es la doctirna de Krause, 'Panenteísmo', que en España es conocido como el nombre de krausismo. Trata de conciliar el teísmo y el panteísmo, y según su doctrina, Dios sin ser el mundo ni estar exclusivamente fuera de él, lo contiene en sí y de él trasciende.
3) Filósofo alemán (1781–1832), creador del pensamiento krausista, quien fue discípulo de Schelling y Hegel.
4) Hay dos obras destacadas de Heinrich Ahrens(1808–1874); "el Cours de Philosophie"(París, 1836–38), y "el Cours de Droit Natural"(París, 1838). Las escribió en francés y en 1841 "el Cours de Droit Natural" ("el Curso de Derecho Natural") fue traducido al castellano por Ruperto Navarro Zamorano.
5) Filósofo español (1814–1869), quien introdujo en España las corrientes metafísicas

alemanas. Su libro, "Ideal de la humanidad para la vida" (1860) es básico de todo el movimiento krausista.

6) Filósofo, pedagogo y escritor español (1839–1915). Como seguidor de la doctrina krausista, fundó la I.L.E. y fue su eje hasta su muerte.
7) El Ministerio de Instrucción Pública, que se estableció en 1901 con el consejo de Manuel Cossío, no existía aún en ese momento. El Ministerio de Fomento servía en su lugar.
8) Giner de los Ríos fue deportado a Cádiz; Salmerón, a Lugo; Azcárate, a Cáceres.
9) Jiménez-Landi, Antonio: "La Institución Libre de Enseñanza y su ambiente", Taurus, Madrid, 1973, pp. 703–719.
10) En 1882 la I.L.E. se trasladó a la calle Infantas 42, y en 1887 al paseo del Obelisco 8.
11) 'Noción falsa' del Pío IX (en latín 'Syllabus Errorum') que salió en 1864 e indica los errores más importantes.
12) En este concilio fue proclamado el dogma de la infalibilidad pontificia del Papa.
13) Había dos tipos de estudiantes: uno es estudiante oficial y otro, estudiante libre, que no tenía el derecho de asistir a clases y sólo se presentaba a exámenes.
14) Método pedagógico de Pestalozzi, en el que se hace observar cosas directamente al niño apelando a su sensibilidad.
15) La J.A.E. se fundó en 1907, con el fin de obtener conocimientos más avanzados, manteniendo contactos con los países más desarrollados culturalmetne que España. El Ministerio de Instrucción Pública la aprobó como una organización pública, cuya función más importante era el sistema becario para estudiar en el extranjero. Por otra parte constituyó unas organizaciones científicas, donde los becarios aprovechaban sus estudios.
16) La I.L.E. fundó muchas organizaciones a través de la J.A.E.; por ejemplo, la Residencia de Estudiantes (1910), el Centro de Estudios Históricos (1910) y el Instituto-Escuela (1918).
17) Pedagogo e historiador del arte español (1858–1935), sucecor de Giner de los Ríos en la I.L.E..
18) García-Pelayo y Gross, Ramón: "Pequeño Larousse", Larousse, París, 1972, p.337 y p.499.
19) Jiménez García, Antonio: "El Krausismo y la Institución Libre de Enseñanza", CINCEL, 1985, Madrid, p.152.
20) Jiménez-Landi, Antonio: 1973, P.705.
21) Tuñón de Lara, Manuel: "Medio Siglo de Cultura Española", Tecnos, Madrid, 1977, p.56.
22) Ibid., p.55.

BIBLIOGRAFIA

Abellán, José Luis: *Historia Crítica del Pensamiento Español V(I)*, Espasa-Calpe, Madrid, 1989.

Abellán, José Luis/ Martínez Gómez, Luis: *El Pensamiento Español -de Séneca a Zubiri*, Universidad Nacional de Educación a Distancia, Madrid, 1977.

Guy, Alain: *Historia de la Filosofía Española*, Anthropos, Editorial del Hombre, Barcelona, 1985.

Jiménez García, Antonio: *El Krausismo y la Institución Libre de Enseñanza*, Editorial Cincel, Madrid, 1985.

Jiménez-Landi, Antonio: *La Institución Libre de Enseñanza y su ambiente*, Taurus, Madrid, 1973.

Tuñón de Lara, Manuel: *Medio Siglo de Cultura Española*, Editorial Tecnos, Madrid 1977.

Varios : 'La Institución Libre de Enseñanza', en *Historia 16* Año V-No.49 Mayo-1980, pp. 68–93, Información y Revistas, S.A., Madrid, 1980.

La obra mestiza del Inca Garcilaso de la Vega

Lilia OTA

0. Introducción

El Inca Garcilaso de la Vega, (1539-1616) hijo de una noble inca y de un conquistador español, encarna por primera vez, en su experiencia vital y en sus obras, la fusión de la tradición indígena y la occidental. Dice José Carlos Mariátegui que Garcilaso no es sólo uno de los primeros mestizos americanos sino que es, espiritualmente, el primer peruano.[1] En él se funden las dos razas antagónicas de la conquista, unidas ya en el brazo fecundo del mestizaje, pero se sueldan además indestructiblemente y despojadas de odios y prejuicios, las culturas hoscas y disímiles del Tahuantinsuyo pre-histórico y del Renacimiento español. La síntesis original y airosa de este sorprendente abrazo histórico son los Comentarios Reales.

La primera parte, que trata de la historia de los Incas, Imperio que no alcanzó a ver, pero se aproximó por el camino de la tradición oral de sus antepasados y el conocimiento de su campo geográfico aparece en 1609; la Segunda Parte, con el título de Historia General del Perú, trata de los sucesos ocurridos en tierra peruana, con muchos protagonistas que él conoció y trató en su infancia. Ésta se publicó póstumamente en 1617 y servirá como punto de partida para dramas, novelas y obras de todo género sobre el tema del indígena.

Si la primera parte había sido el homenaje a la grandeza incaica y a la raza materna, en la Segunda Parte, pudo rendir el tributo equivalente a la sangre paterna y a las gallardas empresas de España.

Actualmente los simbolistas ven en su lengua, el símbolo del mestizaje hispanoindio.[2]

En el presente trabajo, intentaremos analizar su obra, no como fidelidad histórica, sino su mestizaje literario, así como sus cualidades literarias de amenidad, gracia formal y elegancia.

1. Las fábulas y leyendas de los Incas

La leyenda de "El origen de los Incas Reyes del Perú, narrada en los capítulos XV al XVII del libro primero, es una de las narraciones más hermosas que nos ha transmitido Garcilaso. Es una joya artística, dentro de la tradición oral indígena, recogida por los cronistas durante los siglos 15 al 17.

La leyenda trata de ser modificada por la influencia española:

> "Algunos españoles curiosos quieren decir, oyendo estos cuentos, que aquellos indios tuvieron noticia de la historia de Noé, de sus tres hijos, mujer y nueras, que fueron cuatro hombres y cuatro mujeres que Dios reservó del diluvio, que son los que dicen en la fábula..."[3]

Por medio de sus narraciones nos da una idea de la mentalidad y la forma de pensar de los indígenas:

> "Para las manchas de la Luna decían otra fábula más simple que la de los perros...Dicen que una zorra se enamoró de la luna viéndola tan hermosa, y que, por visitarla, subió al cielo, y cuando quiso echar mano della, la luna se abrazó con la zorra y la pegó a sí y que desto se hicieron las manchas."[4]

Así, entre cuentos y verdades, surge la historia de los Incas, sus costumbres, sus hazañas, pero también el encanto de sus leyendas, como cuando las piedras se convierten en hombres para salvar al Cuzco en tiempos del Inca Pachacútec.[5]

Por otro lado, es notable la capacidad crítica de Garcilaso para no tratar como sucesos históricos realmente acaecidos los que cuentan los relatos míticos. Los mitos y leyendas de origen Incaico, por ejemplo, son calificados en el libro primero, caps. XVIII y XIX; es decir, inmediatamente después de haber sido contados como "fábulas", al modo de las narraciones de la mitología greco-romana. En los libros restantes de sus Comentarios, en varias oportunidades, Garcilaso aclarará cuándo son narraciones "fabulosas" a las que se le ha conferido valor simbólico o alegórico, preocupándose por establecer el probable fondo "historial" que contengan.

A pesar de reputarlos narraciones "fabulosas" y no propiamente "historiales", los mitos y las leyendas poseen interés historiográfico para Garcilaso.

En el cap. XV del libro primero, Garcilaso afirma:

> "Y puesto que estamos a la puerta, de este gran laberinto, será mejor pasemos adelante a dar noticias de lo que en él había."[6]

La imagen del "laberinto" sugiere que esta materia es muy compleja, rodeada de

oscuridades y confusiones, que dificultan orientarse en la senda de la verdad histórica de quienes carecieron de escritura, para fijar adecuadamente los sucesos del pasado, por ello considera que tanto la verdad como la fábula eran necesarias para la reconstrucción del espíritu de un pueblo y de una época; así recoge las leyendas o fábulas con calor y simpatía filiales, a sabiendas de que son invención popular y por lo tanto historia anímica de su raza.

2. Conciliación de poesía y narración

En Garcilaso, todo es poético. Podemos ver en su obra, cómo la construcción de las oraciones rompe la simétrica ordenación gramatical, para dar rienda suelta a la figuración o poetización del lenguaje. Como ejemplo, tenemos la descripción de los Andes:

> "Al levante tiene por término aquella nunca jamás pisada de hombres, ni de animales, ni de aves, inaccesible cordillera de nieves."[7]

Las descripciones van acompañadas de emoción poética. Parecía inpresionarle el paisaje de las cumbres y vegas de la sierra. Garcilaso nació y creció en la sierra, pero tuvo una experiencia directa con la costa, al recorrer sus ciudades y el mar antes de su viaje a España. Al parecer, el mar lo impresionó por su gravedad y trascendencia. En el libro sexto, cap. XX, describe con deleite un bellísimo espectáculo de las aves marinas, convirtiéndose en una de las páginas más hermosas de sus Comentarios:

> "A ciertas horas del día, por la mañana y por la tarde, a la hora que los peces se elevan a sobreaguarse, cuando las aves tienen más hambre, estas se juntan en grupos o pelotones como dos torres de alto y de allí, como halcones de altanería, cerradas las alas se precipitan a coger peces, y se zambullen debajo del agua hasta que lo pescan; algunas veces demoran tanto que parece haberse ahogado; debe ser porque los peces huyen; y cuando casi se certifica la sospecha se les ve salir triunfantes con un pez atravezado en el pico y levantando vuelo se lo engullen. Es agradable ver como descienden unas y sentir los golpazos que se dan en el agua; al mismo tiempo avistar las que salen con la presa, y otras que caen a medias y se vuelven a levantar y subir alto por desconfiar del lance. En suma, es muy agradable ver 200 halcones juntos que alternadamente bajan y suben a veces como los martillos del herrero."[8]

Garcilaso es poético hasta para contarnos la historia. Es increíble su imaginación rememoradora. La descripción del Cuzco está llena de ricos matices expresivos:

> Su población empieza de las laderas y faldas de un cerro alto y se tiende a todas partes por un llano grande y espacioso. Tiene calles anchas y largas y plazas muy grandes, por lo cual los españoles, todos en general y los escribanos y los notarios en sus escrituras públicas usan del primer título."[9]

Asimismo, da pinceladas de color y de gracia literaria al ambiente de sus fiestas y la labor de los campos:

> "Entraban en las fiestas haciendo ademanes y visajes de locos, tontos y simples. Para eso traían en las manos instrumentos apropiados, como flautas y amborinos mal concertados, pedazos de pellejos con que se ayudaban para hacer sus tonterías."[10]

Garcilaso usa modismos y localismos, pero no se aparta de lo hispano, creando una especie de lenguaje mestizo. Encontramos en sus párrafos un dominio del idioma y la novedad castiza de algunos vocablos, que son muestras de amplia versación idiomática. Vemos por otro lado, una emoción incontenible en sus relatos, la capacidad para absorber novedades lexicales y sintácticas y la violación de cualquier regla si fuera necesaria.

3. El mestizaje como nuevo fruto

"Los Comentarios Reales", obra cumbre del Inca Garcilaso, constituye en la literatura la aparición de un tipo humano completamente nuevo, el mestizo. Sin embargo, no es sólo un mestizaje biológico, del hombre en cuya sangre se mezclan la europea y la americana, pues en el caso de la conquista española de América, por la carestía de mujeres europeas, tuvieron que aparearse con mujeres de la raza conquistada, siendo el mestizaje racial, una consecuencia inmediata; y en ese sentido, el mestizaje del Inca Garcilaso, no es el primero. En el sentido literario, es el primero en asegurar la continuidad histórica del Perú como un nudo entre el pasado imperial y los nuevos tiempos, al llevarla a la escritura, la tradición oral incaica.

"Los Comentarios Reales" el libro donde se unen y suman la madre y el padre, indios y españoles, lenguas y culturas, los objetos del viejo y nuevo mundo; y por lo tanto, es el escenario del nuevo fruto de esta pluralidad, el mestizo actual, hecho de la lectura y la escritura.

Para Garcilaso, la nueva cultura hecha de transplantes y mezclas tiene en los procesos naturales una metáfora de sus propias riquezas:

> Han habido españoles tan curiosos en agricultura, que han hecho injertos de árboles frutales de España con los frutales del Perú, y que sacan frutas maravillosas con grandísima admiración de los indios, de ver que a un árbol hagan llevar al año dos, tres, cuatro frutas diferentes."[11]

En la Segunda Parte de los Comentarios, en el Prólogo, del mestizaje de frutos, nos sugiere un mestizaje cultural:

> "A esta causa escribí la crónica de la Florida, de verdad Florida, no con mi seco estilo, mas con la flor de España, que trasplantada en aquél páramo y eriazo, pudiera dar fruto y bendición desmontando a fuerza de brazos de maleza del fiero paganismo y plantando con riego del cielo el árbol de la cruz y estandarte de nuestra fe, vara florida de Aarón y Jesé."[12]

La religión cristiana introducida por los españoles fue uno de los elementos más importantes del mestizaje:

> "Tuvieron los reyes Incas en el Cuzco, una cruz de mármol fino, de color blanco y encarnado que llamaban jaspe cristalino: no saben decir desde qué tiempo la tenían... Acuérdome que el cordel era un orillo de terciopelo negro...La cruz era enteriza, toda de una pieza, muy bien labrada."[13]

Sin embargo, para Garcilaso, no sólo el Perú, sino también España debe de recibir nuevos elementos culturales. Cuando se refiere a su maestro Cuéllar, diciéndole a Garcilaso y otros niños de su edad: "¡Oh hijos! y cómo quisiera ver una docena de vosotros en la Univ. de Salamanca", Garcilaso agrega:

> "Pareciéndole podían florecer las nuevas plantas del Perú en aquél jardín y vergel de sabiduría. Y por cierto que tierra tan fértil de ricos minerales y metales preciosos, era razón criase venas de sangre generosa y minas de entendimientos despiertos para todas artes y facultades."[14]

En el cap. XXXI, del libro noveno, expresa la necesidad de crear un nuevo lenguaje mestizo, para nombrar a los hijos nacidos de la mezcla de español e india:

> "A los hijos de español y de mestiza, o de mestizo y española, llaman cuatralvos, por decir que tienen cuarta parte de indio y tres de español. A los hijos de mestizo y de india, o de indio y de mestiza, llaman tresalvos, por decir que tienen tres partes de indio y una de español. Todos estos nombres y otros,

se han inventado en mi tierra para nombrar las generaciones que ha habido después que los españoles fueron a ella, y podemos decir que ellos los llevaron con las demás cosas que no había antes."

Finalmente, afirma Garcilaso, que habiendo leído esta obra el rey Felipe II, dijo: "Mirad este libro, que es fruta nueva del Perú."[15]

Efectivamente, su obra es fruta nueva, mestiza como el propio Inca. Con él nace esa peruanidad de que nos habla Mariátegui: "Garcilaso, sobre todo, es una figura solitaria en la literatura de la Colonia. En él se dan la mano 2 edades, 2 culturas. Es un caso de excepción. Y en esto reside precisamente su individualidad y su grandeza...Garcilaso llena con su nombre y su obra una etapa entera de la literatura peruana."[16]

4. Síntesis y equilibrio de Inca

El artista indio José Sabogal, representa en un cuadro, el mestizaje peruano, en la doble figura de Garcilaso. La misma encarna los dos mundos de imágenes que la Conquista legó: el indio y el español. Este rostro dividido en dos, por una parte el color blanco del conquistador, y por la otra el cobrizo del conquistado, forman sin embargo, un solo cuerpo, que representa la anexión de elementos culturales provenientes de diferentes mundos y que ha dado origen a una síntesis y confluencia de dos sangres, dos razas y dos culturas muy diferentes.

En los años de la adolescencia, el influjo materno marcó una huella profunda en el alma de Garcilaso y más tarde, casi durante 50 años, recibiría sólo la influencia española. Aún así, el espíritu y orientación del Inca, siempre fue de síntesis y alcanzó a mantener este equilibrio.

En los Comentarios Reales, no sólo trata de la presentación y encuentro de dos mundos, sino también de la implantación de una nueva cultura, en un mundo nuevo; por eso, el Prólogo de la Segunda Parte de los Comentarios está dirigida a los indios, mestizos y criollos de los reinos y provincias del grande y riquísimo Imperio del Perú.[17] Reconoce así, que el mestizaje se manifiesta de igual modo y más a lo hondo que todos los lazos de sangre, en una vinculación espiritual. Por eso se declara hermano de los criollos:

"A los Indios, Mestizos y Criollos de los Reinos y Provincias del grande y riquísimo Imperio del Perú, el Inca Garcilaso de la Vega, su hermano,

compatriota y paisano, salud y felicidad..[18]

El peruanismo del Inca es de tal modo no fragmentario ni excluyente, sino de integración y fusión. Por encima de todas las limitaciones de color o clase, recoge y siente suyos lo español y lo indio, los productos de fuera y los frutos autóctonos. Todo esto, debido a su experiencia y vivencia tanto con indios como españoles. Desde su infancia, junto al diálogo con parientes de la nobleza incaica, se sumaban las conversaciones con capitanes españoles. Junto a las fiestas tradicionales y las telas multicolores de los indios, desfilaban ante sus ojos los cuadros de raigambre española, las procesiones y los juegos de cañas.

Esta capacidad de combinar elementos de ambas culturas, la podemos observar también en sus narraciones, en donde a las tradiciones incaicas, superpone relatos bíblicos. En algunos capítulos, sugiere significaciones con sutileza, especialmente cuando el pasaje tiene dosis humorística. En el capítulo de "Las Gallinas y Palomas", luego de explicarnos que estos animales fueron traídos por los españoles, trae a relación el canto del gallo bíblico, cuando Pedro niega a Jesús.

Inicia afirmando que Atahuallpa fue muerto por los españoles en venganza por haber traicionado a su hermano Huáscar, legítimo Inca, y que los indios creen que cuando los gallos cantan, dicen "atahuallpa":

> "...y como oyeron cantar a los gallos, dijeron los indios que aquellas aves para perpetua infamia del tirano y abominación de su nombre lo pronunciaban..."[19]

Garcilaso recuerda aquí al gallo de la Pasión de Cristo, el que hace reparar a Pedro que está negando a su Maestro.

Por otro lado, su afán de sintetizar ambas culturas, hace que considere la conquista como una necesidad. Justifica hábilmente la Conquista por lo que ella representa de introducción de la cultura occidental a través de España, y sobre todo, por la evangelización en "la tierra pagana de los Hijos del Sol"

> "Las fuertes armas de la noble España abrieron por mar y tierra puertas y camino a la conquista y conversión de las opulentas provincias del Perú; pero si triunfaron en la empresa, quedaron no menos triunfadores los Peruanos vencidos, por salir con favor del cielo vencedores del demonio, pecado e infierno, recibiendo un Dios, una Fe y un Baptismo."[20]

Podemos concluir que al Inca le complace encontrar en su tierra, prendas de 2 naciones. Como mestizo que era, quería por igual las 2 herencias. La historia le

mostraba su trágica irreversibilidad. Sólo cabía aceptarla y combinar los 2 pueblos, el de los conquistadores y el de los vencidos.

5. Conclusiones

La obra del Inca representa en la literatura, la aparición del mestizo, por un lado, como hombre en cuya sangre se mezclan la europea y la americana, y por otro, como base primigenia de la transculturización indohispánica.

Al valor histórico de su obra, se puede agregar la maestría literaria, la calidad de prosador de ficción, de creador de narraciones con que intercala la presentación histórica. Crítico y creador, describe minuciosamente lo que ha visto y oído, y se complace en el detalle de las pequeñas cosas. Los Comentarios Reales es una obra donde hay conjunción de historia y poesía, con imaginación mezcla la verdad y la fantasía, transportándonos a una tierra de maravilla. Su vocabulario es variado y rico: introduce arcaísmos en su lenguaje rigurosamente moderno y se complace en conservar muchas expresiones y nombres quechuas.

En Garcilaso se dan las principales características del alma peruana y de su literarura, como el orgullo de ser indio, la tendencia nostálgica y evocativa, sensibilidad para los detalles, curiosidad, gusto y maestría para narrar las anécdotas con anhelo artístico de perfección.

Lo que sorprende en Garcilaso es la manera como equilibra los hechos heroicos incaicos con los españoles, así como la veracidad sustancial del relato con la fina elegancia de adornos novelescos.

Garcilaso se erige como el primer natural del Nuevo Mundo que inicia la literatura en lengua castellana, y además, es el primer peruano que escribe cumpliendo una misión, la de interpretar la historia peruana hasta el final de los incas de Vilcabamba y de lograr para su patria una respuesta de armonía y fusión en el futuro.

Podemos concluir que Garcilaso pone en juego toda su habilidad literaria para mantener vivo el interés del lector, e inserta pasajes amenos y jocosos, lo que coincide con el gusto de las letras españolas de mezclar lo trágico y lo cómico, lo grave y lo burlesco.

Es pues, el puente más autorizado de diálogo y verdad entre dos cosmovisiones tan diversas, convirtiéndose en el monumento primogénito del mestizaje literario peruano. Por eso, su obra no puede ser estudiada solo desde el punto de vista literario

o histórico, sino también como humanista, por su profunda virtud y ejemplo integrador.

Notas

1. José Carlos Mariátegui, Siete ensayos de interpretación de la realidad peruana, Ed. Amauta, Lima, 1991, p. 237.
2. Véase, por ejemplo, de Alonso Amado, El problema de la lengua en América, Madrid, 1935.
3. Inca Garcilaso de la Vega, Comentarios Reales, libro primero, cap. XVIII, p. 41, Ed. Mercurio, Lima, 1988.
4. Ibíd., libro segundo, cap. XXIII, pp. 107, 108.
5. Ibíd., libro quinto, cap. XVIII, p. 83.
6. Ibíd., libro primero, cap. XV, p. 34.
7. Ibíd., cap. VIII, p. 20.
8. Ibíd., libro octavo, cap. XIX, pp. 110, 111.
9. Ibíd., libro séptimo, cap. VIII, p. 21.
10. Ibíd., libro sexto, cap. XX, p. 150.
11. Ibíd., libro noveno, cap. XXVIII, p. 174.
12. Inca Garcilaso de la Vega, Segunda Parte de los Comentarios Reales, libro primero, p. 13, Ed. Atlas, Madrid, 1960.
13. Ibíd., libro segundo, cap. III, p. 63.
14. Ibíd., prólogo.
15. Ibíd.
16. José Carlos Mariátegui, op. cit., p. 236.
17. Inca Garcilaso, Segunda Parte, Tomo III, prólogo.
18. Ibíd.
19. Inca Garcilaso, Com. Real., libro noveno, cap. XXIII, p. 166.
20. Inca Garcilaso, Seg. Part., dedicatoria.

Bibliografía

Basadre, J., Literatura Inca, Ed. Biblioteca de Cultura Peruana, París, 1938.

Biblioteca de cultura peruana, Los cronistas de la conquista, Ed. Desclée de Brouwer, París, 1938.

Comentarios Reales de los Incas, Banco de Crédito del Perú, Lima, 1985.

Cox, C., Utopia y realidad en el Inca Garcilaso, U.N.M.S.M., Lima, 1965.

Diccionario enciclopédico ilustrado Sopena, Ed. Sopena, Barcelona, 1982.

Flores Galindo, A., Buscando un Inca: identidad y utopía en los Andes, 3 era ed. Ed. Horizonte, Lima, 1988.

González Vigil, R., Comentemos al Inca Garcilaso, Banco Central del Perú, Lima, 1989.

González Vigil, R., Genio y complejidad del Inca Garcilaso, Diario El Comercio, suplemento Dominical de Lima, 9 de abril de 1989, p. 16.

Inca Garcilaso de la Vega, Comentarios Reales de los Incas, Librería internacional del Perú, Lima, 1959.

Inca Garcilaso de la Vega, Comentarios Reales de los Incas, Tomo I, Biblioteca de Autores Españoles, Ed. Atlas, Madrid, 1965.

Inca Garcilaso de la Vega, Segunda Parte de los Comentarios Reales, Tomo II, Biblioteca de Autores Españoles, Ed. Atlas, Madrid, 1963.

Inca Garcilaso de la Vega, Segunda Parte de los Comentarios Reales, Tomo III, Ed. Atlas, Madrid, 1960.

Inca Garcilaso de la Vega, Segunda Parte de los Comentarios Reales, Tomo IV, Ed. Atlas, Madrid, 1965.

Inca Garcilaso de la Vega, Comentarios Reales, Tomos I, II, III, Ed. Mercurio, Lima, 1988.

Inca Garcilaso de la Vega, Primer Criollo, Ed. Fondo del libro del Banco de los Andes, 5 ta. ed. Lima, 1979.

Jiménez Borja, J., Valor educativo de los Comentarios Reales, Centro de Estudios Históricos Militares de Perú, Lima, 1955.

Leonard, I., El primer escritor clásico de América: el Inca Garcilaso de la Vega, Vol. II, Ed. Villanueva, Lima, 1987.

Lienhard, M., La crónica mestiza en México y Perú hasta 1620: apuntes para su estudio histórico-literario, Revista de Crítica Literaria Latinoamericana; año IX, num. 17, Lima, 1983.

Mariátegui, J. C., 7 ensayos de interpretación de la realidad peruana, Ed. Amauta, 55ta. ed., Lima, 1989.

Miro Quesada, A., El Inca Garcilaso y otros estudios garcilasistas, Ed. Cultura Hispánica, Madrid, 1971.

Miro Quesada, C., Rumbo literario del Perú, "Los cuatro grandes: El Inca Garcilaso de la Vega, el precursor", Ed. EMECE, Buenos Aires, 1947.

Ortega, J., Para una teoría del Texto latinoamericano: Colón, Garcilaso y el discurso de la abundancia, Revista de Crítica literaria latinoamericana, Año XIV, No. 28, 1988, pp. 101-115.

Riva Aguero, J., Del Inca Garcilaso a Eguren, Pontificia Univ. Católica del Perú, Lima, 1962.

Sánchez L. A., El Inca y la nueva visión de la realidad americana, Panorama crítico de la literatura hispanoamericana, No. 1, Ed. Nuevo Continente, Honduras, 1973.

Sánchez L. A., La literatura peruana, derrotero para una historia cultural del Perú, Tomo I, 5 ta ed. Ed. Mejía Baca, Lima, 1981.

Sánchez L. A., Literatura prehispánica, en Historia General de América, Tomo I, Ed. Mejía Baca, Lima, 1991.

Valcarcel, L., Historia del Perú antiguo a través de la fuente escrita, Tomos III y IV, Ed. Mejía Baca, Lima, 1985.

Tamayo Vargas, A., Literatura Peruana, Tomo I., Ed. Iberia, Lima, 1974.

プエルトリコ女性解放における米国の影響

志 柿 禎 子

I. はじめに

プエルトリコは、1898年のパリ条約以降米国の主権の下にある。それは、善きにつけ悪しきにつけ、プエルトリコ社会が米国の強い影響下にあることを意味する。

また、近代産業社会の成立が、生産過程と労働力の再生産過程の分離を生み出し、それが、近代産業社会において女性問題を大きく浮き上がらせる原因となったことは、つとに指摘されることであるが、プエルトリコにおいては、その工業化の波が米国化として進行している。つまり、政治的に米国の強い影響下にあるという事実、それから女性の問題を社会問題として浮上させる工業化という経済的側面もまた米国化という過程を通ったということである。従って、プエルトリコの女性解放運動は、同じく米国の影響を受けたラテンアメリカ諸国の女性解放運動より[1]、より直接的な形で米国社会の動向と密接に関連していった。

今世紀初期プエルトリコにおいても女性参政権の運動が展開された。その結果、1929年に読み書きのできる女性に対する選挙権が獲得され、1935年にすべての成人女性に対する選挙が権獲された。このプエルトリコの女性参政権運動の過程では、上述のように、アメリカ合衆国政治と絡み合う形で婦人参政権が獲得されていった。しかし、この運動に対し、同じプエルトリコ人の間から、「親米派」あるいは「反愛国的」という非難が生じた[2]。女性参政権に対する嫌悪の中に、アメリカ合衆国に対する反感が塗り込まれていると言える。

これは、女性の社会的位置の改善の問題に対し、プエルトリコの政治的地位の問題という次元の異なる問題が混在されていることを意味するが、本当に彼女たちは「親米派」であり、「反愛国的」なのであろうか。

II. 工業化と女性の社会的地位

上野千鶴子はその著『家父長制と資本制』[3]の中で、マルクス経済学が手を触れなかった労働力の再生産過程の分析を試みている。マルクス経済学では、労働力の再生産過程は、資本制社会の中では資本の論理が貫徹しない部分として、生産から切り離されたところに存在しているとする。つまり、「労働力の再生産過程は、資本からは独立した労働者の個人的生活であって、この過程自体を資本は自己の流通の内部に包摂することはできない。にもかかわらず労働力は、生産過程の主体的要因であって、これが繰返し生産され、資本にたいして商品として提供されることなしには、資本はその再生産を、したがってその社会的支配を維持することはできないのである[4]」ということになる。しかし、それ以上の分析を行なわなかったのがマルクス経済学だったわけで、それを批判し分析のメスを入れたのがマルクス主義フェミニストたちの功績であると上野千鶴子は指摘している。

この上野千鶴子の『家父長制と資本制』の最も重要な点は、近代以前から存在していた家父長制と資本制とが互いに調整し合いながら現在の社会のシステムが出来上がっていることを解き明かしていくことにある。生産過程と労働力の再生産の過程の分離は近代産業社会形成の過程で起こった現象であること。そのために、女性が生産の過程から切り離され、再生産過程、つまり家庭の中に（近代以前は生産の場でもあった）閉じ込められる現象が起こったこと。生産の場から外れた存在であることで、子供、老人等とともに女性は低い地位に位置付けられ、その上で再度、生産の場にひきずり出すことで、男性より低賃金の労働力とすることが可能になることを指摘している。

従って、金銭的価値に換算されない労働力の再生産の場に置かれた低い位置にある女性の存在をつくることで、資本制社会は出発したと言える。このような理由で、近代になって女性の問題が浮上してくる結果になったのである。

このことは、プエルトリコで高等学校教材及び一般向け歴史テキストとして作成された*Participación de la mujer en la historia de Puerto Rico* においても同様に説明されている。

> Las transformaciones económicas que trajo el capitalismo fueron afectando también la imagen social de la mujer y su trabajo. En las sociedades anteriores, las

mujeres de las clases trabajadoras laboraban junto a los hombres en lo que era predominante una producción o intercambio familiar. Participaban así del trabajo reconocido social y económicamente como necesario. Aunque subordinadas al hombre, no se encontraban en total dependencia económica. Con el desarrollo del capitalismo, la familia fue dejando de ser una unidad de producción. Mientras los hombres se vieron más presionados a trabajar por un salario fuera del hogar, las mujeres y niños fueron quedando en una mayor dependencia de su ingreso. La esfera de la mujer fue así reduciéndose a lo que ahora constituía un ámbito doméstico aislado, en el cual su trabajo no se reconocía como una aportación económica. Desvalorizado su trabajo, se intensificaba la visión de inferioridad y subordinación de la mujer. (p.5)

工業化社会になって女性問題が社会的な問題として浮上してくる理由は以上のようになるわけだが、では、具体的にプエルトリコの場合をみると、そこには米国との抜き差しならない関係といったものが浮び上がってくる。

III. プエルトリコの工業化の過程と女性の社会への参入

プエルトリコでは19世紀半ば頃から米国製品がプエルトリコに浸透していき、プエルトリコ経済における米国の存在が大きなものとなる。それは1898年に米国主権下へ移行することでさらに拍車がかかる。それまであった砂糖生産にしても、米国資本の参入で工業的要素を持つようになるし、タバコ産業にしても同様である。このような経済的背景の上でプエルトリコの政治的動向においても、必然的に米国の政治動向が大きく関わってくることになった。従って、工業化の進展と共に生起した女性解放運動もまた、米国政治と密接な関わりが生じてくるのも当然と言える。

ところで、プエルトリコの工業化が米国資本の参入で拍車がかかったと述べたが、繊維産業も、プエルトリコの安い労働力に注目した米国資本が参入することで、今世紀に入り島に普及していった。そして、この繊維産業の場とそれから前述のタバコ産業の場に多くの女性労働者が使用されたのである。従って、プエルトリコ労働運動においては、女性労働者の組織化という課題が重要な焦点となった。

プエルトリコでは、1898年にFederación Regional de Trabajadoresという初の労働組合的性格を持つ組織が作られ、1899年にFederación Libre de los Trabajadoresが創設されるが、これらの組織が女性労働者の組織化及び教育に積極的に取り組んで行く。これらの労働運動の隆盛を背景に1915年、労働運動の政治組織的部門として社会党が創設される。この社会党は地方委員会の設立に勢力を傾けるが、その加入者の三分の一が女性であったという[5]。

そして、このFederación Libre de los Trabajadoresは1908年に女性参政権要求を掲げ[6]、1915年に創設された社会党が、党として最初に女性参政権を要求する党となる。また、この党は、早くも1920年の段階で、9人の副党首のうち二人は女性を登用するという党規則を定めている[5]。

ところで、19世紀後半、プエルトリコで組合運動を組織したがためにスペイン政府の迫害を受けた経歴を持つ前述社会党党首サンチアゴ・イグレシアス・パンティンは、1989年以降、米国労働組合との連携を密にしていった。米国の最大労働組合の一つであるAmerican Federation of Laborと頻繁に連絡を取合いながら組合運動を展開していったのである[7]。また、労働組合創設当初は政治とは一線を画すという姿勢を取っていたが、やがて、サンチアゴ・イグレシアスの社会党は米国州制移行派へと移っていく。つまり、女性の権利拡大を推進したこの政党は、成立当初から反米意識なるものは希薄であったのである。

IV. プエルトリコの女性参政権運動

1900年以降、米国側はプエルトリコにおける公的教育の普及及び充実の政策にとりかかる。多くの子供たちが教育を受けるようになるのと同時に、女性の教育機会も大幅に改善された。19世紀には女性で高等教育を授かる者はほんの一握りの女性であったのが、20世紀に入りその数は飛躍的に増加した。1903年プエルトリコにプエルトリコ大学が創設されるが、1903年から1923年の間の卒業生のうち女性が74パーセントを占め、多くが教師、看護婦の職へ就いた。そして、これらの女性たちの中から、多くの婦人参政権獲得運動の指導者が輩出していくのである[8]。

ところで、女性問題に対し多くの発言をしている批評家小浜逸郎によれば、「女性が男性に対して劣位に位置づけられてきたことを示すもっとも明かな指標は、公的立場からの女性の締め出しで」ある。「要するに、社会的な意思決定機構に参加する資格が長い間女性に与えられてこなかったという事実であ

る。」と述べている[9]。実際多くの工業国で、女性解放運動の第一波としては、女性参政権獲得運動が当面の第一目標となった。プエルトリコも同様で、今世紀初頭に女性参政権獲得の運動が隆盛を究めているが、先ほどみた労働運動側からの要求と、それから中産階級のインテリ層及び有産階級の女性からの女性参政権要求というこの二つの流れが大きな柱となった。

1917年、Jones Actでプエルトリコ市民は米国市民権を与えられる。そして、その米国では1920年に婦人参政権が獲得されている。このことから、プエルトリコでは、1921年にFederación Libre de Trabajadoresの代表者としてヘネーラ・パガン・デ・アルセが地方選挙登録委員会を訴える形で女性参政権を要求をする。プエルトリコ女性参政権運動の中には米国領土である以上、プエルトリコにも同様の権利が認められるという強い期待があったのである。しかし、結果は敗北であった。この法的拒否を目の前にして、プエルトリコに存在していた女性参政権を要求する団体は米国の援助を求めにいく。La Liga Social Sufragistaが米国女性団体のPartido Nacional de Mujeresに加わりLa Asociación Puertorriqueña de Mujeres Sufragistasが同じく米国女性団体のla Asociación Nacional de Mujeres Votantesに加わる形で、米国議会へロビー活動を行ったのである[10]。その成果があがり、米国議会はプエルトリコの女性参政権を承認するための法律改正のプロジェクトを作成した。実はこのことが、一部の人には米国のプエルトリコ政治への干渉、またこの女性団体の行為が反愛国的行為として映ったのである。

最終的には米国議会の介入という形ではなく、当時、米国大統領によって任命（知事民選は1947年から）されて知事職にあったTownerがプエルトリコ議会に申立てるという形で1929年読み書き能力のある婦人の参政権が承認されている。そして、1935年に全ての女性に対する選挙権が成立した。こうして婦人解放運動は大きな前進をするわけだが、この間の経緯から、女性参政権団体は党派から一線を画すようになった[2]。また1930年代になり不況の中でタバコ工場や繊維工場が閉鎖されていくにつれ、戦闘的女性労働者も減少していき、いわゆる女性解放運動の第一波は終焉していく。

簡単にプエルトリコの女性参政権獲得過程をおってみたが、以上のことからも明かなように、プエルトリコ内における女性参政権運動の盛り上りを背景に、女性参政権論者は、米国の女性団体に援助を求め、最終的には米国政府に働きかけるという行動に出ている。これは、プエルトリコが米国政治の

強い影響下にあるという状況から自然に出てきた判断と言える。これをもう少し大きく捉えると、米国経済圏の中での近代工業化の過程から、女性参政権の運動が起こり、米国の女性解放運動と連携しながら、つまり米国政治の動向と絡み合いながら女性参政権獲得のプロセスが進んでいったと整理できよう。しかし、同時に、米国への反感というものも米国主権下という状況下から発生したものである。そして、その反感を持ってすれば、女性参政権獲得のための女性たちの行動も、反愛国的行動に映ったということであろう。

V. 日本との比較及び結論

ところで、ここで興味深いことに気付く。それは、例えば日本の戦前の女性参政権運動の女性団体が、時の政治に働きかけながら、時には妥協もし、そして遂には戦争協力のために組織された大政翼賛会傘下の大日本婦人会に積極的に協力していったが、その過程について、女性解放活動家であった市川房枝は、「運動の初期に社会主義者の人たちから、『もし婦人の地位の向上を望むなら、自分たちの陣営に来い。現状を認めて、政府・政党などへ働きかける運動をしているのは敵だ』と攻撃されたものであった。たしかに今日でいう体制側に立っていたであろう。しかし保守的な政府及び既成政党の政友会、民政党及びその所属議員とも交渉を持ち、ときには婦人参政権に賛成する人格者を選挙で応援したこともあり、かくして政治的権利の一部を獲得していったのである[11]。」と述べている。それは、ある意味で、彼女たちにとっては、まずは、女性の権利を獲得することが第一であったということである。この市川房枝たちの戦争協力の行動は、現在となっては、批判される結果となったとしても、とにかく戦争の是非よりも、まずは女性の権利獲得ということを第一義にした政治判断をしなければならない、という発想があったことが見てとれる。それは、言い換えれば、女性である自分たちが政治的発言権を持たない男性社会の中で、どのように動き回るかという判断であったとも言える。

最終的には日本は戦後、米国占領軍の政策の一環として女性参政権が認められ、女性の地位向上も米国占領軍の政策として進められた。労働省の中に婦人少年局が設置され、その初代局長には日本軍部に協力しなかった人という人選で、先鋭的なマルクス主義者であり社会主義婦人解放論の論客とされていた山川菊枝がその任にあたった[12]。山川菊枝はこのことについて、「私はもとより管吏の適材ではなく、不才無経験でヘマもやりましたが、ただこの

特殊の歴史的段階において、婦人と労働者への官庁に例のない正しい、良心的、献身的な仕事ぶりの基礎をおき、伝統をきずくために、忍び難きを忍んで[13]」任務を遂行したと振り返っている。

現在では日本でのマルクス主義フェミニズムを標榜する上野千鶴子が、その立場を、あくまでもフェミニズムが第一であり、マルクス主義は、それが、現代社会を分析するにあたって現在ある中で最も有効な理論であるから利用するだけであり、「それが女性の抑圧の分析に何の役にも立たないとあれば、それを捨て去るのに一滴の涙も流さない」というマルクス主義フェミニストのデルフィの言葉を引用し、あくまでもフェミニストという立場であることを述べている[14]。

これら女性解放論者たちは、女性の権利を獲得するために、プエルトリコでは米国政府に働きかける、戦前の日本では軍事政権に働きかける、上野千鶴子によればマルクス主義を利用する、と立場は様々だが、それぞれ、女性の権利を獲得するためにはどうすればよいか、というのが第一であって、そのためにそれぞれが抱えている政治状況のなかで、どういった行動をとっていくのかという発想をしているという点では共通している。つまり、その政治判断とは自分たちの目的達成のための、つまり女性の権利拡大のための戦略的意味合いでしかなかったとも言える。

従って、プエルトリコの反愛国的と非難されたプエルトリコ女性参政権論者たちの行動とは、言い方を変えれば、女性の権利獲得が第一であり、プエルトリコの植民地的状況に対しては、二の次の問題として考えていたということになる。それは、直接の「親米派」とは言えないであろう。もちろん、「反米」でなかったことは確かである。

しかし、それは、ある意味では、ある一つの利益集団の行為としては自然であり、当然のことでもある。そのために、利益集団が存在するわけだから。また、女性が政治的力関係の場から外されている以上は、それを二次的問題としたのも無理からぬことであると言えよう。

注

1) 国本伊代・乗浩子編、『ラテンアメリカ　社会と女性』、東京、新評論、1985、pp. 360–362.
2) Centro Coordinador de Estudios, Recursos y Servicios a la Mujer, Centro de Investigaciones Sociales de la Universidad de Puerto Rico, *Participación de la*

mujer en la historia de Puerto Rico, NewJersey, Rutgers, 1986, p.44.
3) 上野千鶴子『家父長制と資本制』、東京、岩浪書店、1992.
4) 降旗節雄『経済学全集4マルクス経済学の理論構造』、筑摩書房、1974、p.134.
5) *Participación de la mujer en la historia de Puerto Rico*, p.32
6) Azize,Yamila, *La mujer en la lucha*, Rio Piedras, Puerto Rico, 1985, p.93.
7) Picó, Fernando, *Historia general de Puerto Rico*, Rió Piedras, Puerto Rico, Ediciones Huracán, Inc, 1986, p.234.
8) *Participación de la mujer en la historia de Puerto Rico*, p.19.
9) 『わかりたい男のフェミニズム入門別冊宝島女が分らない』JICC出版局、1990、p.150.
10) *Participación de la mujer en la historia de Puerto Rico*, p.42.
11) 市川房枝、『市川房枝自伝戦前編』、東京、新宿書房、1974、p.617.
12) 西清子編著、『占領下の日本女性政策その歴史と証言』、東京、ドメス出版、1989、pp.67–68.
13) 山川菊栄、『山川菊栄集第七巻』、東京、岩波書店、1982、p.119.
14) 『家父長制と資本制』、p.28.

Agustín de Iturbide

El surgimiento de la clase militar durante la Guerra de la Independencia

Reiko TATEIWA

Introducción

La independencia de México se logró a través de una componenda de distintas fuerzas que formaban la sociedad novohispana. De ellas enfocaremos, en el presente trabajo, la clase militar que fue consolidándose hacia las primeras décadas del siglo XIX. De estos militares destacaremos sobremanera a Agustín de Iturbide, oficial criollo del ejército real, quien dirigió el movimiento de la independencia en 1821, reuniendo los principales oficiales del ejército real.

Agustín de Iturbide, el héroe de la Independencia y el primer emperador del Imperio Mexicano, fue desprestigiado por sus contemporáneos[1] debido a sus actos posteriores como el encarcelamiento de los liberales y la disolución del congreso. A raíz de estos hechos la figura de Iturbide fue relegada por la de Miguel Hidalgo, pasando a ser éste el Padre de la Independencia. Sólo después de 1985, año en el que el historiador Timothy Anna publicó una revisión acerca de la contribución histórica de Agustín de Iturbide[2] se despertó el interés por tratar de ubicarlo en el lugar que le corresponde en la historia.

En este trabajo, siguiendo este paso de revisionismo, analizaremos a Iturbide, dentro del contexto en el que surgió la clase militar, hasta convertirse en el pilar del movimiento emancipador en 1821.

I. La formación de la clase militar

Hacia la segunda mitad del siglo XVIII la hegemonía española se veía seriamente amenazada en el Océano Atlántico, particularmente, por Inglaterra que apuntaba a la América española para incorporarla a su mercado comercial en crecimiento.[3] Esta amenaza se materializó cuando los ingleses ocuparon La Habana en 1762, alarmando abiertamente a Veracruz, el puerto más importante y próspero de la Nueva España.

Entonces la creación de un ejército en dicha colonia se presentó como una tarea apremiante para la metrópoli.

Para organizar tal fuerza regular se requirió de una infraestructura militar: la construcción de rutas de desplazamiento y fortalezas, la fabricación de armas y municiones, la mejora de las instalaciones sanitarias, la cría de caballos y el reclutamiento y entrenamiento de los militares. También había que ordenar la burocracia militar y pagar los sueldos. A pesar de la importancia y la urgencia que exigía el asunto, el desfavorable estado de la Hacienda Real no permitió a la metrópoli cubrir todos estos gastos. Por tanto, el proyecto a la hora de realizarse encontró dos problemas graves: la financiación y la falta de soldados.

Entonces la Nueva España, la más próspera y la más poblada colonia, se vió obligada a disponer de sus propios recursos para crear el ejército real. La mayor parte de los gastos debía pagarse a través de la carga fiscal o la donación la cual caía, por ejemplo, en los comerciantes, los hacendados y los gobiernos locales.

Para disponer de militares, aparte de los oficiales peninsulares enviados desde la metrópoli, se realizó el reclutamiento. Fue arduo reunir hombres aptos para el ejército, es decir, hombres fuertes, sanos, preferiblemente solteros y sin vicios. Si bien los había, se encontraban en la fuerza productiva. Ya que ellos sostenían la economía y la prosperidad de la Nueva España y, también, las de la metrópoli, fue poco posible incorporarlos al servicio. Así que los hombres quienes no tenían la responsabilidad productiva fueron los que se incorporaron. Es por eso que se concentraron los criollos de procedencia social alta en el ejército real.[4]

Recién para los primeros años del siglo XIX, la Nueva España pudo preparar una fuerza regular. Este ejército real estaba constituido por un número limitado de soldados y oficiales, tanto peninsulares como criollos, despachado desde Madrid; por consiguente, formaba el grupo social militar más elevado. Dentro de este ejército, hacia 1810, unos 1.500 oficiales eran peninsulares y muchos de ellos se encontraban establecidos en la Nueva España convirtiéndose en "verdaderos patriotas americanos"[5] mientras los criollos llegaron a ocupar un 90 por ciento del número total de la oficialidad, acaparando los mandos, sobre todo, medianos.

El ejército real comenzó a cumplir su misión a toda escala a partir de 1810: la pacificación del reino. Luchó contra las insurrecciones de Hidalgo y Morelos bajo los virreyes Francisco Javier de Venegas (1810–1813) y Félix María Calleja del Rey

(1813–1816), quienes eran oficiales singulares.

La prolongada guerra contra los insurgentes convirtió el ejército real en el protector del régimen. Los oficiales extendieron su campo de acción de lo militar a lo político y económico para realizar eficazmente la campaña de pacificación. Por ejemplo, al controlar los caminos, se relacionaron con los comerciantes y convinieron en el contrabando. Ya que mientras éstos necesitaban la protección de sus mercancías, los militares podían disponer de raciones y caballería.

Además, la facilidad del aprovisionamiento hizo que se organizasen tropas en las principales ciudades y así, un promedio del 70 por ciento de los oficiales, particularmente criollos, permanecía en la misma plaza por su vida militar entera.[6] Su permanencia en una plaza fija por largos años ayudó consolidar su posición social, incrementando su presencia en la región.

Este ascenso de los militares en la sociedad novohispana como una clase de poder, fue observado por José Joaquín Fernández de Lizardi (1776–1827). Este escritor, con gran popularidad de la época, escribió irónicamente sobre los militares en su novela *Don Catrín de la Fachenda* :

> En pocos días me dediqué a ser marcial, a divertirme con malas hembras y los naipes, a no dejarme sobajar de nadie, fuera quien fuera, a hablar con libertad sobre asuntos de estado y de religión, a hacerme de dinero a toda costa ...[7]

En resumen, la dificultad de sostener un vasto imperio obligó a la Monarquía Española a formar el ejército real con recursos coloniales. Los oficiales, ya sean peninsulares o criollos, de este ejército realista "colonial", cumplieron la misión de defender la colonia de las manos de los insurgentes hacia 1816. Al mismo tiempo, esta labor de pacificación les permitió gozar un "poder omnímodo"[8] dentro de la Nueva España.

II. Agustín de Iturbide

Agustín de Iturbide era uno de los destacados oficiales por su talento militar, quien controlaba regiones claves para el sostenimiento de la colonia.

Nació en la ciudad de Valladolid (hoy Morelia), Nueva España en 1783. Su padre, José Joaquín de Iturbide, era peninsular, originario de Navarra y su madre, Josefa de Arámburu Carillo de Figueroa, era criolla.[9] Los datos de la época indican que la familia Iturbide pertenecía a la clase acomodada con prestigio en Valladolid.[10]

Iturbide optó por la carrera militar como muchos de los hijos de la clase privilegiada. En 1797 se incorporó al regimiento de infantereía de Valladolid. En la crisis de 1808 Iturbide, a quien se le había concedido la licencia de retirarse temporalmente por razones de salud, pidió al virrey Garibay su inmediata reincorporación a la tropa. En su carta se dirigió así:

> En estas circunstancias no pudiendo yo ver con indiferencia un asunto, en que se interesa mi honor, que me es más apreciable que la vida misma, ... declarar que soy oficial, lo mismo que antes.[11]

Esta carta muestra la "idea del hombre Iturbide que se traza por su honor, dignidad, así como su patriotismo".[12] Lo mismo podemos observar en 1810, contra Hidalgo, cuando él ofreció al comandante Miguel Marín en su hacienda "comida para cuarenta soldados; y 35 bagajes ensillados, para mañana temprano, pues así conviene para el real servicio, de nuestro soberano el señor Dn. Fernando VII".[13]

Hacia 1813 su talento militar llegó a ser reconocido hasta el general Calleja, máximo responsable de la campaña. José de la Cruz, general en la intendencia de Guadalajara, recomendó a Iturbide ante Calleja calificándolo de activo, talentoso, apto para el mando y patriótico, con táctica militar, conocimiento de servicio y experiencia de mando independiente.[14] Cuando llegó el general Calleja a ocupar el puesto de virrey, lo nombró como coronel del regimiento de Celaya y, al mismo tiempo, comandante general de Guanajuato, la cuna de la Independencia. La confianza que depositó Calleja en él fue tanto que lo puso bajo su mando directo.[15] También, le ordenó escribir informes detallados del desarrollo de la pacificación en los cuales Iturbide observó los movimientos del ejército real y del insurgente, opinó acerca de sus compañeros oficiales y propuso estrategias.[16] Así en 1815 ascendió a jefe del Ejército del Norte y continuó su lucha "para perfeccionar la obra del exterminio de los rebeldes de estos territorios".[17] Iturbide no perdía en las batallas y fue uno de los oficiales realistas que más se destacó por su contribución en la campaña de pacificación.

El éxito de la campaña fue calificado con las siguientes palabras por parte de las autoridades:

> Los militares de todas clases harán una honrosa ostentación de las indelebles impresiones adquiridas en una guerra que por más de seis años supieron sostener a fuerza de valor, constancia y sufrimiento para conquistar la gloria de volver a verse gobernados y protegidos por V.M., dando un ejemplo que ha

sido tan útil a los demás príncipes y naciones del mundo.[18]

Así los militares cumplieron su labor y recibieron alabanzas. Sin embargo, la fatiga y la escasez de los recursos, incluyendo el sueldo y el premio, no se compensaban con los elogios. En 1815 Iturbide observó que el ánimo de los soldados iba bajando e informó a Calleja:

> ... es reducido a repetir la cooperación y auxilio que mutuamente deben prestarse los jefes de ejército, provincia, secciones y puestos militares para verificar más pronta y fácilmente el exterminio de las gavillas de rebeldes, ...[19]

La prolongada guerra había producido una fatiga acumulada a los militares. A pesar del término de la campaña, el ejército seguía en función, persiguiendo a unos cuantos insurgentes que aún no se rendían. Entonces, se comenzó a notar la petición de retiro y la dispersión.[20]

Además, las consecuencias de la guerra fueron notables en la economía de la Nueva España, lo que hizo difícil conseguir los sueldos y el aprovisionamiento para mantener las tropas. En 1815 Iturbide tuvo que repartir caballos y bueyes "para fomentar a estos pobres soldados, que están ya casi sin recursos".[21]

La medida efectiva de resolver el suministro de recursos era la contribución forzosa[22]; sin embargo, ésta no fue para nada aceptada por la población. Iturbide, muy molesto por su poca cooperación, informó al virrey:

> Los contribuyentes a esta guarnición, tanto los hacendados como los del pueblo, están demasiado morosos en el pago de contribuciones y deben gran cantidad de las mismas, ... me persuado que esto no es más que efecto de la ninguna disposición que tienen de sacrificar una corta porción de sus intereses en servicio del rey y de la patria, y en su obsequio de su misma seguridad y sosiego, sin la consideración de que otros estamos sacrificando a toda costa nuestras vidas, único interés precioso que aun nos resta, no haciendo en esto otra cosa que cumplir con los deberes de vasallos fieles al rey.[23]

A pesar de que el virrey Calleja revocaba la aplicación de contribuciones a la población con fines militares, Iturbide seguía imponiéndolas sin autorización del gobierno. Los propietarios, mineros y comerciantes de Guanajuato y de Valladolid, en donde mandaba Iturbide, se quejaron al gobierno de la ciudad de México.[24] Estas protestas al exceso de poder de los oficiales realistas se manifiestan en las siguientes palabras:

> Los comandantes de las divisiones del ejército pretenden que la lucha revolucionaria continúe, ya que mientras dure ellos son los únicos monarcas de sus respectivos territorios.[25]

Iturbide, aunque destacado oficial, no fue una excepción. Hacia 1816 él era el blanco de constantes acusaciones por sus transacciones comerciales realizadas con el abuso o el exceso del poder. Las correspondencias que intercambiaba con sus agentes de distintas partes de México evidencian que él acumulaba fortuna en el Bajío de manera muy irregular.[26] Además, la carta escrita por un hombre llamado José Antonio Torres habla de un tal Labarrieta quien había hecho un informe de veinte y tantos folios contra "el rebelde Iturbide" para que no vuelva a tomar el mando. Asimismo agregó que había 15 ó 20 informes más contra él.[27]

Estas acusaciones se transformaron en un escándalo que se debió arreglar en la capital. El virrey Calleja defendió ante la corte a Iturbide, argumentando que era una situación generalizada, no particular a su coronel sino a todos los oficiales. Por tanto, opinó que si se tuviese que proceder todos los casos, entonces "no quedaría uno solo en los puestos que ocupan, y el gobierno se encontraría sin oficiales de qué echar mano".[28] Así continuó explicando que un oficial apto para un mando de campaña militar, solía involcurarse en negocios mercantiles, pero que:

> ... no siendo posible impedirle en lo absoluto porque sería sumergirlo en la miseria, y privar al Estado de sus bienes y de sus servicios.[29]

El poder que adquirieron los militares llegó a influir en tal grado para la paz, que su exceso de poder se permitía abiertamente.

Iturbide, bajo la tutela de Calleja, no fue enjuiciado y pudo salvar su posición. Sin embargo, ello no bastó para que él dejase de lamentar la frustración que recibió a cambio de su brillante servicio a la pacificación, ya que no le fue otorgado ningún reconocimiento extra por su contribución a la campaña, ni la cruz de la Orden de Isabel la Católica, ni el viaje a España que había solicitado.[30]

El descontento de los militares, que se plasma en el de Iturbide, seguía aun en la víspera de la Independencia de 1821. Una serie de documentos circuló en la ciudad capitalina, criticando el trato que el gobierno le daba a los oficiales.[31] El asunto llegó a cobrar tanta importancia que el virrey Apodaca informó al Consejo de Estado de la metrópoli:

> Se observa además la insubordinación y falta de respeto a las autoridades [sic]

que han penetrado a una parte de las tropas, entre las cuales es de temer que [sic] haya rápidos progresos la reducción que debe haberse empleado para corromperlas: que en prueba de ello hacía pocos días que varios oficiales subalternos del regimiento infantería expedicionario de las cuatro ordenes del año 1804, que aumentó los sueldos a los de su clase de la peninsula, promovieron con calor su cumplimiento allí, y sin aguardar a dicho jefe en tropel, al modo de una sonada, pidiendole dipusiere el abono de dicho aumento.[32]

La protesta de los militares tenía un tono agresivo, insinuando una rebelión de todo el ejército. Mientras esto ocurría, la noticia del reestablecimiento de la Constitución de Cádiz estaba provocando una agitación en la Nueva España. En una situación como ésta, en la que múltiples fuerzas discutían las posibilidades de la independencia, Iturbide proclamó el conocido Plan de Iguala.

III. Hacia la Independencia

En febrero de 1821, Iturbide dio a conocer una propuesta de la independencia en Iguala, cuando tenía apenas tres meses de haber sido nombrado como comandante del Ejército de Sur, con el fin de acabar con el insurgente Vicente Guerrero quien seguía luchando por la independencia. Sin embargo, Iturbide declaró, por su parte, la independencia de México.

Iturbide presentó el Plan de Iguala como un plan dictado por parte del ejército real, argumentando que:

> No le anima otro deseo al Ejército que el conservar pura la santa religión que profesamos y hacer la felicidad general. Oid, escuchad, las bases sólidas en que funda su resolución ...[33]

Así la importancia que ocupa el ejército en el plan se puede observar, por ejemplo, en el hecho de que de los veintitrés artículos en total, cinco estipulan acerca del nuevo ejército emancipador, Ejército de las Tres Garantías.

El artículo 9 manifiesta que el nuevo gobierno será sostenido por el Ejército de las Tres Garantías; el 16, que se formará el Ejército de Tres Garantías que estará dispuesto a sacrificarse por la causa; el 17, que este Ejército será regido por la Ordenanza existente y la oficialdad actual permanecerá con sus cargos; el 18, que los que abracen la causa se integrarán a las tropas; el 19, que el ascenso será determinado por la

recomendación de los jefes.[34]

Así el ejército real se transformó en el Ejército de las Tres Garantías, manteniendo sus reglas y cargos. Al llamamiento de Iturbide respondieron rápidamente los oficiales realistas. Entre ellos se encontraban: Vicente Filosola, italiano; Pedro Celestino Negrete, peninsular; Luis Quintanar, peninsular; Anastacio Bustamante, criollo; Antonio Flon, criollo; Antonio López de Santa Ana, criollo; etc. Nos debe llamar la atensión que quienes se adherieron al Plan de Iguala, no fueron sólo los oficiales criollos sino también los peninsulares. A ellos se les unieron los antiguos insurgentes como Vicente Guerrero y Nicolás Bravo.

Este renovado ejército real, con el nombre de Ejército de las Tres Garantías, asumió la responsabilidad de sostener, apoyar y proteger al nuevo gobierno. De hecho, los militares se habían encargado de ello durante la guerra contra los insurgentes y se había visto privado de ello con el establecimiento de paz. Así el Plan de Iguala comprometió a la oficialidad realista a la conservación de su poder adquirido en los años anteriores y a la extensión de su influencia en el terreno político.

La incorporación de los militares a la empresa emancipadora de forma tan explícita, supone la participación activa de ellos en la independencia. Agustín de Iturbide, el Primer Jefe del Ejército de las Tres Garantías, intentó abrir el nuevo camino reuniendo el apoyo de la clase militar.

Conclusión

Hemos analizado, aunque en una forma resumida, el surgimiento de la clase militar durante la Guerra de la Independencia hasta convertirse en uno de los principales promotores del movimiento emancipador.

Podríamos decir que la introducción del ejército real en la Nueva España entrañaba en sí la posibilidad de la independencia. Aunque pacificó el reino y salvó la madre patria, la expansión del poder militar fortaleció a los militares y los encaminó hacia la independencia.

Iturbide, a través del Plan de Iguala, logró que la clase militar tuviese el acceso al poder político. Dicho plan fue adoptado como el documento de base para la construcción del México independiente, y esto permitió y legitimizó la participación política de los militares.

Aunque la Independencia de México encierra una serie de movimientos

emancipadores independientes y, al mismo tiempo, interrelacionados, no deberíamos prescindir de la influencia que en ella ejercieron los militares bajo la dirección de Agustín de Iturbide en 1821.

Notas

1 Sobre un debate entorno a la figura de Agustín de Iturbide, ver Jesús Romero Flores, *Iturbide pro y contra*, (Morelia: Balsal editores, S.A., 1971).

2 Timothy E. Anna, "The rule of Agustín de Iturbide: a reappraisal" *The Journal of Latin American Studies*, (mayo, 1985) pp.79–110.

3 Para una explicación esquemática del contexto atlántico, ver, por ejemplo, John Lynch, *Bourbon Spain 1700–1808*, (Oxford: Basil Blackwell, 1989) pp.131–156; Christon Archer, *El ejército en el México borbónico 1760–1810*, (México, D.F.: Fondo de Cultura Económica, 1983) pp.15–22.

4 Juan Marchena Fernández, *Oficiales y soldados en el ejército de América*, (Sevilla: Escuela de Estudios Hispanoamericanos, 1983) pp.125–140.

5 Archer, op. cit., pp.261–267.

6 Marchena Fernández, op. cit., pp.119–120.

7 Jean Franco, *Historia de la literatura hispanoamericana*, (Barcelona: Ariel, 1985) p.51.

8 Ernesto De La Torre Villar, *Lecturas históricas mexicanas*, Tomo II, (México, D.F.: Empresas Editoriales, S.A., 1966) pp.182–183.

9 Según Iturbide, sus cuatro costados son de origen navarro y vizcaíno. Ver Lucas Alamán, *Historia de México desde los primeros movimientos que prepararon su independencia en el año de 1808 hasta la época presente*, Tomo V, (México: Imprenta de J.M. Lara, 1852) p.126.

10 Ver los primeros capítulos de William Spence Robertson, *Iturbide of Mexico*, (New York: Greenwood Press, Publishers, 1968).

11 José Gutiérrez Castillas, *Papeles de Don Agustín de Iturbide: Documentos hallados recientemente*, (México: Editorial Tradición, 1977) pp.31–39.

12 Ibid., p.33.

13 Ver Gutiérrez Castillas, op. cit., pp.39–43.

14 Spence Robertson, op. cit., p.22.

15 Ibid., pp.23–24.

16 Estos informes se encuentran recopilados en Agustín de Iturbide, *Correspondencia y diario militar de Don Agustín de Iturbide 181–1821*, Tomo III, (Publicaciones del Archivo General de la Nación XVI), (México: Secretaría de Gobernación, 1930).

17 Ibid., pp.9, 400–408.

18 Gutiérrez Castillas, op. cit., pp.96–97.

19 Iturbide, op. cit., p.16.

20 Los documentos anteriormente citados de Iturbide tratan especialmente estos asuntos a partir de 1815.

21 Ibid., pp.37–39.

22 Brian R. Hamnett, *Roots of insurgency*, (New York: Cambridge University Press, 1986) p.184.

23 Iturbide, op. cit., p.44.

24 Hamnett, op. cit., pp.184–185.

25 Ibid., p.249.

26 Agustín de Iturbide, *La correspondencia de Agustín de Iturbide después de la proclamación del Plan de Iguala*, Tomo I, (Archivo Histórico Militar Mexicano num.1.), (México: Secretaría de la Defensa Nacional, 1945) p.XV.

27 Iturbide, *Correspondencia y diario militar de Don Agustín de Iturbide 1815–1821*, p.577.

28 Iturbide, *La correspondencia de Agustín de Iturbide después de la proclamación del Plan de Iguala*, p.XVI.

29 Ibid.

30 Spence Robertson, op. cit., pp.36–50.

31 Algunos documentos se encuentran en el Archivo General de Indias. México 1680.

32 Archivo General de Indias. México 1680, La minuta de la carta reservada número 186 del 31 de enero de 1821 del jefe político superior de Nueva España, Conde del Venadito.

33 Iturbide, *Correspondencia y diario militar de Don Agustín de Iturbide 1815–1821*, p.633.

34 Ibid. pp.633–634.

Bibliografías selectas

Fuentes Primarias:

Archivo General de Indias, Sevilla. Legajo: México 1680.

Fuentes Secundarias:

Alamán, Lucas. *Historia de México desde los primeros movimientos que prepararon su independencia en el año de 1808 hasta la época presente*. Tomo V. México: Imprenta de J.M. Lara, 1852.

Anna, Timothy E. *El imperio de Iturbide*. México, D.F.: Editorial Alianza, 1991.

————. "The rule of Agustín de Iturbide: a reappraisal" *The Journal of Latin American Studies*, (mayo, 1985) pp.79–110.

Archer, Christon I. *El ejército en el México borbónico 1760-1810.* México, D.F.: Fondo de Cultura Económica, 1983, c1977.

————. "The army of New Spain and the wars of Independence, 1790–1821." *Hispanic American Historical Review*, (febrero, 1981) pp.705–714.

De La Torre Villar, Ernesto. *Lecturas históricas mexicanas.* Tomo II. México, D.F.: Empresas Editoriales, S.A., 1966.

Franco, Jean. *Historia de la literatura hispanoamericana.* Barcelona: Ariel, 1985.

Gutiérrez Castillas, S.J., José. *Papeles de Don Agustín de Iturbide: Documentos hallados recientemente.* México: Editorial Tradición, 1977.

Hamnett, Brian R. *Roots of insurgency.* New York: Cambridge University Press, 1986.

Iturbide, Agustín de. *Colección de documentos históricos mexicanos.* I y II. México: Secretaría de Guerra y Marina, 1920.

————. *Correspondencia y diario militar de Don Agustín de Iturbide. 1815-1821.* Tomo III. (Publicaciones del Archivo General de la Nación XVI. Documentos para la historia de la guerra de Independencia, 1810–1821) México: Secretaría de Gobernación, 1930.

————. *La correspondencia de Agustín de Iturbide después de la proclamación del Plan de Iguala.* I y II. (Archivo Histórico Militar Mexicano. Num.1.) México: Secretaría de Defensa Nacional, 1945.

Lynch, John. *Bourbon Spain 1700–1808.* Oxford: Basil Blackwell, 1989.

Marchena Fernández, Juan. *Oficiales y soldados en el ejército de América.* Sevilla: Escuela de Estudios Hispanoamericanos, 1983.

Ocampo, Javier. *Las ideas de un día.* México, D.F.: El Colegio de México, 1969.

Romero Flores, Jesús. *Iturbide pro y contra.* Morelia: Balsal editores, S.A., 1971.

Spence Robertson, William. *Iturbide of Mexico.* New York: Greenwood Press, Publishers, 1968, c1952.

————. *Del Plan de Iguala a los Tratados de Córdoba.* Serie de cuadernos conmemorativos 11. México, D.F.: Instituto Nacional de Estudios Históricos de la Revolución Mexicana, 1985.

『赤い薔薇ソースの伝説』

——*Como agua para chocolate* をめぐって——

西村英一郎

1．ティタの愛

『赤い薔薇ソースの伝説』は、マヤ、アステカという先スペイン期の料理やスペイン人の料理などメキシコの料理とそれに使われる諸道具などをはさみながら、一人の女性ティタの生と秘められた愛を描いた物語である。

主人公のティタは、アメリカ、テキサス州と接するメキシコ、コアウイラ州、ピエドラス・ネグラスに近い農園の三女（末娘）として生まれた。彼女は、上の二人の姉たちが母親から愛されて華やかに育ったのにたいして、農園の台所で、料理女ナチャの手で育てられた。彼女は、そこでナチャから昔から伝えられている料理をおぼえていった。

ティタは、十五歳のときの誕生日にパーティに現れた近所のムスキス家の若者ペドロと恋に落ちる。しかし、ペドロが結婚の許可を求めにきた日、夫をなくし、一家を支えている女主人のエレーナは、長女ロサウラとペドロの結婚を強引に進めてしまう。こうして、そばにいながら、姉の夫となった恋人に心を打ち明けることもできない生活が始まる。

ところで、この愛のドラマは、前半と後半を分けて考えてみると、ティタの生き方がより捉えられるように思う。前半の部分は、次のようなものである。ペドロが自分のそばにいるために、あえて姉との結婚を受け入れたことを知りつつも、ティタは、疑心暗鬼に苦しむ。しかし、次第に、直接的な形はとらないが、大胆にペドロへ近付いていく。

ティタが自分の手で取り上げた、ロサウラとペドロのあいだに生まれたロベルトに彼女は愛情をふりそそぐ。ロベルトは、処女のティタの母乳で育てられる。彼女は、一日の仕事が終わってから、ペドロのために料理を考える。そしてティタのつくった薔薇ソースの鶉は、空想の中で愛の交歓にまで二人を昂めていく。就寝前に独りで編物を紡ぐティタ。こうして、一つの家族の中に、それよりも強力な空想の愛の巣が築きあげられていくのである。

だが、この危険な愛は、ロサウラとペドロの承認された結婚しか認めない母親のエレーナの手によって摘みとられる。姉夫婦は、テキサスに行くことになり、乳飲み子のロベルトは、そこで死去する。それは、ティタが築いた秘密の愛の世界の崩壊であった。ティタは発狂し、家庭医のジョンに引き取られる。

後半は、ティタは、精神的に立ち直り、医師のジョンからの結婚の申し込みを承諾する。ペドロは、その決心が容易に変わらないのを見て、ティタの身体を力で奪う。しかし、それがきっかけで、再び、ペドロとの愛へとティタは進んでいく。ロサウラの新しい子供エスペランサへの愛情、そして、ティタは、姉のロサウラや、彼女に〈正しい家族〉を要求して、亡霊となって現れる母のエレーナと正面きって対決する。ペドロは、真意をつかめずに彼女をなじり、幼児めいた行動をとるが、ティタは、びくびくしていない。ジョンへの感謝の気持はあるが、彼女の意志は明瞭である。それは、ペドロも、将来のあるエスペランサも、もう失う気持がないということである。ここが、ロベルトの死去で心を砕かれたときの彼女との違いである。そして、確信を持って、彼女はペドロの腕に抱かれ、愛の歓びに身を任せる。彼女に命令し続けてきた母の部屋さえ、彼女は、自分たちの愛の部屋に変えてしまうのである。

自身の愛を強調するために、ロサウラの最期にはかなりやり過ぎの面もあるが、社会の規範、掟にさからって、つらぬかれた愛、しかし、一瞬の夢ののちに死へと旅立つ愛、それがティタが後半の部分でためらわずに生きた生であった。

2．女性たちと大家族

しかし、よく眺めてみると、多くのページが費やされているわけではないが、この話は、ティタだけにとどまるものではなく、メキシコという国土で暮らしてきた女性たちの愛の姿を浮き彫りにしているということである。たとえば、ティタのよき相棒である、インディオの血を引くチェンチャは、盗賊どもに暴力で犯されるが、結局は、大工仕事を生業とする初恋の相手と両親の反対を押し切って結ばれ、農場に戻ってくる。チェンチャ夫婦は、多くの子供をつくり、農園の中で暮らしていくだろうことが暗示されている。また、エレーナの父親の代から、この農園で料理女として働き、メキシコの家庭のしきたりや料理や育児などを伝えていくナチャにも、ガルサ家先代の命

令で結ばれることのなかった、相思相愛の恋人がいた。彼女は、一枚のその男性の写真を胸に、ロサウラの婚礼の日に死亡する。ペドロとティタの結婚に反対し、家という秩序を懶惰や感情に流されることから断固として守ろうとする女主エレーナにも、アメリカから逃れてきた黒人の男との情熱恋愛が隠されていた。娘の幸福をなにかにつけて阻もうとする母親のエレーナは、実は、夫を裏切り、愛する男の子供を宿した過去があったのである。つまり、この憎み合う母と娘は、それぞれ同じような不義の愛を選んだのだった。また、ヘルトゥルディスは、革命軍の兵士と激しい恋に落ち、家から出奔し、いったんは娼家に転げ込むが、革命軍の女傑として帰郷する。

つまり、ここには、ガルサ家という家族の中で演じられてきた女たちの生活、愛、喜び、悲しみをテーマにしようとする作者の欲張りな目論見があるのである。ガルサ家という舞台で、あるときはティタとナチャ、あるいはティタとチェンチャのように肩を寄せ合い、あるときは、ティタとエレーナ、ティタと姉のロサウラのように対立しあい、また、別のときには、全員が互いに結束する、何世代も前から受け継がれてきた女たちの生の営みがある。日本では、消えてしまった感があるが、使用人、メイド、料理女などを含めた、農村の大家族が同じ屋根の下で反発しながらも、一つの運命を分かちあって生きているのだ。この話がベストセラーとなったのも、恋愛をテーマにしているということのほかに、メキシコ人の生活の舞台としての大家族が取り上げられているからだろう。それらは、貧しきものをつくりだし、搾取する機構として、否定的にしか顧みられなかった。メキシコは、その前近代的な社会から都市社会へと急速に歩みを進め、巨大な人口の都市への流出をまねいてきた。だが、大家族、農園は、彼らの文化、生活の母体として、人々の心の中に生きつづけている。ちょうどフォークナーがアメリカ南部を観念の共同体として造型したように、ラウラ・エスキベルは、テキサスに近いリオ・グランデ川べりの郡部にメキシコらしい村をつくりだしたのである。

この家族の暮らしは、消えることはない。ロサウラもティタもいなくなるが、ロサウラの一人娘エスペランサが、アメリカ人医師ジョン・ブラウンの息子のアレックスと結婚して家を事実上継ぐのである。彼らは、焼けた農場あとに、屋敷を再建する。そして、彼らの間に生まれた娘（ティタと同じタマネギアレルギー）へとガルサ家は継承されていく。また、ヘルトゥルディスにも、エレーナの恋人の血が流れている黒人の息子が成長してくる。様々な人間模様を織りなしながら、新しいメンバーによるガルサ家の物語がまた

準備されるのである。

こうして『赤い薔薇ソースの伝説』を、ある家族の複数の女性たちの歴史として考えてみると、焼け跡に残っていた料理ノートには、象徴的な意味があることに気がつく。つまり、それは、ただ料理や愛というだけでなく、大家族のもとですべてのものが、親から子へ、叔母から姪へ、母から娘へ伝えられていくということの明確な表示である。また、男たちが見逃している料理の一つ一つに、女性たちの心に刻まれた家族の歴史の一場面が見えてくるということである。そして、それは、激しい火焔によっても決して燃えて消失してしまうことのない女性たちの記憶だということ、それが残されたノートにこめられた意味だと言えるだろう。

（なお、翻訳にあたっては①作者の勘違い②姉ロサウラを卑しめる露骨な表現③おさまりの悪い文章などに関して作者の意図をくみながら変更を加えた点を読者諸氏に了解いただけたらと思う。）

Antonio Garrido Domínguez: *Los Orígenes del Español de América*, MAPFRE, Madrid, 1992, 290p.

岡 本 信 照

新大陸発見500年を記念して、MAPFRE基金から出版されているColecciones MAPFRE 1492の中の言語学関係の叢書〈Colección Idioma e Iberoamérica〉は、既刊・未刊合わせて11巻の予定である。本書はその中の第7巻に収められている。14章から成る本書は、長年にわたるアンダルシア論争の展開を中心に中南米スペイン語の特異性の基盤をどこに求めるかに至ったかを、音韻・形態・統語・語彙の各分野について詳細に纏めたものである。

アンダルシア方言と中南米スペイン語に共通点が多いのは、入植者のうちイベリア半島南部出身者が多数を占めていたため、彼らの話し言葉がそのまま新大陸へ移植されたからか？　それともアンダルシア方言との歴史的継続はなく、両者は植民後平行して独自に自然発生的変化を被った結果に過ぎないのか？　前者のアンダルシア説（teoría andalucista）と後者の反アンダルシア説（teoría antiandalucista）との有名な論争が始まったのは、今から70年以上も前になる。この論争の口火を切ったのはアンダルシア派のWagnerと彼の論説に異義を唱えたHenríquez Ureñaであった。以後アンダルシア説を実証する方向へ導いたのがMenéndez-Pidal, Lapesa, Canfield, M. Alvar, D. Catalánなどの文献学者で、Henríquez Ureñaの説を引継いだのがAmado Alonsoらである。本書評では、アンダルシア論争で特に問題になった音韻面を中心に本書の内容を紹介してみたい。

アンダルシア方言と中南米スペイン語の類似性に最初に着目し、中南米スペイン語史研究のパイオニア的役割を果たしたのはRufino José Cuervoだった。このコロンビア人言語学者の研究こそ今日までに至るアンダルシア論争の、そしてアメリカニスモ研究の発端になったのである。本書第1章では、Cuervoの言語史研究の基礎が、当時隆盛を極めたドイツ青年文法学派やMeilletらを

中心とするフランス社会学的言語史論にあることなどを導入部とし、作家のJuan Valeraと交わされたスペイン語の将来についての論争のことが取上げられる。それらを通じてCuervoの言語観及び彼の言語史研究の前提を概観している。中南米スペイン語史に関するCuervoの具体的な理論は次の第2章で扱われる。

Cuervoが指摘した中南米とアンダルシアの言語の共通点を音声特徴に限って示すと以下の通りになる。

・seseo。
・yeísmo。(但し今日では本国でも一般的である。)
・音節末の-sの帯気音化(あるいは無音化)。
・内破音での/r/と/l/の中和。
・母音間の-d-の消失。(やはり今日ではスペイン北・中部でも珍しくない。)
・語頭のh-(< lat. F-)の帯気音化。

Cuervoはこれらの事実をどのように解釈したのか? 結論から言えば、中南米スペイン語の起源は当時の宗主国の言語に深く根ざしたものであると考えていた。しかしながら、アンダルシア方言=中南米スペイン語と一元論的に考えていたのではない。例えばseseoはアンダルシア起源だが、yeísmoや-d-の消失などは本国との繋がりを否定する。また語彙に関してもアンダルシア起源のみならずカタラン語源やガリシア語源の語が少なからず含まれていることなどから、開拓民の出身地はイベリア半島全域にわたるもので、中南米スペイン語は様々な地方の出身者が新大陸で共存する際に生じた言語的水平化nivelación lingüísticaによるのだと主張した。以後このCuervoの説を巡って個々の事項について論争が展開されることになる。

第3章ではWagnerとHenríquez Ureñaの論争のことが扱われている。Wagnerが1920年にアメリカ大陸低地における南部スペイン語方言の影響について発表したのに対し、ほぼ同時期にHenríquez Ureñaが*Observación sobre el español de America*の中で本国スペイン語への依存関係を否定する態度を明らかにした。このアンダルシア説否認の理由として、①アメリカ大陸全体を見渡すと、必ずしも同質的な言語状態でないこと、②たとえアンダルシア方言と類似した言語現象が見出せたとしても、全く同じ結果になるとは限らないこと(例えばスペイン南部地方にはseseoとceceoの両方が存在するが中南米にはseseoしかない、yeísmoはアンダルシア以外の地域にも見られる等)、③入植者の大部分が南部出身だとは認められないこと、④アンダルシア方言と中南米スペ

イン語を同一視するには根拠が不足していること、などが挙げられる。更にアンダルシア説否定の背景には、言語的独立を擁護することで新興国家としてのアメリカ諸国の独自性を立証し、旧宗主国への依存関係を断絶する意図が窺われることが本章の最後で言及されている。

第4章から第9章までは、アンダルシア論争の中で中心的な争点となった様々な音声変化の年代特定や異音の分布の問題について、Cuervoから今日に至るまで数多くの研究家の努力によって、初期の誤認点が是正されていく過程が述べられる。特にseseoとyeísmoに関しては各々に一章ずつ割当てられている。(第7章及び第8章)。また言語学的研究の他に、新大陸入植者の出生地とその割合、そして彼らの定住先の分布などの豊富で詳細なデータが提示され、歴史的視座から言語事実を裏づける試みが為されている(第6章)。

先ずseseoの問題であるが、Cuervo自身はこの現象をアンダルシア起源に起因させていた。ところが反アンダルシア派のHenríquez Ureñaは、新大陸発見当時の歯擦音系列の変化(/ŝ/ /ẑ/ > /θ/ /ð/ > /s/、/s/ /z/ > /s/)が16世紀にはまだ完遂していなかったとして、seseoを純粋にアメリカ的な特徴と考え、本国との歴史的継続性を退けた。同じく反アンダルシア派のAmado Alonsoは、seseoは入植者によって新大陸にもたらされたに相違ないが、それは初期の段階の状態であり、その発達はアメリカ大陸において成し遂げられたのだと主張した。すなわちスペイン語圏内のseseoの多様性(例えば舌尖歯茎音や前部舌背音など/s/音には異音が散在すること、あるいはアンダルシアにはceceoも存在すること等)と、当時アンダルシアではseseoがそれほど一般化していなかったことを主な根拠に、アンダルシア方言との類縁関係を否定する立場を取る。その後Navarro Tomásがアンダルシアにおける/s/の三種類の異音、舌尖歯茎音・舌尖歯音・前部舌背音がプエルトリコにも存在することを著し、Confieldが舌尖歯茎音の/s/(カスティーリャ語の/ŝ/)がコロンビアの狭い範囲でのみ聞かれ、舌尖歯音の/s/はメキシコ・ペルー・エクアドル・ボリビア等で、そして前部舌背音の/s/(セビリアの/s̑/)はコロンビア・チリ・アルゼンチンで日常的であるという事実を提示した。こうしてそれまで異質と見做されていたアンダルシアの/s/の異音と中南米のそれとの同質性が露になり、更に中南米にもceceoの存在が明らかにされたため、逆に両者間の密接性を証明するのに役立ったのである。アンダルシア説を確固たるものにするのに貢献した最も中心的な学者の一人はLapesaであろう。アンダルシアにおけるseseoとceceo

を巡る歯擦音変化の彼の史的考察については著名な論文（1964）があるのでここでは細目は割愛するが、中南米スペイン語との関係について彼が達した結論の重要な点だけ紹介しておこう。それは、seseoもceceoも本質的には同一の調音の変種なのであって二様の異なった現象ではないこと、そしてアンダルシアのseseoと中南米のそれとは同質のもので、両者とも元々çeçeo/zezeoに起源を有し、中世のç〔ŝ〕・z〔ẑ〕から生じた舌尖歯茎音の/ś/が前部舌背音の/ʂ/と交代した現象であること等である。

次にyeísmoに関してだが、前述のごとくCuervoはアンダルシア起源説を否定している。理由はスペイン本国でのyeísmoの発生年代を18世紀だと信じていたからだった。同様にAmado Alonsoもアメリカ大陸におけるyeísmoの発生は17世紀以後で、アンダルシアでは更に遅れて18世紀頃だと明言した。このyeísmo多元説を支持したのは、Corominas、Navarro Tomás、それにWagnerまでもがいた。彼らの説に異義を唱えたのがCanfield、Menéndez-Pidal、Lapesa、D. Catalán、Galmésらである。Galmésはyeísmoの発祥地をアンダルシアと定め、発生年代を17世紀初頭と結論づけた。Lapesaは、既に10世紀のモサラベ語文献中に語頭のll-をy-で表記している例を発見した。語中の-ll-をyeísmoで発音する例は17世紀初頭から出現しはじめるが、トレドでは14世紀以来yeísmoの実例が見出されることを明らかにした。その後Guitarteによって16世紀に本国におけるyeísmoの存在を認める資料が提示され、Lapesaは16・17世紀には本国においても新大陸においてもyeísmoが定着していたことを確信するに至った。また、Porodi、Boyd-Bowmanらによって中南米の各地でも16世紀初頭にyeísmoが存在した事実が裏づけられ、yeísmoのアンダルシア起源説が確固たるものになった。

その他の音韻特徴に関しては第9章で総括的に言及されている。内破音の-sの帯気音化についてCuervoは敢えて本国と新大陸の依存関係を打立てようとはしていない。そして、Henríquez UreñaやAmado Alonsoもこの現象はアメリカ大陸では一般的とは言えず、イベリア半島でもアンダルシア特有のものではないとして前向きな論は述べていない。その後Menéndez-PidalやMoñinoらによって本国では16世紀初期に語末の-sの消失が起こっていることが示され、M. Alvarはマラガでは既に2世紀に、セビリアでは7世紀にまで遡れることを明らかにした。これらの調査によってアンダルシア起源が異論の余地のないものになった。

語頭h-の帯気音化についてもCuervoは本国と新大陸の関連を否定している。

彼は発生年代を17世紀に位置づけていたことによるが、LapesaやBoyd-Bowmanらの研究によってこの現象もアンダルシアが発祥地であることや、既に16世紀に文証されていることが発覚したのである。

母音間の-d-の消失に関しては、やはりCuervoは発生年代を18世紀に位置づけたことと中南米では一般的ではないことを理由にアンダルシア起源とは考えていない。しかしGuitarteやBoyd-Bowmanらによって本国では16世紀に文証されること、そしてそもそもこの現象は14世紀に始まった動詞二人称複数形活用語尾の-d-の消失の傾向の継続であることなどが確認され、更にMenéndez-Pidal、Lapesaらによってスペイン南部起源であることが実証されるに至った。

/r/と/l/の交代をCuervoは本国において15世紀頃始まると考えていたが、Amado Alonso、Menéndez-Pidal、Lapesaらが12世紀まで遡ることを確認した。やはりこの現象もアンダルシア起源説が実証された形で終わっている。

こうした数々の文献学的実証の成果で、最終的にはアンダルシア派に軍配が上がった結果になっている。この論争に参加した言語学者たち、Canfield、Menéndez-Pidal、Catalán、Alvar、Lapesa、Boyd-Bowmanらの結論が第9章で総括的に取り上げられているが、本章の最後の一節で、「この論争によって結果的にスペイン語史の極めて重要な1ページが生み出され、スペインとアメリカ大陸間の諸特徴の密接な共通性が明らかになったことで、還大西洋スペイン語español atlánticoという概念が造り出された」と述べられている。こうして国境を越えた言語共同体の認識に結果として寄与する形になったことが示唆されている。

第10章から第13章までは形態統語論、第14章は語彙論に当てられている。第10章以降はアンダルシア論争と直接関係ないので、内容を簡潔に紹介するに留めておく。

第10章voseoの起源について。16世紀におけるvosの用法、túとの語用論上の差異、vosの動詞活用語尾（tomás、comés、etc.）の起源・史的変遷等に関して、Cuervoに始まる数人の文献学者の研究が網羅されている。

第11章leísmoについて。人称代名詞leとloの混同の原因を巡って、形態論と統語論の見地から様々な理論の展開が描写されている。

第12章seによる再帰受身と非人称構文について。これらの構文の起源や見方についての論がまとめられている。

第13章その他の形態統語論的現象について。人物を表す直接補語に先行す

る前置詞aの起源、中南米に残存する古スペイン語の迂言法及び副詞等を扱っている。

第14章中南米の語彙について。特に現在中南米で生産的な接辞やインディヘニスモを主に取上げている。

さて本書全体を通じて窺えるのは、この長年にわたる論争が中南米スペイン語一元論対多元論という単純な枠組内に収まり切るものではないということだ。Lapesa自身が述べているように、中南米スペイン語はアンダルシア的性質を基盤にしつつも、スペイン本国のあらゆる地域の特質と新大陸固有の風土や特異性の介入なしには成立しえない。言語の分化と水平化、通時的一貫性の上に成り立つ共時的多様性といった言語史の普遍的テーマに接近する為には、この両大陸に跨るスペイン語ほど恰好の資料は他にあるまい。その意味で、アンダルシア論争が一段落した今、また新たな課題が浮上してきたと言えよう。ローマ帝国末期のロマンス諸語の分化との比較や英語史（米語史）との比較等も、あるいはまた有力なテーマになるかも知れない。

残念ながら本書には著者自身の結論や批評等が提示されていない。これはあくまで第三者の立場から論争の展開を概観し総括するという意図の下で、致し方ないことであろう。いずれにせよ、本書はスペイン語史研究の、そして20世紀におけるスペイン語学史の一端を担う書として不可欠になろう。

参考文献

Amado Alonso, *Estudios lingüísticos. Temas hispanoamericanos*, Gredos, Madrid, 1967³.

Lapesa, R., "Sobre el ceceo y el seseo andaluces", en *Estudios de historia lingüística española*, Paraninfo, Madrid, 1985, pp. 249–266.

————, "El andaluz y el español de América", en op. cit., pp. 267–282.

Menéndez Pidal, R., *La lengua de Cristóbal Colón*, Colección Austral, Madrid, 1978⁶.

Moreno de Alba, J., *El español en América*, Fondo de Cultura Económica, México, 1988.

Isabel Allende: *Eva Luna*,
Editorial Sudamericana S.A., Buenos Aires, 1987, pp. 278.

梅田美代子

日本ではこれまで、ラテンアメリカの女流作家の作品が紹介される機会はあまりなかった。しかし、ラテンアメリカ文学史上に記された女流作家の数は以外に多く、特に、70年代の後半から80年代にかけては、個性豊かな作品が次々と発表されている。

イサベル・アジェンデの著した『エバ・ルナ』もその中の一つである。イサベル・アジェンデはラテンアメリカ現代文学を代表する女流作家の一人として知られるが、その名前から推測できるように、チリのサルバドール・アジェンデ大統領の姪に当たる。

社会主義者サルバドール・アジェンデは1970年に大統領選挙に当選し、人民政府を樹立した。チリはその後、独自の革命の道を歩き始めることになったが、赤字財政による景気拡大政策がインフレを招き、国内は政情不安が続いた。そして、ついに1973年9月11日陸軍司令官ピノチェト率いる軍部によるクーデターが起こり、アジェンデ政権は崩壊した。以後16年間チリは軍事政権下に置かれ、恐怖が社会を支配し、イサベル自身も身の危険から亡命生活を余儀なくされた。イサベルは、この激動の時代の体験を独自の語りで構成し、『精霊たちの家』(1982)、『愛と影』(1984)を発表、そして、続く第三作『エバ・ルナ』(1987)で全米図書大賞を受賞した。

先の二つの作品では波乱万丈なストーリーの中に、政治・権力への批判が強く出ているが、それは『エバ・ルナ』にも底流している。そして、形式は甘美なラブストーリーをとっているが、内容は遥かにそれを越えた作品となっている。イサベル・アジェンデは現実の枠組みの中へ神秘を侵入させる手法を採りながら、男性の作家が素通りしてしまった個所に拘泥し、抵抗している。とりわけ女性に重くのしかかる現実の中で、男性の作家とは明らかに異なった人間認識、現実認識の目を与えている。

セルバの一陣の風と共に生まれたエバ・ルナは、孤児として修道院で育った

コンスェロと黄色い目をしたインディオとの混血である。母親コンスェロは幼いエバにいつも物語を話して聞かせた。コンスェロが話し始めると、あたりはきらめく光で満ち、信じがたい光景や見たこともないような不思議な物でいっぱいの宮殿が現れる。物語は、東洋の宝物から月の遥か彼方にまでおよび、宇宙が一匹のアリの大きさに凝縮されていく。

『「現実は、決して一つではないんだよ。必ず、魔術的な面があって、形を変えたり、色を塗ったりして、人生に退屈しないために、好きなように変えることができるんだよ。』と、母はいつも私に言っていた。」(p. 26)

エバは大空を羽ばたく翼と深海を覗く魚の尾を持って、色々な世界を見、それを物語りに変える。そして、その物語は彼女の合図でたちまち現実になっていく。

母を失ったエバは女中として家から家へ巡礼者のように移り住んでいった。大きすぎるシャツと作業ズボンをはいた黒い瞳の少年ナランホ、祖母のように温かく見守るエルビラ、切ない思いにかられるトルコ人リャド・アラビ、両性具有の親友モレシオ、そして暗い過去を背負ったカルレ、etc.が運命に導かれるようにエバの世界に絡み合っていく。

何年か後に再会したナランホはたくましい青年に成長し、ゲリラのリーダーとなっていた。一生懸命革命イデオロギーを説くナランホ、しかし、エバは二人が広場で初めて出会った遠い昔の事を思い出していた。その時、ナランホはもう一端の男で、自分の人生を歩いていた。ところが、エバは女に生まれたばかりに保護に甘んじ、常に限界を感じなければならなかった。

「彼の目にはいつも私は誰かを頼らなければ生きていけない人間であった。彼が自分の夢を実現させることができても、私には平等はないだろう。ナランホやその他の男にとって社会は唯、男だけのものであり、女は権力や決定から除外されている。彼の革命は本質的には私の運命を変えることはない。どんな境遇にあっても、結局私は自分で生きる道を最後まで切り開いていかなければならない。私の戦いは終わりのない戦いだ。強くなって戦い続けなければ……。」(p. 214)

政治犯を救い出すための脱獄計画に加担するのは、愛する男への自分の気

持ちの確認でもあった。「男には決定的な変化は作れない。唯、規則を変えるだけ。権利、競争、欲望、抑圧、いつも同じ段階を操作している。」

男の論理に導かれる革命と自己の確立が、女の側から同じ比重をもって提示される。エバにとってそれらは同じ次元の事柄であり、個人の愛や性、悲しみや喜びを大義の前に退ける論理に理想郷は遠いことを、しなやかな感性で直感する。唯、男に添って生きるのではなく、エバはどのような時にも主体的にその生を生き、混沌の中でひたすら自分自身であり続ける。

苦悩も不安も、愛も思想も、イサベル・アジェンデは自分の言葉で受け止め、表現しようとする。自分の文学を書きつづけた作家の、のびやかで、しかも強靭な目はそのままエバに重なろう。

映画作品〈ピト・ペレス、波乱の人生〉(I)

ホセ・ルベン・ロメロ原作

フェルナンド・デ・フエンテス他脚色

(片倉充造 訳)

[訳者解説]

本稿は、映画作品〈ピト・ペレス、波乱の人生 (Las Aventuras de Pito Pérez: 1957、メキシコ、フアン・ブスティジョ・オロ監督、ディアナフィルム社製作)〉の試訳である。もとよりこの映画は、ホセ・ルベン・ロメロ (1890–1952) の手になるメキシコ・ピカレスク小説『ピト・ペレスの自堕落な人生 (La vida inútil de Pito Pérez: 1938)』を原作としているが、主人公ピト・ペレスが、出身地であるミチョアカン州域内を主人と職業を変えながら転々としてきたその放浪譚 (回顧談) を、アグアルディエンテのボトルを代価に聞き手である詩人 (=作家) に語ってみせる結構は、そのまま踏襲されている。

原作に比して、各エピソードと地名とが必ずしも一致していないこと等は、瑣末的な差異でしかなく、むしろ、・映画独自のエピソードが作品導入部に集中している=鑑賞者/読者に新鮮味を与えている=こと ・聞き手が主人公の回顧談を引き出すのみならず、"悪行"の実演をリアルタイムで観察する=過去と現在時制のバランスの良い配分= ・原作からの引用がほとんど第I部の各章からのものであり、主役を演じるメキシコ'50年代の名喜劇俳優"ティン・タン"ことヘルマン・バルデスの底抜けに明るいキャラクターが強調されている=原作主人公のすね者としての陰鬱さが抑制されている=こと などに留意すべきであろう。もちろん、〈波乱の人生〉の作品理解が、原作小説を多角的に分析するうえでの優れて有効な方法であることには、異論の余地などないだろう。

最後にこの翻訳を発表するにあたり、読者の広い理解が得られるよう、次頁のように、作品コンテ (今回掲載分=作品前半部分に対応) を併記する。

〈ピト・ペレス、波乱の人生 (Las Aventuras de Pito Pérez)〉

クレジット・タイトル　"Tin-Tan"＝Pito Pérez

1'23"　ナレーション (語り手＝S. R.) 導入・紹介

1'48"　シルエット登場

ヒッチハイク《飲むなら乗るな！ 乗るなら飲むな！》4'40"

帰郷

6'02"　教会広場

自宅前のDa.R

家族状況・母の死 [I–②]

12'15"　(パン屋にて)

パン万引き

パンくずとヒップ

14'55"　(酒場にて) 壁に掛けられたパツクアロの写真

16'20"　P.P. とS.R. との出会い

17'06"　"パツクアロ聖母の奇跡" [I–⑤]

19'53"　(鐘楼にて)

21'25"　P.P. とS.R. との契約成立一話毎にボトル１本

本名はヘスス・ペレス・ガオナ、"ピト" の由来 [I–③]

P.P. とS.R. の問答

23'46"　サンタ・クララ～テカリオへ

27'47"　テカリオにて　清掃夫・荷役夫・手回しオルガン弾き

28'55"　教会でのPadre との思わぬ再会 [I–④]

腹ぺこのP.P.

愛徳 ("caridad") をテーマにした説教

33'　香部屋係・侍者・使い走りとして教会に残るP.P.

35'　P.P. 説教にラテン語不足" を指摘

36'04"　D.S. の登場とP.P.

38'13"　Ch. 登場にP.P. 一目惚れ (Ch. 宅を訪ねるP.P.)

46'15"　Padre、ラテン語入り説教を実施

46'55"　D.S. 宅にて、P.P. 仲人依頼D.S., Ch. 宅に向かい交渉

サンタ・クララ

テカリオ（過去）

＊P.P.: ピト・ペレス　S.R.: "片隅の詩人"　Da.R.: ドニァ・レフヒォ
Padre: プレコ神父　D.S.: ドン・サンティアゴ　Ch.: チュチャ

N. ：この物語のすべての登場人物は、１人を除き架空のものである。それはピト・ペレス、ミチョアカン（州）の伝説豊かな土地で暮らし、苦悩し、愛し、そして亡くなった。メキシコの偉大なる作家ホセ・ルベン・ロメロは、彼の有名な小説『ピト・ペレスの自堕落な人生』でそれを不朽のものとした。この映画はそのもとになった放浪の主人公と、近年他界し国民文学に不幸をもたらした著名な作家への純粋なオマージュを捧げようとするものである。

（シルエットで登場するピト・ペレス。足取りも重そうに徘徊している様子。やがて道路へ出て往来の車にヒッチハイクを試みるが、１台目のトラックには素通りされてしまう。そこで今度は飲みかけのアグアルディエンテのボトルを大きくかざすと２台目のトラックが停車する。）

〈１〉［ヒッチハイク］

PP ：１杯どう？　おにいさん！
C. ：どうして俺にすすめるんだ？
PP ：ちょっと景気づけにね。
C. ：どこへ行くんだ？
PP ：どこへも。
C. ：何んだって？
PP ：どこへも行かないさ。
C. ：じゃあ、着いたのか？
PP ：時間どおりにね、いつも。
C. ：ふぅぅーん。
PP ：あっちの方へ行くの？
C. ：どこへ行きたいんだ？
PP ：どこへなりと。
C. ：あっちの方なら行くけど……
PP ：じゃあ行こう！（とそのまま乗り込む）
C. ：向こうのドアから乗ればいいじゃないか！
PP ：出発だ！
C. ：俺の酒は?!
PP ：着いたらあげるよ……“飲むなら乗るな！　乗るなら飲むな！”って言うだろ!!
／¡Si toman, no manejen!　¡Si manejan, no tomen!／
PP ：止めてくれ！　止めてくれ！
C. ：どうしたんだ？
PP ：今通り過ぎたのは、サンタ・クララ街道だろ？
C. ：そうさ。
PP ：おいらサンタ・クララの出身なんだ。
（略：こうして故郷を通り越したことに気がつき、ピトは強引に下車する。そして

教区教会前広場で、噴水に写った姿を見てそれなりに身だしなみを気遣う。そのそばを老紳士が通り過ぎて行く。)

〈2〉[自宅前にて](主人公、自宅前へ舞い戻り、ドアをノックする。)

DaR :呼んでも無駄だよ。
PP :どうして?
DaR :この家にゃ誰もいないさ。
PP :誰も?
DaR :ペレス・ガオナの家族たちが出て行ってしまってからはね。
PP :出て行ったって、どこへ?
DaR :ピト! ねえ、あんた、ピト・ペレスだね!?
PP :そういうあなたはドニャ・レフヒト!
DaR :ずいぶん久しぶりだね。(2人は旧交の抱擁をする。)
PP :ずいぶんでもないよ、10年になるかならないか……
DaR :でもすごくテキーラ臭いね!?
PP :テキーラはおいらの愛用の香水さ、で、うちの家族は?
DaR :でも、どうしてたんだい?
PP :厄介事の連続さ、でも満足してるよ。
DaR :今までどうしてたんだい?
PP :見てのとおりの体たらくですよ。
DaR :そうだろうねえ。
PP :ところで教えてよ、ね、うちの家族のことは?
DaR :ええっと、まあそれぞれが落ち着いたよ。
PP :で、母さんは?
DaR :あんたの姉さんたちは結婚しちまったよ。
PP :まさか、ほんとに?
DaR :旦那さんたちが首都へ連れてっちまったさ。
PP :で、母さんは?!
DaR :上の兄さんはケレタロで、主任司祭やってなさる。下の弁護士やってる兄さんは首都にいて、とても羽振りはいいらしいよ。
PP :そりゃわかった、でも母さんのこと、どうして母さんのこと教えてくれないんだ?
DaR :そりゃねつまり、あの……(としどろもどろの口調)
PP :亡くなったんだね。
DaR :安らかにね。もう3年になるよ。ねえ、でもあんたのこんな姿をみてもらわなかっただけでも幸せだよ。
PP :それもそうだね、ドニャ・レフヒオ……(とボトルをラッパ飲み)
DaR :そんなに飲んじゃいけないよ。
PP :何がいけないんだよ。

DaR　:苦しいからとて恥じと勇気を捨てちゃいけないよ。
PP　:酒癖って恐ろしいもんだ、ドニャ・レフヒオ。酔っ払いってのは本来、話をするのに節度なんかいらないのさ。でもたいへんだなんて思わないでもらいたい、一旦それをまくしちまえばね……（略）
DaR　:ああ、くわばらくわばら！　アルコールって何てこと言わせるんだろうね……
PP　:ああ、飲んでやるとも！　だっておいらは真実の味方なんだ。俺は酔っ払って真実を語るのが好きなんだ！（その場を立ち去ろうとする）
DaR　:ヘスス！
PP　:ヘススはもうおいらの名前じゃない、もはやただのピトって野郎さ*1、誰にとってもおめでたい奴さ。
DaR　:ねえもし雨露しのげる場所が必要なら言っといでよ。
PP　:ご親切に、ドニャ・レフヒト、でももう青カンするのは慣れちまったよ。

〈3〉［パン屋にて］
（略　:パン屋の主人と男客2人は闘牛談義で熱くなっており、女性客1人がのんびりとそれに聞き入っている。そこへピトが入ってくる。）
主人　:いいかい、闘牛ほどこの世に面白いものがあるかい？　闘牛場は歓声と目を輝かせた女性たちのいきいきしたおしゃべりで渦巻いているんだぞ！　闘牛師たちはあでやかな衣装で登場し、空には高く太陽が燦々と輝いている。（略）もうあんたらとはしゃべってられんよ、俺の方がよく知ってるんだ！　あんたらはただの田舎者さ！（この長い台詞の途中でピトは婦人客のお尻に着目。そこで目の前のパンにかぶりつき頬ばって落っこちたパン屑を払うかのように、女性のスカートに触る。）
女性客:今、何をしようとしたの?!
PP　:腹がへってましてね、ごめんなさい。
女性客:でもね……
PP　:こぼれ落ちたパン屑を払ってあげただけなんだから。
主人　:はい、どうぞ。（と女性客にパンの入った袋を手渡す。）
PP　:では、ごきげんよう！（彼女と入れ替わりに今度は老婆がパンを求める）
老婆　:いつものやつ、ドン・リノ！
主人　:ただいま！　ところで、あんたは何を？（とピトを訝しがる）
PP　:菓子パン（chilindrina＝砂糖をまぶしたパン／下らない話、冷やかしの意も含む）ある？
主人　:まだ幾つか残っているはずだが……
PP　:ある、ある、これ、いくら？
主人　:10センタボ。
PP　:何て安いんだ、こりゃ！　でも、だめだな……
主人　:何がだめなんだ？
PP　:つまり、金はあるんだが小銭が全くないんでね。（男客たちに笑い声）

主人 :あんた、わしが慈善事業やってるとでも思うのかい？（すかさずここでピトが笛を一節吹いて見せる）ああ！　ピト・ペレス！
PP　:いかにもそうよ、マンリケ！　この様だが、まあ何とか生きながらえて、飲み続けてるさ。
老婆 :どうして、おまえなんかが、また！　酔っ払いの役立たず！
PP　:何が役立たずのもんかね？　飲んだら俺はすべてを話すために飲んでるのさ！
老婆 :どうしてまた戻ってきたんだね？　この町を引っ掻き回そうとしてるんだろ！神を恐れずこの町の平穏をくずしにきたんだね？
PP　:まさか、あんたが神を恐れてるってないこったろう？　そんな年齢で神を恐れるってないものなあ。（男客たちの笑い声）
客A :よう久しぶり！　ピト・ペレス！　どこから来たんだ？
PP　:そっちからだよ、ドン・ペペ。
PP　:元気かい？　ピト！　元気？　ずぅーっと放浪してんのか？
PP　:その通り、おいらは落ち着く先のないピト、あっちこっちとふらついているよ。
主人 :相変わらずだな、全く！
PP　:でも、菓子パンの一件は気づかなかったじゃないか！
客A :なあピト、1杯やりながら話さないか！
PP　:近頃途切れがちなんだ。
客A :そうだろう。飲みながらあんたの放浪談聞かせてもらいたいよ。ドン・リノも一緒にどうだい？
主人 :どうにもならん、商売があるんでな。
PP　:心配いらんよ、あんたの分まで飲んどいてやるからさ！（と立ち去りかける）
主人 :ちょっと！　うちのパンは？
PP　:そこにあるじゃないか！
主人 :食ってたやつだよ！
PP　:ここ！　ここ（と自分の胃袋を指し示す。）
客A :じゃあ、わたしの分にツケといてくれよ！　ドン・リノ。
PP　:あんたのツケだって、ちょっとまった！（と抱きかかえられないくらいたくさんのパンをあちこちのポケットにねじ込むピト）
主人 :あんたのツケだよ！　どん・ぺぺ（と爆笑が止まらない）

〈4〉［バルにて］（テーブル席でのピトを中心とした話し声）
客A :違うよピト。大袈裟なやつだな。
PP　:そんなことないよ、ドン・ペペ。違うって！　おいらの、昼も夜も、飲むときも飲まないときもひっくるめた豊かな放浪からすればだが、すごく具体的な結論に至ったわけさ。人間ってのは偽善者なんだよ、ドン・ペペ。人間ってのは痛みを恐れて歯医者へ通うように、神のもとへ集まるのさ。自ら楽しい思いをするのに悪魔を探したりするが、たった1度だって礼を述べるわけじゃない。ところが罪をはたらいた後でも、楽しんだことを感謝するのは、神にたいしてなん

だ。かわいそうな悪魔だよ。どれほどかおいらは同情してやるよ。*2

客A　:いいぞ、いいぞ！　面白いぞ、ピト！　／¡Eres grande!／

PP　:あんたも面白い人だ、ドン・ペペ！

（同じバルのカウンターより、店主ドン・ゴジョとともにテーブル席のピトたちを見守っている“片隅”の詩人）

SR　:ピトってすごく個性のあるやつだな！　／tan pintoresco／

DG　:旦那はまだよくご存じないんですかい？

SR　:ミチョアカン（州）中で何度も噂になっているあの男か？

DG　:あいつですとも！

SR　:あの男と近づきになりたいなあ。

DG　:悪くはないでしょう！　もしかしたら小説のネタくらいにはなるでしょうから、ご紹介しましょう。ピト！（とテーブル席へ進み寄る主人）

PP　:はあ、何でしょう、ドン・ゴジョ。

SR　:こちらは“片隅”の詩人こと、あんたのことに関心を持ってらっしゃるユニークな文学者さんだ。ちょっとこのサンタ・クララへ立ち寄られたところなんだ。

PP　:ようこそ、我がテーブルへ、“片隅”の旦那！　さあ掛けて下さいよ。

SR　:じゃあ失礼して……（３人ともどうぞ、どうぞと迎え入れる）

PP　:おいらは秩序にはまりきらないことが大好きなんで、だから詩人さんたちとは仲良く願いたいもんです。

SR　:結構ですな。

PP　:１杯やりましょうか！

SR　:もちろん喜んで！

PP　:全部終わっちまってるなあ……ドン・ペペねもう１本注文してくれ！

客A　:実をいうとここではツケがきかんのだよ、ドン・ゴジョともめたくないしなあ…

SR　:私が出そう、もしよかったら……

PP　:とんでもない、あんたはおいらの客人さ。とんでもない！　おいらの勘定で何とかするよ、但し、ちょっとだけ我慢してもらいたい。

客B　:あなたもご存じの通り、旦那、このピトは世界の半分は知ってるって言われるんですよ。（このとき画面＝ピトの視線は、店内に多く掛けられているパツクアロのスチール写真の数々をとらえている。）

PP　:あたりまえよ！　聖書にちなめば、ニニベ、バビロニア、エルサレムで、全く通りかかったこともなければ、思いもかけたこともないのがソドムの町。この半球でいえば、タンスィタロ、アリオ、テカリオ、ティングインディン。その他たくさんあり過ぎて名前も思い浮かばないな。だが、おいらが最も好きな大都市は、パツクアロなんだ！*3

客A　:パツクアロが大都市だって?!

PP　:そうだとも！　その美しさにかけてはね！

DG　:その通り！　ドン・ペペにはそう見えないにしても、パツクアロは世界の大都市なんだ！

客A　:こりゃまいったなあ！
客B　:そうじゃないの、ドン・ゴジョ？
PP　:あの都市には……
客A　:田舎だ！
PP　:都市なんだ！　あの物悲しいまでの詩情！　をたたえる都市！　あの湖のある都市！
客A　:池だろ！
PP　:湖なんだ！　銀燐に豊富で、空と同じく澄みわたり、（その通り！　とドン・ゴジョ）雨の降らない日の透明度は、すばらしい！　ああ、そうそう、ところでご主人は、確かあちらの方の出身でしたっけ？
DG　:いかにも。（と勝ち誇ったように応じる）
PP　:そりゃ結構。やっぱり最高の場所だなあ。それにあそこは、最も奇跡的な聖母様がおわす土地なんだ！
DG　:それは、幸福の聖母様のことだ！（客A: ほうほう）誰か文句があるのか!?
PP　:疑っちゃいけないよ。なぜかって幸福の聖母様は、何でもここに望みのものを求めれば、与えて下さるんだからな！　まちがいないですよね、ドン・ゴジョ？
DG　:疑われるなんてくやしいよ！　俺がでっち上げてるみたいで……
客A　:そんなことないよ。
DG　:そうだとも、俺がでっち上げてるみたいだ！
客A　:じゃ、あんたが俺を騙してないってどうすりゃわかるんだ?!
PP　:ペペ、そうじゃなくて、証拠があれば納得できるんじゃないか！
客A　:どのように？
PP　:聖母様に何かを与えて下さるようお願いすればいいさ。でもとても敬虔にお願いしないといけない。例えば、もしこのテーブルにボトル１本をお恵み頂くようお祈りすれば、ひとりでにそれをお授け頂けることだろう。まさか、かつがれてるなんて言わんでしょうな。お目にかけましょうか？（とこっそり仲間に目配せをする）
客A　:やってみようじゃないか！
DG　:でも、それには信仰心がいるんだぞ。
PP　:もちろんですとも、ドン・ゴジョ！　さあ座った、ドン・ペペ、お祈りしましょう！　聖母様もあなたのこと最もよくご存知のはずですから。（と店主にも促す。）
DG　:もちろん。
PP　:さあ、両手を合わせて……
客B　:どう祈るんだ？（とお祈りの文句をどうすべきか迷い、小声で不安げに尋ねる。）
客A　:それぞれ何でも知ってるやつをいのればいいんだ！（とやはり小声で答える）
（お祈り:この間を利用して、ドン・ゴジョがアグアルディエンテのボトルをカウンターの上から取り出して、テーブル上にそっと差し出す。）
PP　:言った通りでしょう！　皆さん！　はい、ここにボトルがねえ！

DG　:これでも信じないのか！　どうだ！
客A　:いやいや、これで信じないやつなんて誰もいませんよ！
DG　:じゃ、わたしもグラスを持ってきていっしょにやるとするよ。
PP　:約束した通り、さあ、おいらの勘定さ！
(全員で乾杯)

〈5〉[鐘楼にて](鐘楼の上より、付近を歩いている詩人に声をかける)
PP　:ごきげんよう！“片隅”の旦那！
SR　:そんなところで何してる？　ピト・ペレス！(と楼上に向かって反応する)
PP　:景色を糧に思い出にひたりにやってきたんだ。もう一度離れて行く前に*4、たぶん今度は永遠のものとなるだろうけど、そうするまえに近寄ってこの両の目に焼き付けておきたいんだよ。
SR　:あんたは、私よりも詩人だな。
PP　:そう思うのか？
SR　:ここにいっしょにいるとまずいかな？
PP　:いえいえ、どうぞ腰を下ろしたら、“片隅”の旦那。
SR　:じゃお邪魔するよ。
PP　:さあ、座った。(しかし、ピトは2人の履いている靴があまりにも違い過ぎていることに気づく)俺たちの足が不正と不公平に満ちた社会の縮図だってこと、旦那もわかるだろ。言っとくが、おいらは特権階級の連中を憎んでるんだぜ。
SR　:私も同じさ、この靴は別として。しかし、あんたはとても頭のいい人だ！　それが世を儚んで、生きていくんがやっととはな……
PP　:おいらは自分自身をダメにしているだけであって、他の連中のように他人をダメにしてるわけじゃないさ。
SR　:あんたの人生譚をきかせてくれないか、ピト・ペレス！？
PP　:あんた、おいらの人生がお笑い種のモザイクのようだからって、それを聞いて馬鹿にして楽しもうってんだろ？
SR　:違う、聞かせてもらいたいんだ。じゃあ、こう約束しよう。
PP　:どういう？
SR　:毎夕ここへ来てもらいたい、そしたら一話に付きボトル1本支払うことにするよ。*5
PP　:飲み物は選べるのかい？　シャンパンとかコニャックとか？　驚かんでいいよ、“片隅”の旦那！　この国が生産するもの、プルアランのアグアルディエンテなんかを飲まなくちゃなあ。
SR　:わかった。で、あんたの名前は、ヘススだよな。
PP　:ああ、そうだったよ。
SR　:誰がピトって名付けたんだい？
PP　:みんながさ。
SR　:またどうして？

PP　:悪気があってのことじゃなく、こいつのせいさ*6。(と懐ろから何かを取り出す)
SR　:そりゃ何だ?
PP　:笛なんだ、つまり葦笛からきたあだ名だよ。(と吹いてみせる) 自分でナイフを使って穴を開けたのさ、幼い頃に。
SR　:よく長持ちさせたもんだな。
PP　:ご覧の通り、我が家の名残りの唯一のものさ。他には何のオモチャもなかったので、日中は唯だこればかり吹いてたよ。それから近所の連中が朝起きするにも、食事するにも、眠りにつくにしてもこの笛だったのさ。
SR　:苦情があったろう?
PP　:母さんにゃ、泣き落としできたもんだよ。『ドニャ・エルリンダ、その笛静かにさせてよ!』『その笛やめさせてよ!』ってなわけで、ピトになっちまった!
SR　:で、放浪はどのようにして始まったんだい?
PP　:初めての失恋がもとで村をおん出たんだ。*7　近所の女の子のことを、おいらは密かに好きになってたんだが、法律勉強してる兄貴が、休暇中にさらってしまったんだ。
SR　:それであんたも気づいたわけか。
PP　:無神経にもね、2人を目撃しちまったんだ。それでおいらは心がズタズタになりながら、村から逃げ出したのよ。でもそれは、後でもっとひどい愛の絶望に陥ってしまうためのようなもんだったんだ。
SR　:それから、それから!
PP　:その夜おいらは、下着1枚も持たず、10センタボを全財産にしてその村を離れたんだ。きっとサンタ・クララへは、錦を飾ってもどってやる/Regresaría a Santa Clara de vencedor/。そのときは鐘が鳴りわたって出迎えてもらうんだと心に誓いながら。それがご覧の通りの体たらくさ……
SR　:で、どこへ行き着いたんだ?　ピト・ペレス。
PP　:遠くじゃないさ。テカリオさ。次の日の早朝、死ぬほどの飢えと寒さに苛まれながら……

〈6〉[テカリオにて]
PP　:こうしてりゃ(体を叩きながら)寒くないさ。(と屋台へ)
PP　:いくら?
女店主:オレンジ茶が5セン、コーヒーが10センタボだよ。
PP　:じゃあ、お茶を1杯くれ。
女店主:ピケテ(アルコール)も入れるの?
PP　:たっぷり入れてくれ。
女店主:たっぷりね、1/5は入れたげるわ。
PP　:じゃあ、ピケテをさらにもう1/5特別に入れてくれ!
女店主:こう!

PP　:いくら？

（省略）

N＝PP:こうして額に汗しておいらは、テカリオ最初の昼食にありついた。しかし、そこではずぅーっと空腹が続くことになった。次の週に入るとどんなこともしなければならなかった。掃除夫に、荷役夫に、そして手回しオルガン弾きをやらねばならなかった。(略)

N＝PP:その日の午後は、疲れきってしまい、とある教会へ入って行った。半ば、自分の孤独の辛さを神に告白するために、そして半ば、たとえ少しでも休憩したくてたまらなかったからである。

〈7〉[教会内にて]

N＝PP:そしてここでプレコ神父と再会することになった。プレコ神父はそのずっと昔、サンタ・クララで司式していた。おいらは、ミサの手伝いまでしたものだった。“捨てる神あれば拾う神あり”とでもいうか、とうとうおいらを救ってくれる人が現れたんだ。

神父　:“我は罪人なり”を祈りなさい。

PP　:俺、ヘスス・ペレスです！　神父さん。

神父　:さあ、“我は罪人なり”を祈りなさい！　あんたなんか存じませんよ。

PP　:知ってるはずだよ、神父さん！　サンタ・クララのピト・ペレスですよ。

神父　:あんた、あのピト・ペレス?! *8 (顔をしかめながら)

PP　:正真正銘のピトですよ、ただ腹が減って死にそうなんです。

神父　:じゃあ、ちょっと待っててくれ、説教が残ってるんでな。

PP　:わかりました、神父さん、お待ちしています。

（浄財集めを始めるピト）

神父　:父と子と精霊の御名においてアメン！（会衆たちが、ピトの持つ銀盆に次々に喜捨をする光景）兄弟たちである皆さん、別の機会に説教壇から神徳のことについてお話したことがあります。でも、これまでみなさんは、まるで他人事のように無関心でらした。あなた方に理解できないような対神徳なんてほとんどありませんぞ。どうかお許し下さい、至高の聖別された主よ。私は、キリスト教の教義がわからない愚かな羊の群れを擁しております。信徳／Fe／とは何か？信徳とは、わたしたちがやさしい安らぎの場にそっと抱く白い鳩のようであります。(略)そして望徳／Esperanza／があります。物質的なことに望徳を見い出すのはたやすいことです。それは別に罪ではありませんよ、みなさん。神の意志に即していれば罪ではないのです。例えば、“結婚したい”とか、“子供がたくさんほしい”とか、“宝くじにも当たりたい”とか……わたしとしては、誕生日に、信者さんたちが新しい僧服、時計、つまりわたしが必要とするものを買って下さることを望んでおるのですよ。

そして次に愛徳／Caridad／。これは、その名が意を表しています。愛徳！　それは与えるもの／Dad／*9 なのです！（ピトは指先でお盆を強調する）あなた

方は聖的なものを何と心得てらっしゃるのか?! わたしは、あなた方の理解の暗がりを照らして見せましょう。でもそれにはもちろん、至高の聖別された主のお許しが必要です。あなた方は告解者の群れだ! わたしは、あなた方が信徳、望徳、愛徳を現に実践してくれるまで、前言を翻しませんよ、いいですか、8月24日は、次の水曜日はわたしの誕生日ですぞ! わたしには何が必要なのかおわかりでしょう、僧服と時計ですぞ。

それでは、父と子と精霊の御名においてアメン!

(その後、ピトが食事をちょうど済ませた頃)

神父 :満腹したかい?

PP :全くですとも、(略) 有り難うございます、プレコ神父さん。

神父 :それじゃあの話受けてくれるかい?

PP :もちろんいいですよ。

神父 :よし、それじゃ、香部屋係兼侍者兼使い走り、すべて1人でこなすこと。ここだとウロウロしなくて済む程度の食事はあるんだから……

PP :わかりました神父さん、それで給料は?

神父 :とんでもない! 給料なんかなしだよ。これで集めたお金は全部かい?

PP :全部ですよ。

神父 :全部?

PP :と思いますが……

神父 :断わっておくが、ここじゃ浄財のピンハネはだめだぞ! *10

PP :いいえ、神父さん取ってありますとも!

神父 :何だと?

PP :お供えされたものは、もれなくまとめてあるということですよ、任して下さいよ。

神父 :これも言っておくが、隠し立てするとただじゃ済まないぞ。

PP :いいえ、神父さん、それはない、それはない、ほら、これ、ここに。

神父 :おまえは永久に地獄に落ちろ!

PP :いやだ! 神父さん、そんなこと。おいらは永罰なんか受けたくないよ!

神父 :これで全部だとは言ってはなかったのか?

PP :ええ、盆の上の分は全部ということだったんです。でもどんどん献金が入ってくるので、こぼれ落ちるのがあってそれを取ってあったんですよ。

神父 :ピト!

PP :誓いますとも! 神父さん。

神父 :お前はもう、献金を集めて回ることならん!

PP :わかりました、神父さん。

神父 :わたしが盆を回すことにするから。

PP :でも、テラ銭 (cancha) たくさんあがりますぜ。

神父 :いいんだ、ピト! それに何て言葉遣いなんだ! ところで、ピト!

PP :何でしょう? 神父さん。

神父 :この手回しオルガンどこから持ってきたんだ？
PP :偶然見つけたんです。
神父 :何が偶然見つけたんだ？
PP :ええ、道端に放っぽらかしてあったんで……
神父 :放っぽらかしてあった？
PP :酒場のドアのところにね、神父さん。
神父 :持ち主は店の中にいたんだろ!?
PP :おっとそれは気づかなかったなあ。 あのかわいそうな手回しオルガンが、寒空に道の真ん中へ放っぽらかしてあるのを何だか不憫に思いましてね……
神父 :ピト！
PP :はい、上官殿！ いや、神父様！
神父 :明日にでも、だれが持ち主か捜し当てて返すことにしよう。
PP :仰せのように。
神父 :ところでだが、わたしの説教はどうだった？
PP :よかったですとも、神父さん。
神父 :有り難う。
PP :あれはよかった。 そのやさしいお姿は、我々の心の安らぎをもたらします。 でも、信者たちを本当に感服させるには、何かものたりない。
神父 :そりゃ、なんだ？
PP :ラテン語ですよ！ ／el latín／
神父 :そうなんだ、そりゃ確かにそうなんだ。 しかし、聖人の引用部分を覚えてないんだよ。
PP :そんなことなら、俺がお手伝いしますよ。 ラテン語でお祈り文を写しますから、神父さんはそれを覚えて、はいok！
神父 :それは名案だ！
PP :ですから、そうだからといって、あんまり聖別された主に許しを求めようとしちゃいけませんよ。 お客さん方に、いや違った、信者さんたちに罠にかかってもらうんですからね。
神父 :いや、毎日だと思わんでくれ。 日曜日だけでいいんだ、というのは、集落から田舎者たちが下りてくるんだが、皆目わかっとらんのだ。
PP :だからこそ、彼らにゃわからない笑い話があるんですよ。“人々は、理解できないそうした人たちをのみ聖人だと考える”ってね。 で、貯金箱はいつもそこにしまってあるんで……／se gurda／
神父 :しまっていたとも！（と貯金箱を壁穴の隠し金庫へ保管、ピトが悔しがる）／se guardaba／

（ドン・サンティアゴ登場）
DS :ああ、神父さん、こんにちは。
神父 :ああ、ようこそ、ドン・サンティアゴ。

DS　:ところで、あんたはまだ準備してないようだな？　我が家で昼食をとる約束覚えてるよなあ。
神父　:もちろん、覚えてますとも。
DS　:サンティアゴの家で食事するんだ、つまり、メニューについては諦めて下さいよ、何せご存じのように、中年独身の家なんでね……
PP　:なあに、独身貴族の家じゃ、世帯人なんかより、よっぽどいい物食って、いい暮らししてますよ。
神父　:そう、そう、その通り！　違う！！　違う！！　馬鹿なことを言わせるな！　お前は他人の話に入ってこなくていいんだ、ピト！
DS　:ピトだって？
PP　:ヘスス・ペレス・ガオナ、通名ピト・ペレス、どうぞよろしく。
神父　:うちの新しい香部屋係ですよ。
PP　:香部屋係に、侍者、使い走り、部屋付き、飯付き、給料なしの、お金触われず、何でも１人でこなします、どうぞよろしく。
DS　:なかなか、目端がきくようだな。／despierto／
神父　:ええ、きき過ぎるんですよ。ピト！　いいか、ドン・サンティアゴはこの町で最も重要な方なんだぞ！　だから格別丁寧にお世話させて頂くんだぞ！
PP　:はい、神父さん。
神父　:よし、それじゃ、教会を掃いて、祭壇にハタキをかけて、ロウソクを消して、ロウソク立てを磨いて、聖服を奉挙して、食器を洗って、それに台所もきれいにしておくこと。
PP　:ヒゲは剃らなくていいんですか？
神父　:明日でもいいよ、ピト、明日で。しっかり頼んだよ。
PP　:行ってらっしゃいませ。
DS　:じゃあな、ピト。
PP　:では、失礼します、ドン・サンティアゴ。（外出する神父とドン・サンティアゴ）
（お供えのワインをみつけるピト）
［ラテン語の書物を前にして］
PP　:クアン　モブレコトゥラ　イルミテンド　アンタスカファス、何だ、こりゃ？　まあどうでもいいか？　ボヌン・ビヌン　こりゃ確かだ。ブエン・タングアルニス、ボン・ビヌン　そりゃそうだ。ラエトゥ　ティピカ　コル　オミニス　フィリス　コルヌス　オプトゥス、こりゃまたわからんなあ？　まあ、いいか？
（チュチァ登場）
ボヌン・ビヌン　フィアクリタス　アドゥミニ　プラトリス　アミタトゥル　インドゥビオ　ビレトゥ　アティトゥラン
Ch　:あの、すいません。
PP　:はあ……
Ch　:神父さんいない？
PP　:何ですって？

Ch　:プレコ神父はいらっしゃいませんか？
PP　:どこに？
Ch　:ここに！　神父さんいないの？
PP　:ええ、出かけましたよ。あなたお会いしたいのですか？
Ch　:でも、急ぎじゃないので。しかし、あなた、見かけない人ね……
PP　:ええ、わたしもあなたを……
Ch　:あなた、ここで何してるの？　英語しか話してなかったみたいだけど……
PP　:英語ですって？
Ch　:あたりまえでしょ、あたしには、さっぱりわからないんだもの！
PP　:違う！　違いますよ！　これはラテン語*11ですよ！　わたしはプレコ神父の説教文の下準備してるんですよ。つまり、わたしは神父さんの庶務担当秘書なんですよ。／seglar／
Ch　:何ですって？
PP　:俗世間向けの／mundano／。断わっておきますが、わたしは司祭でもなければ、神学生でもありません。つまり、神職ではありませんので……
Ch　:でもあなた、ここ（地元）の人じゃなさそうね？
PP　:いいえ、わたしは、サンタ・クララ・デル・コブレの出身なんですよ。
Ch　:で、お名前は？
PP　:ピト・ペレ……いえ、ヘスス・ペレス・ガオナです。神にお仕えし、プレコ神父に仕え、そしてついでに、あなたにもお仕えします。
Ch　:まあ、不思議ね！　あたしたち、同じ名前よ！
PP　:あなた、ヘススィタって言うのか。チュチァ
Ch　:あなたはチュチョね、そうすると。
PP　:そうそう、そのとおり。
Ch　:じゃあ、あたしはこれで……
PP　:こんなに早く？　プレコ神父を待つのでは？
Ch　:いいえ、また出直してくるわ。
PP　:ほんとに？
Ch　:もちろんよ、早く会わないといけないことがあるの。ああ！　これ、とってもかわいい聖人形ね。救いの聖母様のね。
PP　:そう、純銀ですよ。
Ch　:純銀ですって！　ねえ、1つちょうだい?!
PP　:そうだなあ……（答えあぐねている）
Ch　:くれない？
PP　:ええいっ、持って行け！（と考え迷った揚げ句）
Ch　:お姉さんにも1つ？
PP　:ああ。
Ch　:あなたってやさしいのね、母さんにも1つ、もらえない？
PP　:もう1つおまけに、お祖母ちゃんにもどう？

Ch　:あら、お祖母ちゃんはいないのよ。
PP　:でも、いずれできるかもしれないさ。
Ch　:まあ、嬉しいわ、ほんとにいいの？　じゃあ、またね。(と立ち去る)
(サンティアゴ登場)
DS　:やあ、ピトさん！
PP　:ああ、これは、ドン・サンティアゴ、びっくりするじゃないですか！　どこから入ってこられたんで？
DS　:教会からだが……(略)
PP　:神父さんはいない、おられませんよ。ところで、ドン・サンティアゴ、あの娘さんは誰なんですか？
DS　:どの娘だ？
PP　:入ってくるとき、見かけませんでしたか？
DS　:うっかりしてたよ。
PP　:誰なんです？
DS　:想像つかないなあ。
PP　:まあ、お座り下さい、座って！　ドン・サンティアゴ、酒でもお出ししますから。
DS　:酒だって？
PP　:お供え用のワインですよ。あなたもイケる口だって知ってるんですよ。
DS　:しかしなあ……
PP　:大丈夫、大丈夫。ああ、いい香りだ！
DS　:ピトって、悪い奴だなあ。
PP　:1口だけですから……
DS　:じゃあ、ほんの少しだけだど！　神父に知れるとまずいからなあ。
PP　:いいから、いいから。鉛筆で印いれてあるにしても、でも、あわてることはありませんよ。そいつを水で薄めてやりますから。
DS　:困った奴だ／sinvergüenza／
PP　:ねえ、教えて下さい、ドン・サンティアゴ。あの娘はいったい誰なんです？チュチァとか名乗ってましたけど……
DS　:チュチァだと？　ああ、そうか、ドン・オスカルの末娘だろ。興味あるのか？
PP　:いいえ、個人的にはべつに……まあ、町中の人たちを知っておこうと思いましてね……
DS　:じゃあ、わたしはこれで。退散しとかないと神父が吐息で気づくからなあ。
PP　:その対策もしてあります。手立てがあるんですよ。さあ、これを1口、飲んでご覧なさい。
DS　:こりゃ何だ？
PP　:丁字のエッセンスですよ、臭い消しですよ。／clavo／*12
DS　:太い奴だ！　／descarado／
PP　:ああ、チュチータ！……

[チュチァの家の近くで]（ピトはしきりに笛を吹き、チュチァへの愛情を表現している。）

Ch　：ピト！　ピト！　もう静かにしてよ！

PP　：どうして？

Ch　：うるさいじゃないの！

PP　：だって、演奏が好きだって言わなかったかい？

Ch　：でもね……（略）こんなこと言われたのよ。“あのピトっていったい何なの！”って……“毎晩ここで迷惑かけようっていうのか！”って……

PP　：迷惑だって?!

Ch　：そうよ。

PP　：みんなにこういうデリカシィーがあるとはかぎらないんだなあ……

Ch　：それに眠れやしないわ。

PP　：あんた、俺のこと好きだって言ったじゃないか！

Ch　：父さんには話すから……

PP　：父さんにもわかってもらえたらなあ……好きだ！

Ch　：あたしもよ……

PP　：一目あったそのときから、我が心の暗闇に光が差し込んだ！

Ch　：詩はもういいのよ、聖人形持ってきてくれた？

PP　：ああ、ここにあるよ。

Ch　：まあ、純金！

PP　：一番高価ななかから１つ、でも気にしなくっていいよ。君のだ。君はぼくの恋人なんだ！　だからプレゼントするよ、ほんと……

Ch　：もちろんよ。

PP　：結婚しようか？　ほんとに結婚しようよ？

（略）

[教会内]

神父：安らかなれ、安らかなれ！（祈りとは関係なく、ピトが手回しオルガンを奏でている。見かねた神父がピトのもとへ駆け寄る。）静かにしろ！　何が教会音楽なんだ！（と神父がピトの頭を殴打）

PP　：ああ、痛い！　神父さん！　すべての教会には音楽が付き物でしょ。どうしてここにはないのですか？

神父：だが、聖なるオルガンの音色がいるんだ！

PP　：手回しオルガンもなかなか聖なるものですよ、でもオルガンは知らない。

神父：そこへ手回しオルガンを置いて、さあ来い、そこから立ち去れ、降りろ！

PP　：ああ、神父さん……（神父は所定の位置へ戻り、ピトも退場する。）

神父：皆さん、何日か前に、誰か手回しオルガンを道端に置き去りにした人がいるそうです。まあ、置き去りというわけでもありませんが、とにかくそれを紛失したと

いうことです。もしその持ち主がここにいらっしゃったら申し出て、それをこの教会の香部屋まで尋ねてみて下さい。では、祈りましょう、皆さん！　お祈りです……アメン。（この間ピトは、再びお盆を手に持ち献金を受けている。）それでは説教に入ります。皆さん、ミサに対するあなた方の忘恩には、心が痛みます。私には、（メモを盗み見ながら）フィニス　コロナトゥス　オフス、ボン　ビンレティフィカティコロミシス…本日はこれまでにします。父と子と精霊の御名に置いて、アメン！（と説教壇から駆け降りて、献金を集めていたピトを追いかける。）

［サンティアゴ宅にて］

DS　:これは、これは、ピト！　入りなさいよ！
PP　:じゃ、お邪魔します。
DS　:いったい、どういう用件なんだ？
PP　:ええっと…
DS　:話してみろよ、さあ！
PP　:実は…おいらの村のしきたりに従えば、あなたのような立派な人に、なり代わって出向いて頂いて、結婚の承諾を得てもらいたいというわけなんです。
DS　:ああ、そういうことか、で、相手は誰なんだ？
PP　:チュチータなんです。
DS　:どこのチュチータなんだ？
PP　:あなたもよくご存じの、あの、
DS　:チュチータね？　はて、誰のことか見当つかんな…
PP　:ドン・オスカルの末娘ですよ。
DS　:ああ、ドン・オスカルに娘いたっけ？
PP　:ドン・サンティアゴ、あなたがそう教えて下さったんですよ！
DS　:わたしが？
PP　:ええ、…
DS　:そうか…
PP　:何ですか？　気が進まないんですか？
DS　:で、チュチャは、承諾しているんだろうな！
PP　:それが…彼女は時間をかけようとしているんです。でも…
DS　:時間がほしいわけだ。
PP　:だけど、俺は…
DS　:よし、行ってやろう。少しでも早い方がいい。
PP　:すいません、ドン・サンティアギート…
DS　:落ち着け、なあ、落ち着けって。
PP　:いつ行って頂けるんで？
DS　:今すぐだよ。
PP　:まさか、ほんとに？

DS　:すぐにだ！
PP　:やってくれるんですね！
DS　:わたしには自信がある。断わられることはない。
PP　:俺って貧乏なんですけど…
DS　:そんなこと関係ない。
PP　:一生恩にきますよ！
（歩きながら）
DS　:任せとけよ、ピト！　任せとけって！　お前の代わりに話をつけてやるよ！
PP　:こう言ってやって下さいね、俺は働き者で、欠点がないってね。でも、もし何か至らぬ点があったとしても、あらゆる面で良い夫となるために努力しますって。
DS　:心配するなって！
PP　:あのそれとね、どういう風にいっしょにやっていったらいいのか、分からないけど、俺となら、娘さんに不自由はかけないって。
DS　:さあ、着いたぞ！
PP　:ねえ、この鼓動みて下さいよ！（と胸の上に手を当てながら）
DS　:すべてわたしに任せておけばいい！　な、落ち着けって！
PP　:時間かかります？
DS　:こういうことにはね、ある種の繊細さと落ち着きが必要なんだ！
PP　:じゃあ、この辺でお待ちしてます。よろしくお願いします、ドン・サンティアゴ！
DS　:ドン・オスカルはご在宅ですかな？
使用人:ええ、どうぞお入り下さい、ドン・サンティアゴ。
DS　:それじゃ、どうも…

（註）

＊1　:この場面は明らかに、主人公のヘススであることへの決別・ピトとしての再出発を象徴している。

＊2　:このように自らを悪魔の存在と重ね合わせる記述は、原作小説第I部、第6部参照のこと。

＊3　:メキシコ・ミチョアカン州都モレリアより、西南西約70kmに位置する人口約2万の都市。ハニツィオ島をめぐる観光で有名。

＊4　:ピト・ペレスはサンタ・クララを何度か後にしているようだが、このシーンは原作第I部第1章に相当する。また、放浪の行程が連続的で、最も明確なのは、小説上最初の離郷から帰郷（サンタ・クララ～テカリオ～ウラパ～ラ・ウアカナを一巡する）に至るルートであり、原作第I部第2・3章で扱われている。

＊5　:ピトの昔語り＝アグアルディエンテの契約は、小説第I部第1章の対

応。

＊6 :ピカレスク小説に主人公のニックネームは付き物だが、“ピト”の由来は、性的シンボルよりもむしろ、葦笛に求められ、ヘススという本名ともども、“負のキリスト” (道化) を演じる小道具にもなっている。

＊7 :小説世界でのピトの最初の離郷は、教区教会内における賽銭ドロボー共犯発覚に起因するものであった。

＊8 :このシーンからは、本名 (ヘスス・ペレス・ガオナ) よりも通名 (ピト・ペレス) の方がよく知られていること　時間の隔たり　などを読み取ることができる。

＊9 :信徳 (Fe)、望徳 (Esperanza) そして愛徳 (Caridad) はカトリック教義でいう三対神徳 (Virtudes Teologales) あり、ここでは、CARIDADのdadと、動詞darの2人称複数肯定命令形との懸詞の妙が楽しめる。

＊10 :サンタ・クララ教区教会での賽銭ドロボー共犯 (＊7でも既述) を示唆している。

＊11 :ラテン語入り説教の進言は、小説第I部第4章参照。

＊12 :clavoには丁字の外、釘の意味もあり、後々の大工ドン・ルペルトへの新婚用ベッド発注とも無関係ではない。

なお、〈ピト・ペレス、波乱の人生〉の邦語関係資料としては、本誌前号はもとより、「〈ピト・ペレス、波乱の人生〉についての覚書」(『外国語教育』第20号、天理大学外国語教育センター、1994) ;抄訳 『ピト・ペレスの自堕落な人生』(『グリオ』 Vol.6、平凡社、1993) ;「ピト・ペレスの足跡を求めて」(『メキシコ研究センター通信』 No.22、京都外国語大学メキシコ研究センター、1993) の拙稿を参照されたい。

編集後記

REHK第２号が刊行の運びとなりましたので、お届け致します。今回は講演、評論さらには書評の項目も加わり、内容も一層充実しておりますので、ご高覧下さい。

昨年秋には第２回修士会が京都外国語大学国際交流会館で開催され、大学院生の伊藤さん、立岩さん、志柿さん、それに敦賀さん（同志社大学非常勤講師）に研究発表をしていただきました。伊藤さん（現在、スペイン在住）、立岩さん（現在、大阪経済大学非常勤講師）、志柿さん（現在、琉球大学非常勤講師）の研究発表は論文として本誌に掲載することができました。また、太田リリアさん（現在、琉球大学非常勤講師）には創刊号に引き続いて今回も論文を執筆していただきましたし、片倉さん（天理大学助教授）にも前回の論文に引き続いて、今回は翻訳を発表していただきました。

第２回大会から、他大学の先生を講師に招いてご講演をお願いすることになりました。第１回は同志社大学教授の木原太源先生にお願いし、「ドン・ファン・マヌエル語録」と題してご講演をいただきました。併せて本誌にも掲載できましたので、ご高覧下さい。

今年の２月、スペインの高名な哲学者フェルナンド・サバテール氏が交流基金の招きで来日されました。京都でも約一週間滞在されましたので、修士会の主催で講演会を開催し、「現代のスペイン」と題してご講演をいただきました。当日は関西のスペイン語の先生方にも多数ご参加いただき、講演会はもとより懇親会も盛大に開くことができました。サバテール氏の講演は幸いマルティネス先生（京都外国語大学助教授）とアルタミラノ先生（京都外国語大学非常勤講師）のご協力を得て、ほぼ完全な形で本誌に掲載することができました。

また、今回は国際武道大学教授の西村英一郎先生に評論をご執筆いただきました。岡本さん（京都外国語大学非常勤講師）と梅田さん（院生）からは書評をご担当いただきました。

このように本誌は第２号から早速、会員以外の先生方の原稿を掲載することができ、世界に開かれた学術雑誌としてのスタートを切ったように思われます。今後も会員はもとより内外の研究者のご協力を得て、講演、論文、研究ノート、評論、書評そして翻訳の多彩な研究項目を通して、スペイン語圏に関する活発な研究活動を展開できますことを願っております。（坂東省次）

REHK (Revista de Estudios Hispánicos de Kioto) 第2号
1994年3月30日　印刷
1994年3月30日　発行
発　行　所　京都外国語大学イスパニア語学科修士会
〒615 京都市右京区西院笠目町6
責任発行者　坂　東　省　次
印　刷　所　都　印　刷
〒600 京都市下京区北小路新町西入る

REVISTA DE ETUDIOS HISPANICOS DE KIOTO

No. 2

Conferencias:

Mi opinión personal sobre D. Juan Manuel ·····Tagen KIHARA (1)

La España de nuestra época ·····Fernando SAVATER (13)

Artículos:

La Institución Libre de Enseñanza-escuela progresista de España en el siglo XIX ·····Yukari ITO (25)

La obra maestra del Inca Garcilaso de la Vega ·····Lilia OTA (35)

La influencia de los Estados Unidos en el feminismo puertorriqueño ·····Yoshiko SHIGAKI (47)

Agustín de Iturbide: el surgimiento de la clase militar durante la Guerra de la Independencia ·····Reiko TATEIWA (55)

Crítica:

leer: *Como agua para chocolate* de Laura Esquivel ·····Eiichiro NISHIMURA (67)

Reseñas:

Antonio Garrido Dominguez: *Los Orígenes del Español de América*, Mapfre, Madrid, 1992, pp.290. ·····Shinsho OKAMOTO (71)

Isabel Allende: *Eva Luna*, Editorial Sudamericana, Buenos Aires, 1987, pp.278. ·····Miyoko UMEDA (77)

Traducción:

Fernando de Fuentes y otros: Las Aventuras de Pito Pérez(1) ·····Juzo KATAKURA (81)

1994

Asociación de Licenciados
Departamento de Estudios Hispánicos
Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto